沖縄県文化財調査報告書　第23集

恩納村熱田貝塚発掘調査報告書

－国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査－

1979年3月

沖縄県教育委員会

沖縄県文化財調査報告書　第23集

恩納村熱田貝塚発掘調査報告書

－国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査－

1979年3月

沖縄県教育委員会

序

本報告書は昭和 52 年度、沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部からの委託を受けて発掘調査した熱田貝塚の成果を収録したものであります。

国道 58 号の拡幅工事で、熱田貝塚が破壊されることになり、沖縄総合事務局と協議した結果、昭和 52 年度に発掘調査、53 年度に資料整理を行うことで合意し、これらの事業を実施してまいりました。

発掘調査によって平地式住居址や、刀子、類須恵器、石鍋、南宋白磁など沖縄の歴史を解明するのに重要な資料を多く得ることができました。これらの成果が、学術関係者はもちろん広く一般の人々にも活用されることを期待します。

おわりに、この発掘調査の実施は沖縄開発庁沖縄総合事務局および開発建設部の理解と協力のあったことを記して謝意を表わすとともに、恩納村当局をはじめ、発掘調査に協力していただいた関係各位にお礼を申し上げます。

昭和 54 年 3 月

沖縄県教育委員会

教育長　　前田　功

例　言

1. 本書は、沖縄県教育委員会が、沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部の委託を受けて、1978 度に実施した恩納村熱田貝塚の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集及び執筆は金武正紀・比嘉春美が行った。
3. 出土遺物の整理・実測などは次のメンバーで行った。

   実測：宮里末廣・田名末子・花城潤子・比嘉春美

   貝分類：比嘉春美・花城潤子

   写真撮影：金武正紀・宮城朝光・比嘉春美
4. 石質の同定は沖縄県立博物館学芸員　大城逸朗氏の協力を得た。

   記して謝意を表します。
5. 出土遺物は図と図版が対比してみられるように編集した。
6. 出土遺物は沖縄県教育庁文化課に保管してある。

本文目次

序
例言
第 1 章　はじめに・・・

＜図目次＞

第１図　熱田貝塚の位置 ---------- 2
第２図　熱田貝塚調査区の位置 ---------- 3
第３図　ハ地区層序 ---------- 5
第４図　ハ地区Ⅴ層範囲 ---------- 5
第５図　ハ地区南側柱穴 ---------- 6
第６図　ハ地区柱穴断面 ---------- 7
第７図　ホ・ヘ地区軽石集中・柱穴検出 ---------- 9
第８図　後期土器（1） ---------- 16
第９図　後期土器（2） ---------- 18
第10図　後期土器（3） ---------- 20
第11図　後期土器（4）壺・皿 ---------- 22
第12図　後期土器（5）底部 ---------- 24
第13図　後期土器（6）底部 ---------- 26
第14図　グスク土器（1） ---------- 30
第15図　グスク土器（2） ---------- 32
第16図　後期土器（7）完形 ---------- 34
第17図　類須恵器（1） ---------- 37
第18図　類須恵器（2） ---------- 38
第19図　類須恵器（3） ---------- 40
第20図　滑石製品 ---------- 44
第21図　白磁・青磁 ---------- 46
第22図　ヤコウガイ製貝匙 ---------- 50
第23図　ヤコウガイ有孔製品 ---------- 52
第24図　オオベッコウガサ製品 ---------- 55
第25図　クロチョウガイ有孔製品 ---------- 56
第26図　一括出土二枚貝有孔製品の法量 ---------- 59
第27図　二枚貝有孔製品層別平面分布 ---------- 60
第28図　二枚貝有孔製品 ---------- 61
第29図　貝製品（その他） ---------- 64
第30図　ゴホウラ ---------- 66
第31図　鉄製品 ---------- 69
第32図　羽口 ---------- 70
第33図　銭貨・簪・勾玉・煙管 ---------- 71
第34図　貝類層別棲息地比較 ---------- 72

＜図版目次＞

図版１　熱田貝塚付近 ---------- 1
図版２　ハ地区南側柱穴検出状況 ---------- 6
図版３　ホ・ヘ地区の調査状況 ---------- 10
図版４　ハ地区の調査状況 ---------- 11
図版５　遺物の検出状況 ---------- 12
図版６　後期土器（1） ---------- 17
図版７　後期土器（2） ---------- 19
図版８　後期土器（3） ---------- 21
図版９　後期土器（4）壺・皿 ---------- 22
図版10　後期土器（5）底部 ---------- 25
図版11　後期土器（6）底部 ---------- 27
図版12　グスク土器（1） ---------- 31
図版13　グスク土器（2） ---------- 33
図版14　後期土器（7）完形 ---------- 34
図版15　土器（後期有文・籾圧痕） ---------- 35
図版16　類須恵器（1） ---------- 37
図版17　類須恵器（2） ---------- 39
図版18　類須恵器（3） ---------- 41
図版19　滑石製品 ---------- 45
図版20　白磁・青磁 ---------- 47
図版21　ヤコウガイ製貝匙 ---------- 51
図版22　ヤコウガイ有孔製品 ---------- 53
図版23　オオベッコウガサ製品 ---------- 55
図版24　クロチョウガイ有孔製品 ---------- 57
図版25　二枚貝有孔製品（一括） ---------- 62
図版26　貝製品（その他） ---------- 65
図版27　ゴホウラ・アツソデガイ（分類） ---------- 67
図版28　石器 ---------- 68
図版29　銭貨・簪・勾玉・煙管 ---------- 71
図版30　貝類 ---------- 72
図版31　フジツボ ---------- 72

＜表目次＞

表１　ハ地区柱穴計測一覧 ---------- 8
表２　後期土器（有文）出土一覧 ---------- 13
表３　後期土器（無文）出土一覧 ---------- 14
表４　地区・層別底径と底厚の関係 ---------- 23
表５　土器底部出土一覧 ---------- 28
表６　グスク土器出土一覧 ---------- 29
表７　グスク土器出土量 ---------- 29
表８　類須恵器出土量 ---------- 36
表９　類須恵器観察一覧 ---------- 42
表10　滑石製品観察一覧 ---------- 43
表11　白磁・青磁観察一覧 ---------- 47
表12　貝製品地区別出土量 ---------- 48
表13　ヤコウガイ製貝匙観察一覧 ---------- 49
表14　ヤコウガイ有孔製品観察一覧 ---------- 53
表15　オオベッコウガサ製品出土量 ---------- 54
表16　オオベッコウガサ製品観察一覧 ---------- 54
表17　クロチョウガイ有孔製品観察一覧 ---------- 57
表18　二枚貝有孔製品出土量 ---------- 58
表19　二枚貝有孔製品観察一覧 ---------- 59
表20　その他貝製品観察一覧 ---------- 63
表21　ゴホウラ・アツソデガイ割れ方別出土量 ---------- 67
表22　石器観察一覧 ---------- 68
表23　鉄製品観察一覧 ---------- 69
表24　銭貨観察一覧 ---------- 70
表25　ハ地区Ⅲ層貝類出土量 ---------- 73
表26　ハ地区Ⅴ層貝類出土量 ---------- 75
表27　フジツボ出土量 ---------- 74
表28　C14測定結果 ---------- 77
表29　主要遺物の地区・層別出土 ---------- 77

第１章　はじめに

1、調査にいたる経緯

熱田貝塚は 1958 年に安富祖小中学校グランドの採砂工事のときに発見され、1960 年に琉球大学史学科の考古学実習として一部発掘され、1969 年の『沖大論叢』に高宮廣衛教授（現沖国大教授）が報告している周知の遺跡である。

国道 58 号の拡幅工事によって、熱田貝塚が破壊されることになり、破壊前に緊急発掘調査をして記録保存することになった。

沖縄県が沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部の委託を受けて、1978 年 1 月 25 日～3 月 30 日まで発掘調査が実施された。安富祖小中学校前の国道 58 号線の両側およそ 2.000 ㎡の面積を発掘調査した。

図版１　熱田貝塚付近

2、遺跡の概要

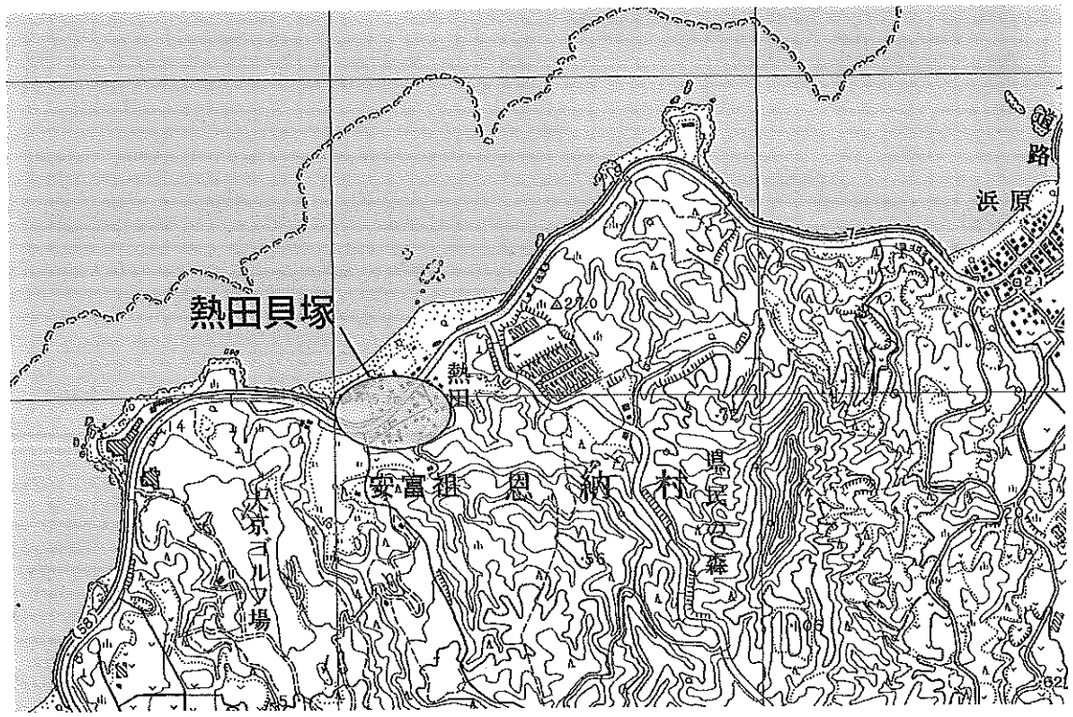
道路に沿った発掘地で、イ、ロ、ハ、ニ、ホ、への6地区に分けて発掘し、イ、ロからは遺物は検出されず、ニ地区は撹乱されて遺物は若干検出されるが、包含層は明瞭でない。

したがって、ハ、ホ、への3地区が主に発掘地区になった。

へ地区は名護行きのバス停一帯で、後期後半の土器が主で、グスク土器はほとんど見られない。類須恵器は2、3個検出された。

ホ地区は那覇行きのバス停一帯で、こちらでも主に後期後半の土器が検出され、グスク土器も少しは検出される。類須恵器も若干あり、開元通宝（2個）や刀子片などが共伴している。

へ地区とホ地区は出土遺物から考えるとへ地区が若干古いかと思われるが、生活面に軽石を敷いている点なども考慮に入れるとほぼ同時期の集落かと考えられる。



第1図　熱田貝塚の位置

ハ地区ではグスク土器が多く、類須恵器、石鍋、中国南宋白磁、刀子、勾玉などが第Ⅲ層から検出された。この第Ⅲ層は12世紀頃の集落でホ・へ地区より新しくなると考えられる。

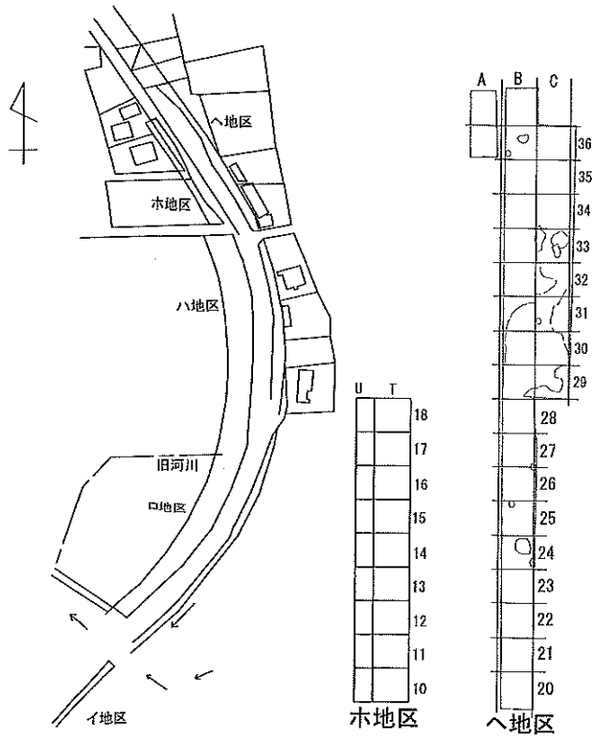
ハ地区では第Ⅲ層の下に白砂層（間層）があり、その下に第Ⅴ層がある。第Ⅴ層はハ地区全体にあるのではなく道路より（南側）にあって、学校側（北側）には延びてない。道路下に残っていると考えられる。

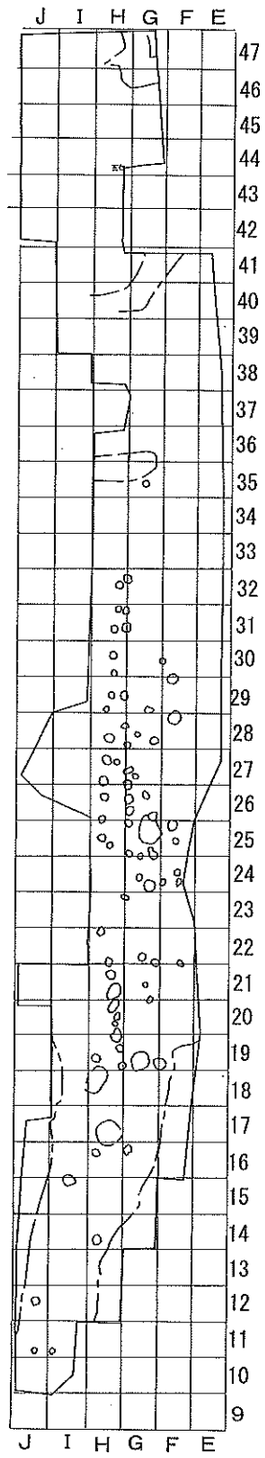
この第Ⅴ層は後期後半の貝塚で第Ⅲ層の貝塚より古い貝塚である。刀子、グスク土器も検出された。

3、調査区の設定

調査グリッドは2×2mで国道58号線に沿うように各地区とも概ね南北方向に長くなる。グリッドの呼称は東西にアルファベット、南北に算用数字を用いた。

ハ地区は東西にE~J、南北方向に9～47、へ地区は東西にABC、南北20~37、ホ地区は東西UT、南北に10～18と呼称した。





第2図　熱田貝塚調査区の位置

4. 調査体制

調査組織は次ぎのとおりである。

調査責任者　沖縄県教育委員会　教育長　前田　功

総　　務　沖縄県教育庁文化課

調　査　員　沖縄県教育庁文化課専門員　金武正紀

沖縄国際大学 OB　宮城朝光

〃　比嘉春美

調査参加者　島袋友道、宮里末廣（以上　沖縄大学学生文化協会）

阿利直治、盛本勲、島袋洋、湖城清、比嘉栄哲、奥間尚、下地安広

金城亀信、大城明子（以上　沖縄国際大学考古学研究室）

発掘作業員　東キヨ、東タケ、石川、上里、荻堂、奥間さえ、喜久山、喜名、久場光彦、

幸地、古波蔵、田仲、当山ハル、仲松弥健、仲西美佐子、平田、

真栄城徳二、真栄城フミ、松茂良、与座

調 査 指 導　田辺昭三（奈良大学教授）

亀井明徳（九州歴史資料館）

高宮廣衛（沖縄国際大学教授）

第２章　調査成果

1. 層序

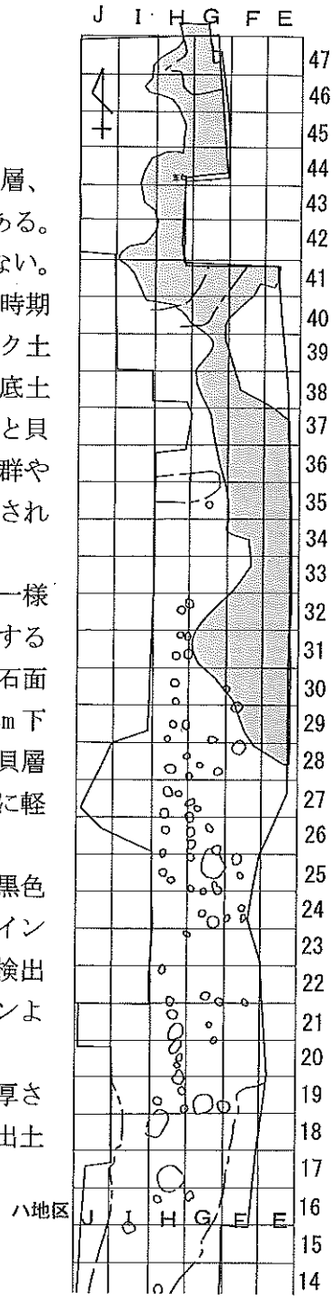
ハ地区はⅠ層～Ⅴ層まで確認され、遺物包含層はⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層である。Ⅲ層はほぼ全面で確認され、厚さはほぼ 30cm である。Ⅳ層とⅤ層はハ地区の中央は 27 ラインより、南には見られない。

したがって、ハ地区の北側では上部のⅢ層とⅣ・Ⅴ層には時期差が想定される。出土遺物をみると上部のⅢ層は上部でグスク土器、玉縁白磁碗、類須恵器、滑石製石鍋、下部ではくびれ平底土器や貝製品が得られた。下部のⅣ層とⅤ層からは多くの土器と貝製品が得られた。遺構についてみるとⅢ層からは列状の柱穴群や炉址、北側のⅤ層検出部分では落ち込みらしきものもが検出されたが、時間的都合上、明瞭なプランは確認できなかった。

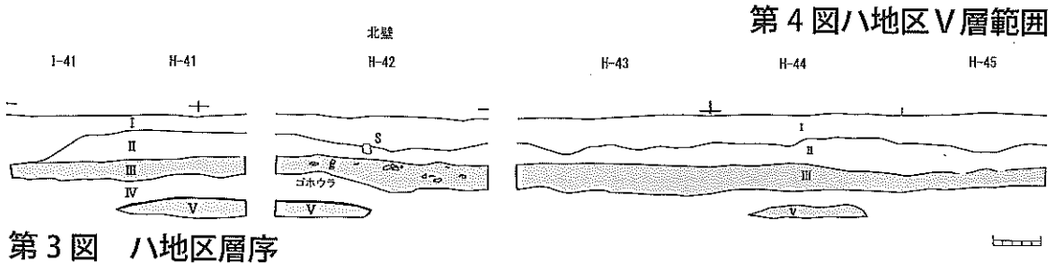
ホ地区はⅠ層～Ⅲ層が確認された。Ⅲ層は黒色砂層でほぼ一様に 30cm 検出された。上部からはグスク土器、類須恵器が出土することからハ地区からの延長と考えられる。Ⅲ層 10cm からは軽石面も検出され、その状況はヘ地区の北側と同じ状況である。30cm 下からは白色砂層が検出される。Ⅲ層はサラサバティラなどの貝層面が検出され、さらに掘り進むと 10～20cm のレベルで部分的に軽石が検出された。

ヘ地区　Ⅰ層～Ⅲ層が確認された。遺物包含層はⅢ層で、黒色砂層で 0～20cm の範囲で検出された。土器は主に B・C-28 ラインより以北で出土し、軽石面も部分的に検出された。ホ地区で検出された軽石面は本地区の北側でも確認された。Ⅲ層、28 ラインより以北に確認される。

ニ地区はⅠ～Ⅱ層が確認された。Ⅰ層は表土層で、Ⅱ層は厚さ 80cm まで掘り下げ、青磁や類須恵器、土器、ゴホウラなどが出土しているが、遺物の包含量が少なく試掘にとどめた。



第４図ハ地区Ⅴ層範囲



第３図　ハ地区層序

2. 遺構

a. ハ地区遺構

砂層面に 12 cmから 59 cmの落ち込みが検出された（第 4 図）。

南北に直線状に並ぶ柱穴群が複数列確認された。一辺が 6m 前後で方形のプランが想定される。

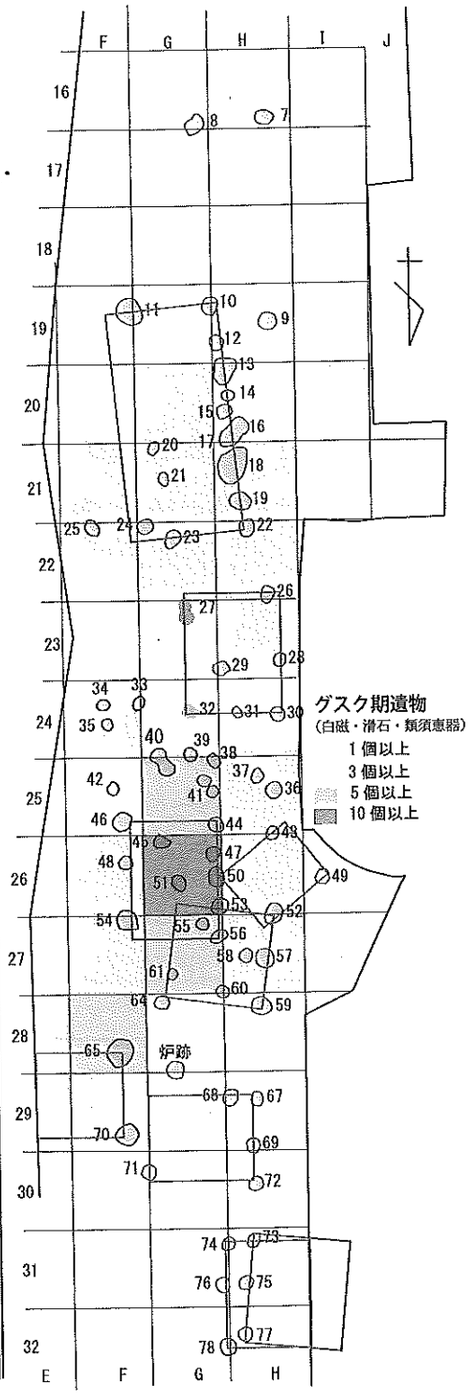
第 5 図に類須恵器、白磁、滑石製石鍋などのグスク期の遺物の出土状況を示した。これによると G-21・26, F-28 に多く出土する。柱が検出される場所とも一致する。

図示は省略したが 16 ラインより南側でも直線状に並ぶ柱穴（写真）が検出され、いくつかのプランが想定される。

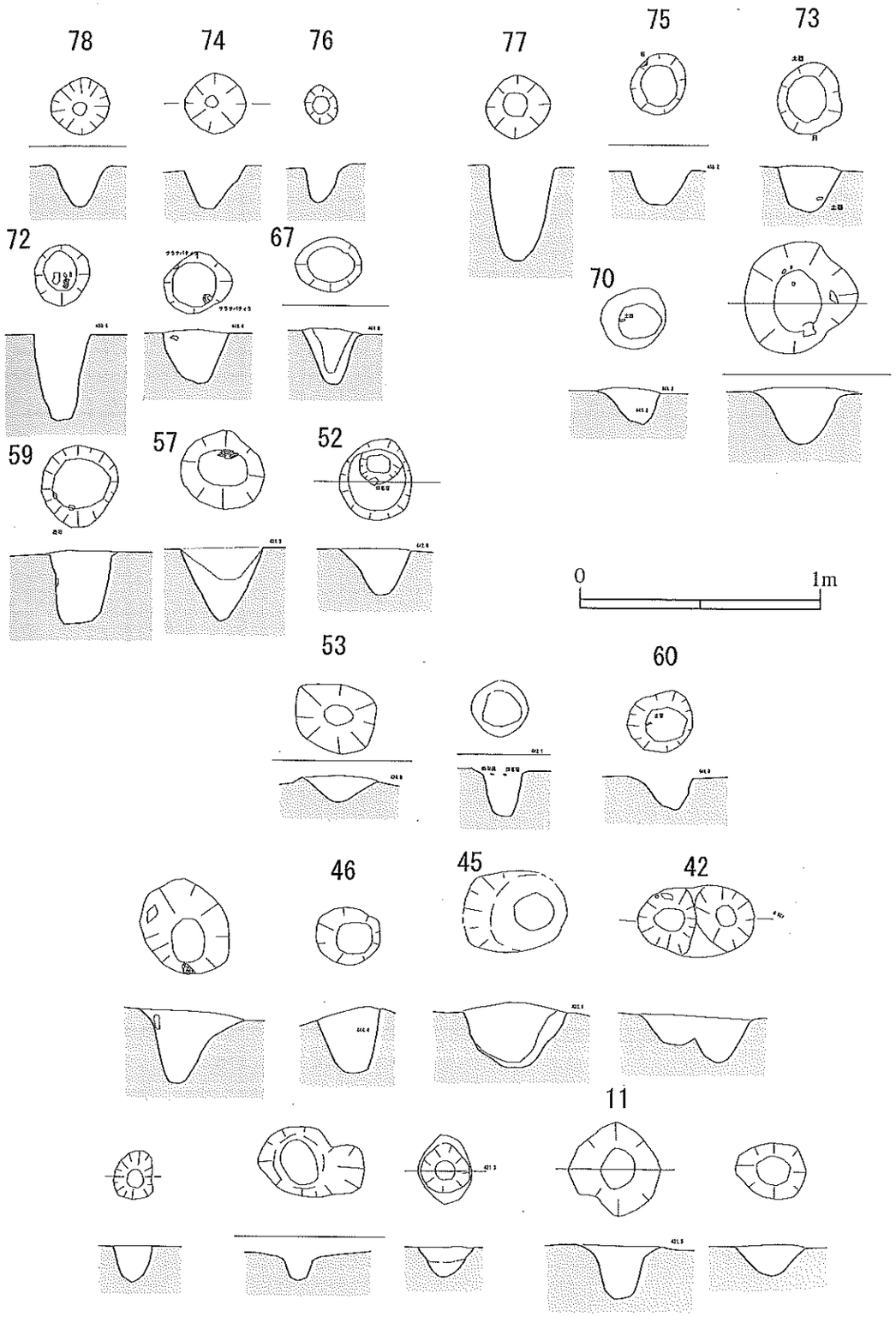
また、G-28 では炉址も検出されている。これらはいわゆる「掘立柱建物址」である。

他にホ・ヘ地区でも柱穴らしきものが検出されている。

図版 2　ハ地区南側柱穴検出状況



第 5 図　ハ地区南側柱穴



第6図　ハ地区柱穴断面

表1　ハ地区柱穴計測一覧

単位:cm

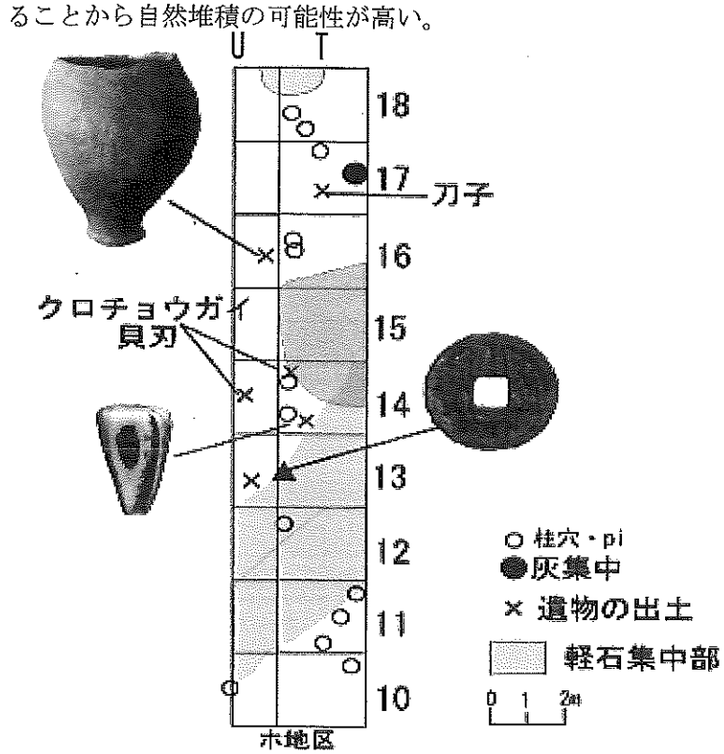
柱穴番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	幅	深さ	遺物・備考
6	I-16	19	17	
7	H-16	40	11	
8	G-16	55	26	黄褐色
9	H-19	45	9	
10	G-19	48	21	
11	F-19	63	35	
12	H-19	46	20	黄褐色
13	H-20	46	21	
14	H-20	32	23	白砂
15	H-20	47	24	
16	H-20	41	19	
17	H-21	41	17	
18	H-21	80	12	
19	H-21	59	27	
20	G-21	36	26	
21	G-21	42	12	
23	G-22	47	46	
24	G-22	47	9	
25	F-22	75	25	刀子
26	H-22	45	23	
27	G-23	43	19	
28	H-23	40	31	軽石、ﾏｶﾞｷ
29	H-23	29	26	
30	H-24			
31	H-24	40	29	
32	G-24	40	11	
34	F-24	42	16	
35	F-24	38	9	
36	H-25	43	41	ｼｬｺ
37	H-25	50	13	
38	G-25	37	20	
39	G-24	41	39	

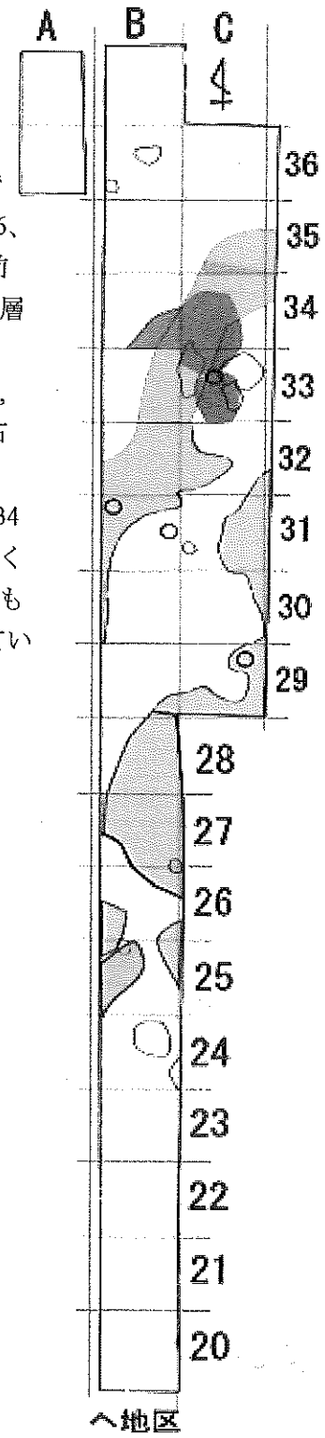
柱穴番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	幅	深さ	遺物・備考
40	G-25	71	12	
41	G-41	31	19	
42	F-25	39	30	
43	H-26	30	14	
44	G-25			
45	G-25	70	44	くびれ平底
46	F-25	43	43	
47	G-26	52	31	柱痕
48	F-26	57	49	
50	G-26	50	44	須恵器、鉄器、くびれ平底
51	G-26	53	31	
52	H-27	55	31	須恵器、
53	G-27	53	17	くびれ平底
54	F-26			
55	G-27		45	
56	G-26		17	
57	H-27	57	49	くびれ平底
59	H-28	51	48	
60	G-28	44	23	
65	F-28	69	37	
67	F-65	43	36	
68	H-29	75	36	
69	H-30	46	34	くびれ平底
70	F-29	53	46	くびれ平底
72	H-30	41	59.2	
73	H-31	40	28	
74	H-31	40	26	
75	H-31	35	23.2	
76	G-31	20	24	
77	H-32			
78		35	25	
		37	16.9	

b．ホ・ヘ地区遺構

第7図に示したようにホ・ヘ地区から軽石集中部分が検出された。軽石の集中する場所はホ地区ではU-10からT-12の南西～北東方向に幅1mに帯状に伸びる。軽石の大きさ2-3cmで貝層面の下部から検出され、さらに掘り下げると地山の白砂層に達する。ホ地区ではほかにT-17で径10cmの灰層が東壁側で検出された。ほかに黒褐色の落ち込みがT-17、18に3個、T-16、T-10、T-11でも検出された。これらの検出面の標高は301cm前後である。ホ地区の最下層からは壺形土器の完形、イモガイ体層研磨製品、開元通寶、刀子などが出土している。

ヘ地区の軽石集中部も黒砂褐色砂層除去後検出された。B-25, 26、27、A-36の北側部分でホ地区と同じように2-3cm大の軽石が集中して検出された。B-30では軽石が西側に特に厚い。B-35,33はホ地区と同じように南西-北東方向に伸びる。B-33・34は特に軽石が楕円状に密集し、住居址を想起させるが類例がなくはっきりしない。軽石の集中は報告例がなく、楕円状の人工的ものと、ホ・ヘ地区にまたがるように北東-南西に帯状に堆積していることから自然堆積の可能性が高い。

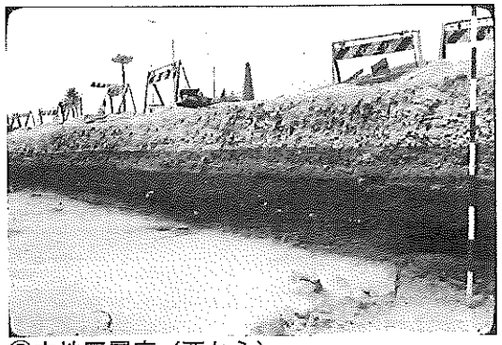




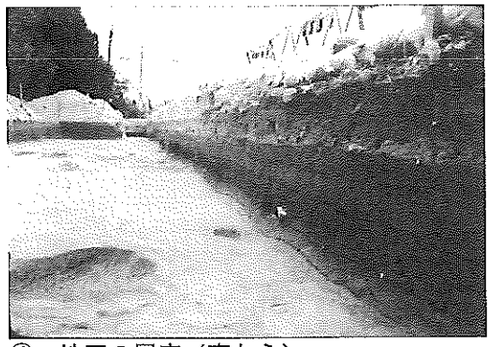
第7図　ホ・ヘ地区軽石集中・柱穴検出

①各地区（南から）

②ホ地区（北から）


③ホ地区層序（西から）

④ヘ地区の層序（北から）


④ヘ地区の層序（東から）

図版３　ホ・ヘ地区の調査状況

①発掘前（熱田小中学校校門）

②ハ地区（熱田小中学校内から）

③ハ地区伐採後

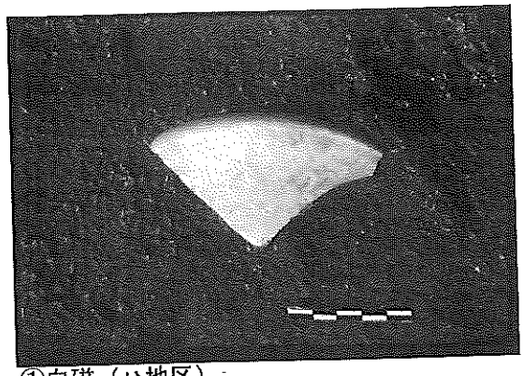
④Ⅲ層の検出

⑤Ⅲ層の柱穴（掘立柱建物）

⑥Ⅴ層面

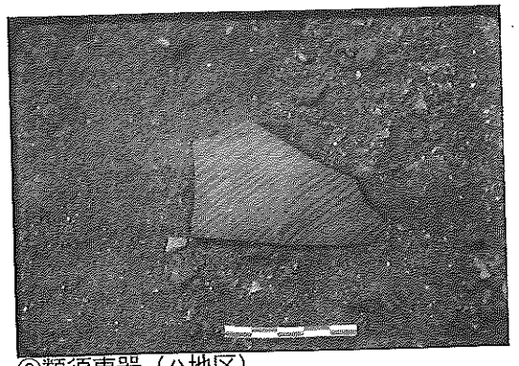
⑦Ⅴ層下部貝層

図版４　ハ地区の調査状況



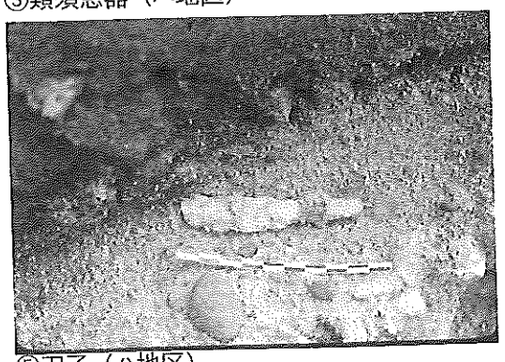
①白磁（ハ地区）

②滑石製石鍋（ハ地区）



③類須恵器（ハ地区）

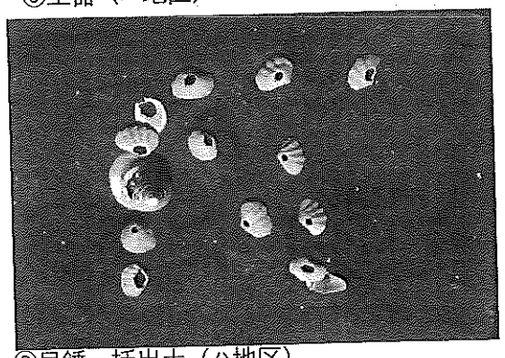
④銭貨（ホ地区）



⑤刀子（ハ地区）

⑥土器（ハ地区）

⑦完形土器（ホ地区）



⑧貝錘一括出土（ハ地区）

図版 5 遺物の検出状況

3．出土遺物

本貝塚から出土した遺物は後期の土器や貝製品、石器、グスク時代の土器、類須恵器、滑石製品、白磁、青磁、鉄製品、羽口、銭貨、簪、勾玉、煙管などの人工遺物のほか食料としての貝類や骨類などが得られた。今回は骨類以外について報告する。以下、それぞれの遺物について略述する。

A．土器

土器は前述したように後期土器とグスク土器があり、後期土器には有文と無文があるが、有文の割合は１割程度である。口縁部は外反と直状が多く、底部はくびれ平底が主体をなす。

①後期土器

図 1～24 は有文土器である。

文様の種類には、幅広沈線文、沈線文、凸帯文、刻目文があり、これらを組み合わせて、施文している。

図 1～8 は沈線文を施すもので。図 1 は推定口径 28.0cm の深鉢で幅広沈線文を鋸歯状、図 2 は沈線文を横位と縦位に、図 3 は推定口径 19.0cm で文様は不定形の沈線文である。図 5･6 は小ぶりの土器で鋸歯と横位を組み合わせて施文するものである。

図 10 は内部有段の口縁部で内唇部分に刻目文が施されている。

図 10～17、19～20 は凸帯文と刻目文あるいは沈線文を組み合わせるもので凸帯文上に刻目文を施すものと無文がある。

凸帯文は横位に囲繞するものは少なく「U」・「V」字状に施すものが多い。

図 18、21～24 の刻目文は横位に囲繞するもので、口縁部との間に沈線文を斜位に施す。これらの土器は小ぶりな土器が多く、器面調整もの丁寧である。

そのほかに口唇に刻目を施したものや有段口縁や双状突起の口縁（図版 15）も出土している。

表2　後期土器（有文）出土一覧

no.	部位	文様	出土地
1	口縁部	沈線文（鋸）	ハF-35Ⅴ10/20
2	口縁部	沈線文（縦横）	ヘB-37Ⅲ20/
3	口縁部	幅広,沈線文（不定）	ハF-37Ⅴ10/20
4	口縁部	沈線文（不定）	ハG-37Ⅳ0/10
5	口縁部	沈線文（直鋸）	ホT-13Ⅱ10/20
6	胴部	沈線文	ホT-13Ⅲ0/10
7	口縁部	口唇-刻目文、沈線文（不定）	ハF-19Ⅲ0/10
8	口縁部	沈線文（不定）	ホT-12Ⅳ0/10
9	口縁部	内唇-刻目文	ハJ-42Ⅲ
10	口縁部	凸帯文+刻目文（縦）	ハJ-45Ⅲ10/20
11	胴部	凸帯文+刻目文（縦･横）	ハH-43Ⅲ0/10
12	胴部	凸帯文+刻目文（縦）	ハH-43Ⅲ10/20
13	口縁部	凸帯文（縦）	ハF-16Ⅱ
14	胴部	凸帯文+刻目文（曲）	ホU-12Ⅲ0/10下
15	口縁部	鞍凸帯文（U）	ホT-15Ⅲ10/20上
16	口縁部	鞍凸帯文（縦）	ホT-15Ⅲ10/20
17	口縁部	鞍凸帯文（外縦+内斜）	ハE-28Ⅴ0/10
18	口縁部	刻目文（横）,突起（双）	ハH-44Ⅲ0/10
19	口縁部	凸帯文（V）+幅広沈線文（横）	ホU-12Ⅲ0/10下
20	口縁部	凸帯文（逆V）、沈線文（横）	ハE-30Ⅴ0/10
21	胴部	刻目文（横）	ホU-10Ⅲ0/10
22	口縁部	沈線文（縦）,刻目文（横）	ハF-37Ⅴ10/20
23	口縁部	沈線文（斜）,刻目文（横）,ロ-山形	ハF-37Ⅴ10/20
24	口縁部	沈線文（斜）,刻目文（横）,ロ-山形	ハG-37Ⅴ0/10

文様構図-（縦）-縦位,（横）-横位,（V）-「V」字状,（U）-「U」字状

・無文

浅鉢、深鉢、壷、皿、注口などの器種が見られる。

a. 浅鉢（図 25・26）は口径が 18.8cm、21cm を測る。

b. 深鉢

器厚が 6～8mm の厚手と 4～5mm の薄手があり、口縁部の傾きの度合いで細分される。

＜厚手＞

・逆「く」字状に湾曲し、口縁部分が膨らむ玉縁を呈するもの（図 28・29）

・口縁が直状で、胴部が若干膨らむもの（図 27）、外反するもの（図 30・31・32）

図 31 は屈曲部に粘土紐を貼り付け補強する。完形 5　も同じような形態である。

・口唇が外面に屈曲するもの（図 33・34）、

・外反が強く、口縁部断面が舌状を呈するもの（図 36）

・外反し、胴部が張るもの（図 36・37・38・40・42）、有孔 42 で 5cm、

＜薄手＞

・外反が強いもの（図 39・43）

・やや外反するもの（図 44・45）

・胴部が膨らむ（図 46）

c. 壷

短頸・長頸がある。

・短頸は外反するもの（図 47・48）と直状（図 49）がある。

・長頸（図 50・51）がある。

短頸の外反するものはいずれも文様が施され、図 47 は縦位に凸帯文＋刻み目、図 48 は頸部に平行に刻目文と沈線文を施し、刻目文の部分はやや厚い。

直状のものは厚手で胴部はかなり張るものである。

長頸は口径が 6cm 前後である。

表3　後期土器（無文）出土一覧

no.	器種	部位	口径	器厚	出土地
25	浅鉢	口縁部	18.8	7	ハI-14Ⅲ0/10
26	浅鉢	口縁部	21	5	ハI-46Ⅳ0/10
27	深鉢	口縁部	14	4	ハHJ-43Ⅲ10/20
28	深鉢	口縁部	19	7	ホT-16Ⅲ3/4
29	深鉢	口縁部	－	7	ホT-10Ⅳ0/1
30	深鉢	口縁部	20	6	ハI-43Ⅲ落込
31	深鉢	口縁部	19.8	6	ハG-41Ⅴ0/10
32	深鉢	口縁部	20.2	6	ハH-44Ⅳ0/1
33	深鉢	口縁部	－	7	ホT-13Ⅲ0/10下
34	深鉢	口縁部	－	8	ホU-17Ⅲ10/20下
35	深鉢	口縁部	17.4	8	ホU-17Ⅲ
36	深鉢	口縁部	14.6	6	ホT-18Ⅲ20/30上
37	深鉢	口縁部	15	6	ハH-49Ⅲ
38	深鉢	口縁部	17	7	ハH-43Ⅲ10/20
39	深鉢	口縁部	21.2	5	ヘC-32Ⅲ10/20
40	深鉢	口縁部	－	8	ヘC-33Ⅲ10/20下
41	深鉢	口縁部	－	6	ホU-13Ⅲ20/30下
42	深鉢	口縁部	－	6	ハE-30Ⅴ0/10
43	深鉢	口縁部	－	5	ヘB-24Ⅱ20/30下
44	深鉢	口縁部	－	6	ヘB-26Ⅲ0/10
45	深鉢	口縁部	15	5	ホT-16Ⅲ20/30
46	深鉢	口縁部	11.4	4	ヘA-36Ⅲ10/20
47	壷	口縁部	6.2	6	ハH-44Ⅲ10/20
48	壷	口縁部	6.2	5	ハH-47Ⅴ0/10
49	壷	口縁部	4.8	9	ホT-14Ⅲ3/4
50	壷	口縁部	7	6	ヘB-31Ⅲ0/10
51	壷	口縁部	5.9	5	ホU-18Ⅲ10/20下
52	注口	口縁部	－	5	ハI-41Ⅲ10/20
52	注口	口縁部	－	5	ホT-15Ⅲ
53	皿	口縁部	12	5	ハI-43Ⅲ10/20

d. 皿

図 53 は口径 12.0cm を測り、口縁断面は舌状を呈する。やや泥質である。

e. 注口

図 52 と写真 52a が確認できた。薄手で、口縁の一部が角をなすものである。

・完形（復元）土器

第 16 図と図版 14 に復元された土器を掲げた。

図 1 は直状の浅鉢としたが、厚手で、口縁部分は疑似口縁の可能性も考えられ、深鉢の口縁部分欠損したとも考えられる。口径 13.4cm、器高 9.4cm、底径 5.4cm を測る。ハ地区 G-37 Ⅳ層 0/1 の出土。

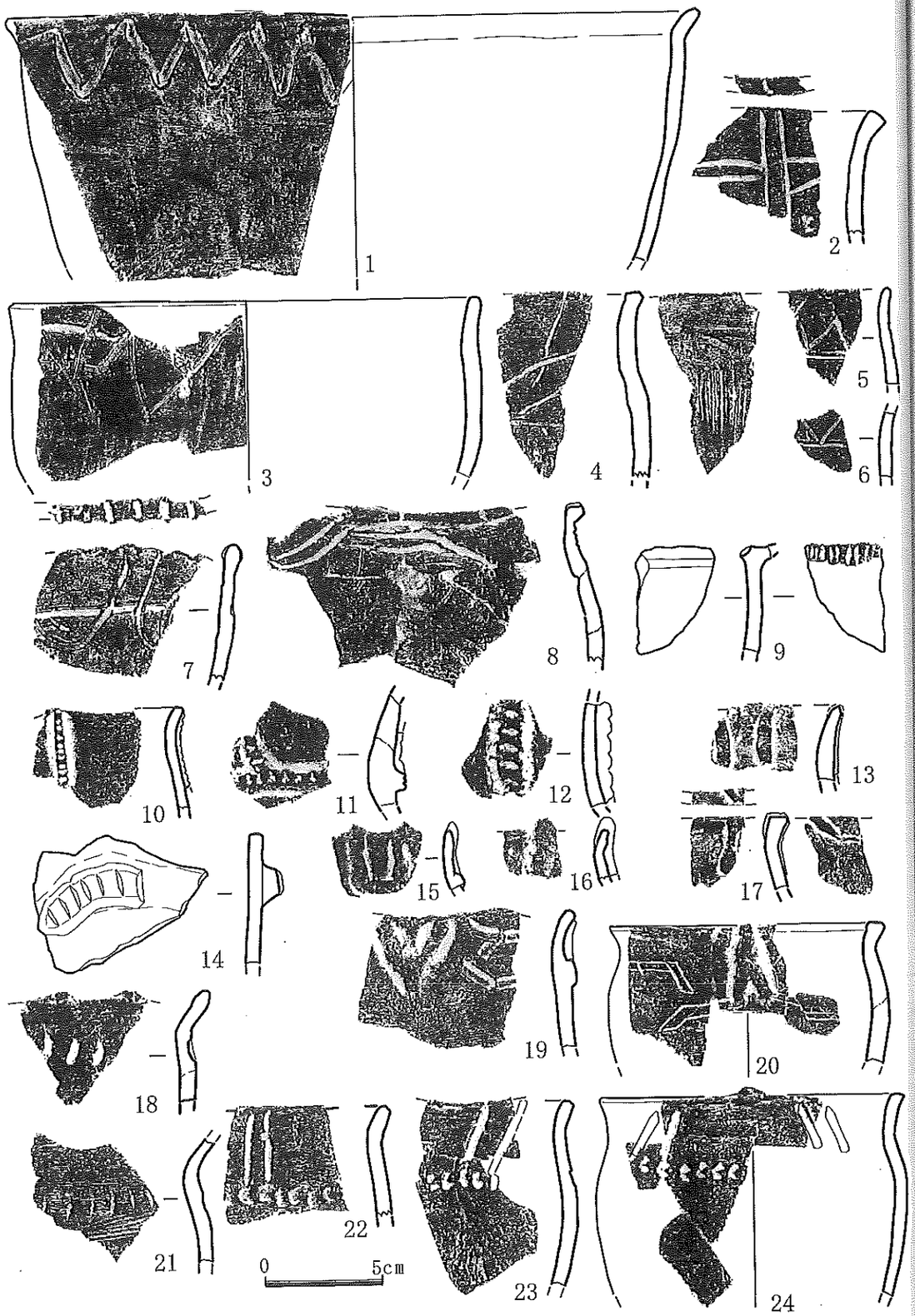
図 2 はで小型の土器で、胴部が張るものである。図版では口縁部分も復元した。

口径 15.0cm、最大胴径 16.0cm、器高 14.0cm、底径 5.8cm を測る。H-37+G-47Ⅴ層 0/1 の出土。

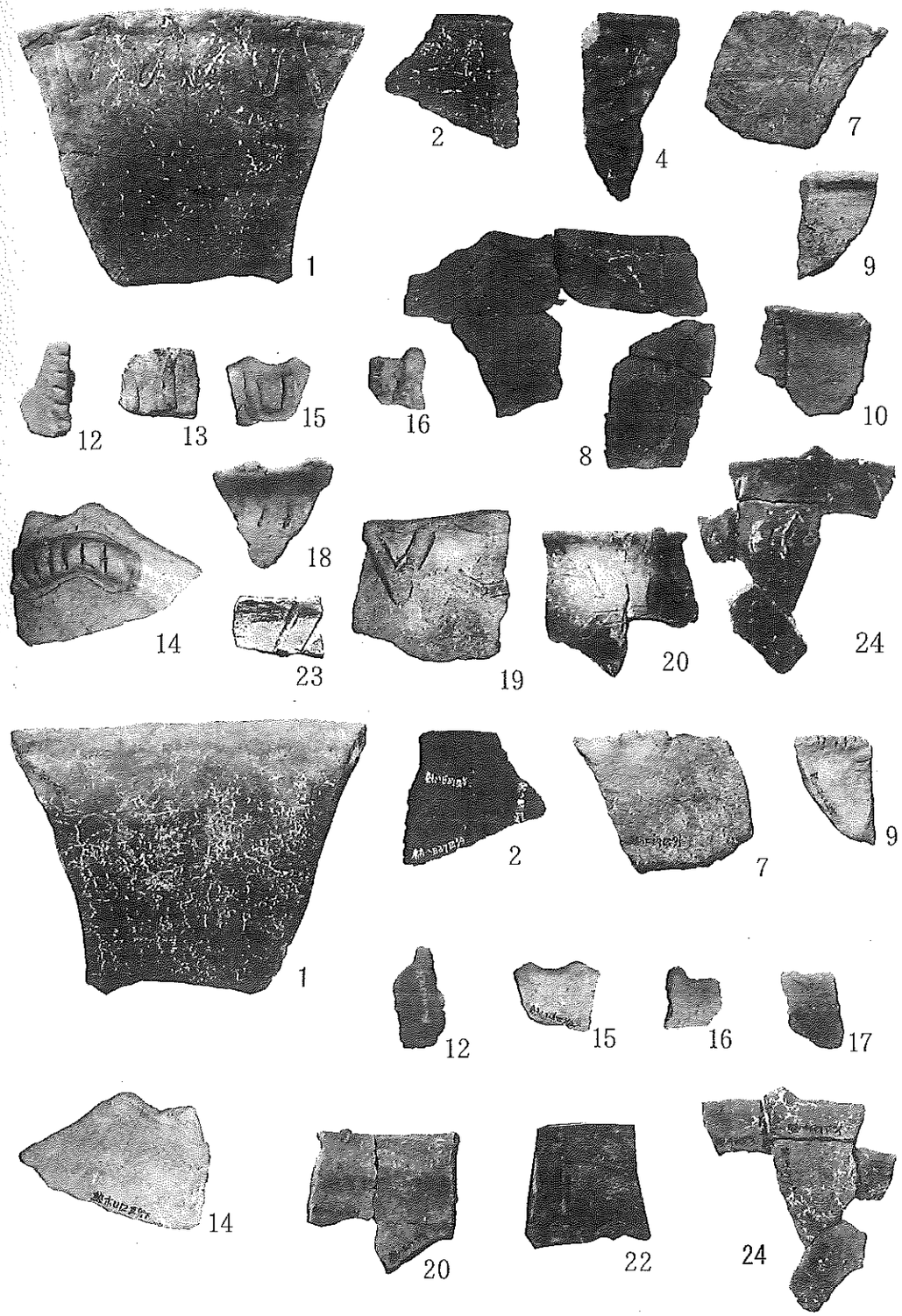
図 3 は寸胴のタイプの土器で、口縁部分は不明である。胴径 14.0cm、底径 6.8cm を測る。長頸壷とも考えられる。ハ地区の出土。

図 4 は外反口縁の土器で口径と胴径がほぼ同じである。ハ地区の出土。

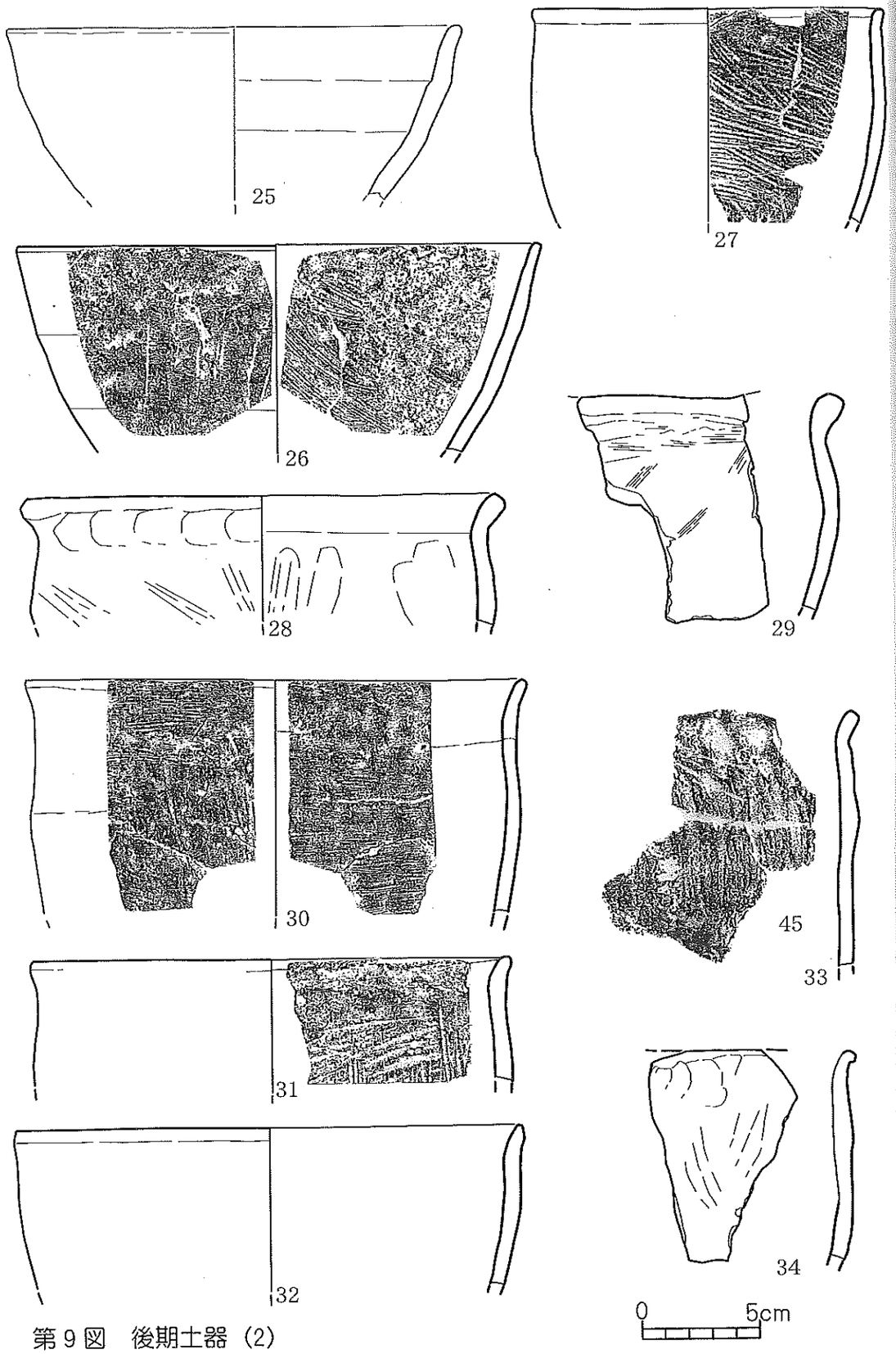
図 5 はホ地区で唯一完形の土器である。疑似口径 8.5cm、最大胴径 11.2cm、底径 4.0cm を測る。胴部の張りが強く、疑似口縁である。図 3 と同様、長頸の壷の可能性が高い。U-16 Ⅲ層の出土。



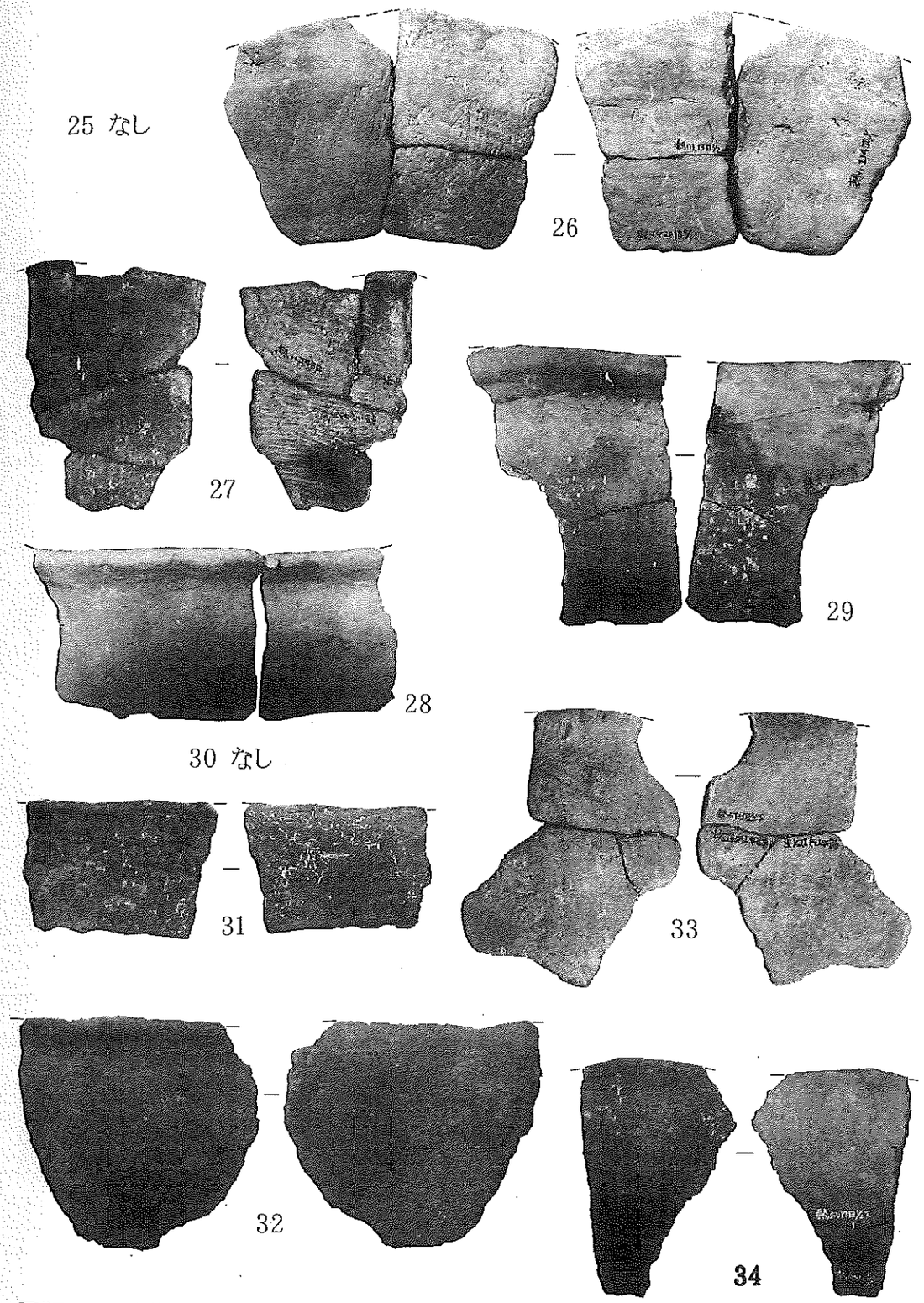
第８図　後期土器（1）



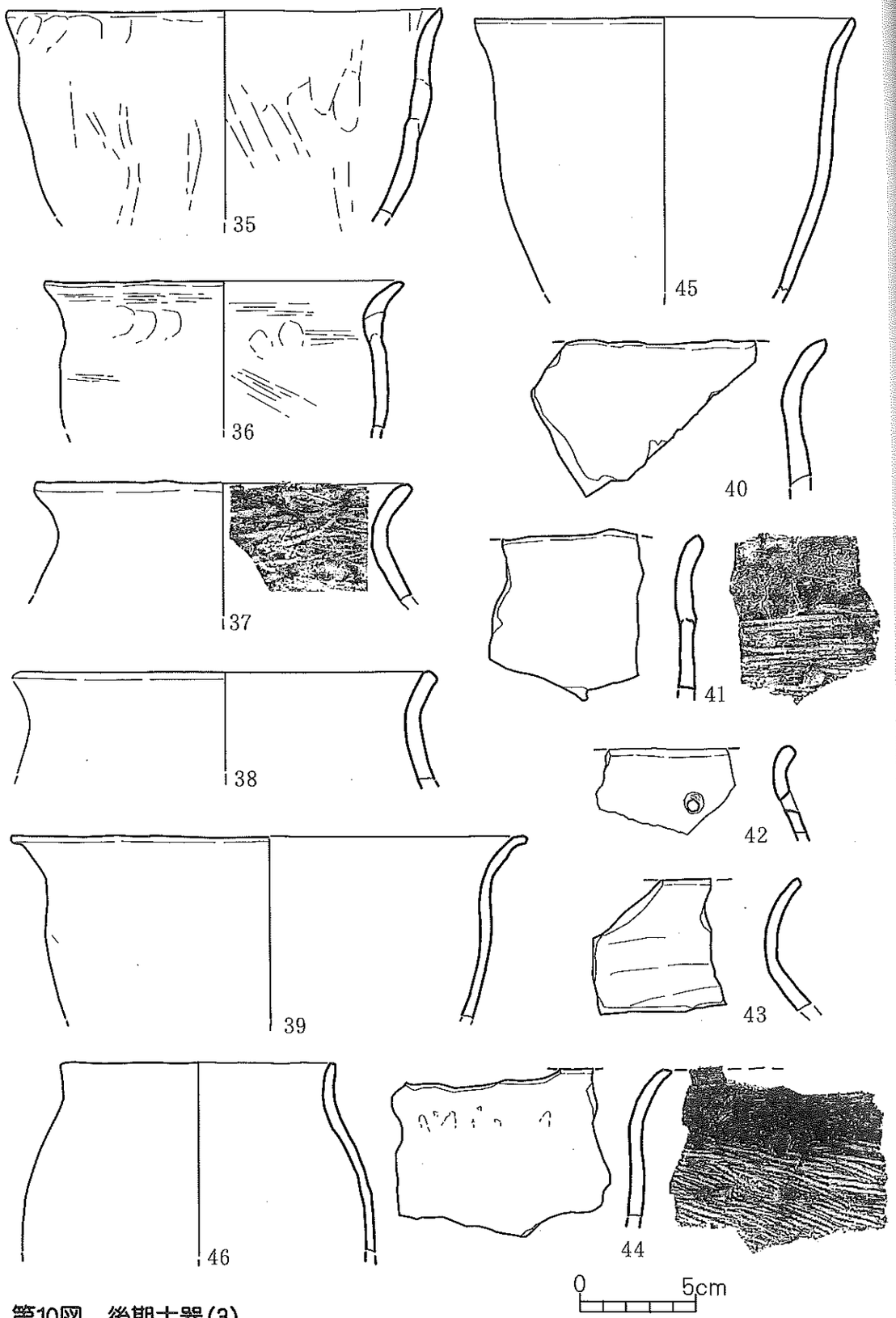
図版６　後期土器（1）有文（上：外面、下：内面）



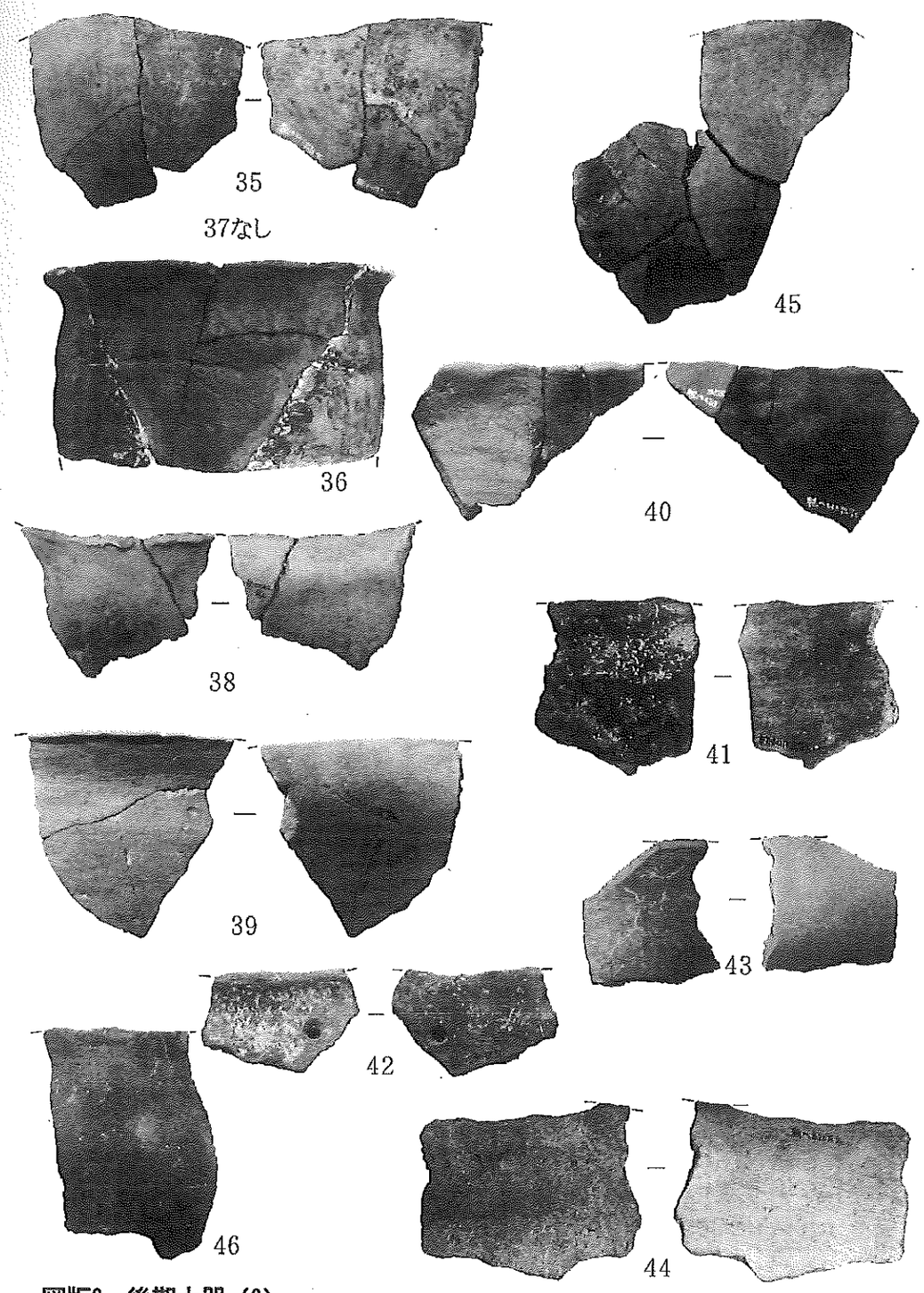
第９図　後期土器（2）



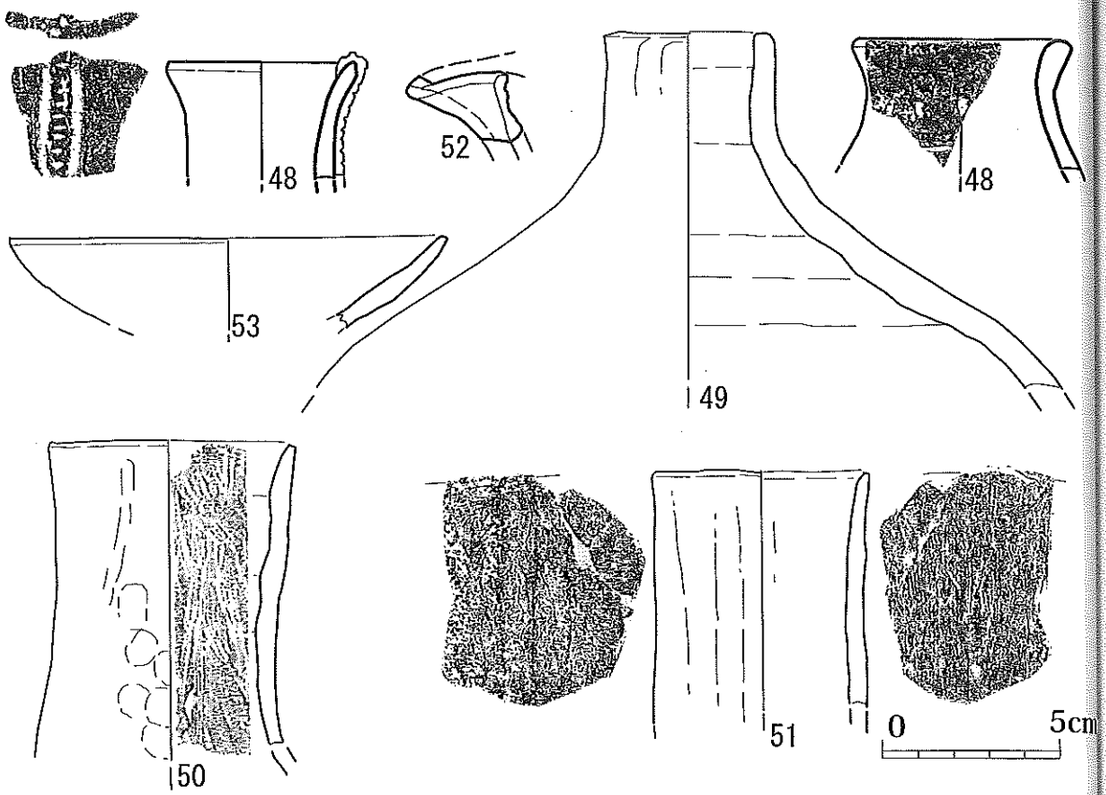
図版７　後期土器　(2)



第10図　後期土器(3)



図版8　後期土器（3）



第11図　後期土器（4）壺・皿

図版9　後期土器（4）壺・皿

<底部>

グスク土器以外の底部はハ地区で底部255点、ホ地区で78点、ヘ地区で34点、ニ地区で9点の計376点出土した。そのうち、79点を第12〜13図に図化し、出土一覧を表5に示した。

各地区の層序別の出土状況をみるとハ地区ではⅤ層で28点（17、39、51 、52、54、67、77、79）Ⅳ層で15点（32、55、71）、Ⅲ0〜10（20）で101点（3、5〜10、12、14、16、19、20、23、26、28、30、31、38、46、47、48、50、56〜58、60、61、65、70、74、76）、攪乱1点、レベルなし10点、10〜20cmで65点（2、4、15、34、35、36、37、41、42、44、45、49、59、63、69、72、73）、20〜30cmで2点（25、62）、柱穴で5点（11、33）の出土である。また、Ⅱ下部で6点、Ⅰ・Ⅱ層で9点（1、18、24、29、64）得られた。いずれもⅤ層の確認される北側である。

ホ地区ではⅣ層で1点、Ⅲ層で67点（21.22.53）、Ⅱ層で8点、柱穴で1点、不明1点の計77点出土した。

ヘ地区ではⅡ層6点、Ⅲ層で28点（13、78）の計34点の出土である。

ニ地区では、すべてⅡ層の出土でその深さは0〜60cmの範囲である。

底部の大きさでみると5.0cm台が108点で最も多く、次ぎに6.0cm台が70点、4.0cm台が51点で大部分は4.0〜6.0cm台に集中する。

底面の厚さは0.5〜2.8cmまであるが、0.5〜1.9cmの厚さでは6.0cm台が多く、次ぎに7.0cm台、5.0cm台と続くが、2.0cm台は4.0cm、3.0xm台が多い、つまり、底径が小さいほど底部の厚さが厚くなる傾向がある。

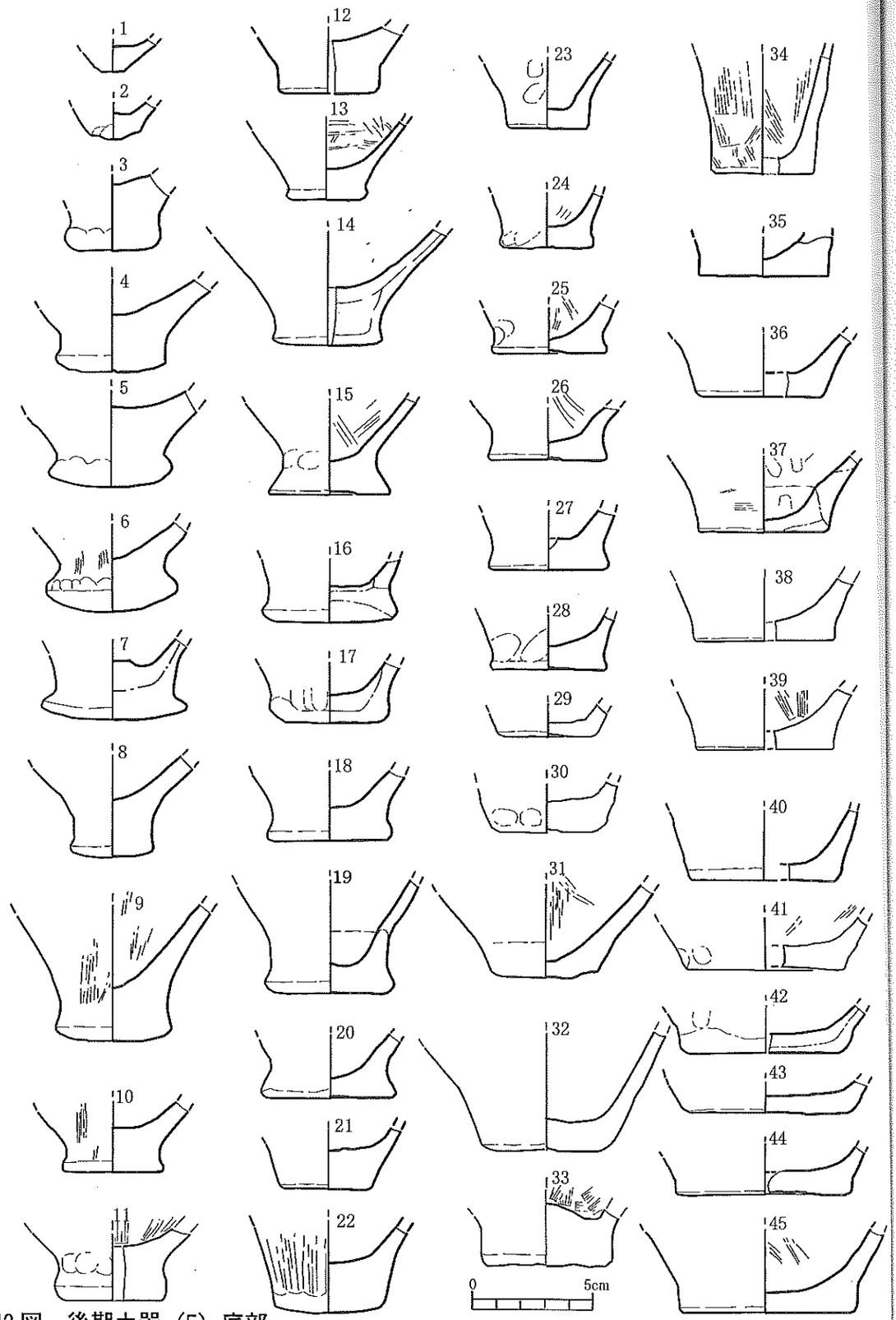
土器の胎土をみると鉱物混入（図7・39）、白粒混入（図）44が見られるが、そのほとんどは砂粒や石英混入である。

器面調整をみるとくびれ平底土器の外面のくびれの部分は主にユビで調整するのが主で、内面はヘラやハケナデで調整されている。しかし、底径の小さいものは尖底土器に近く、ハケによる調整も見られる。

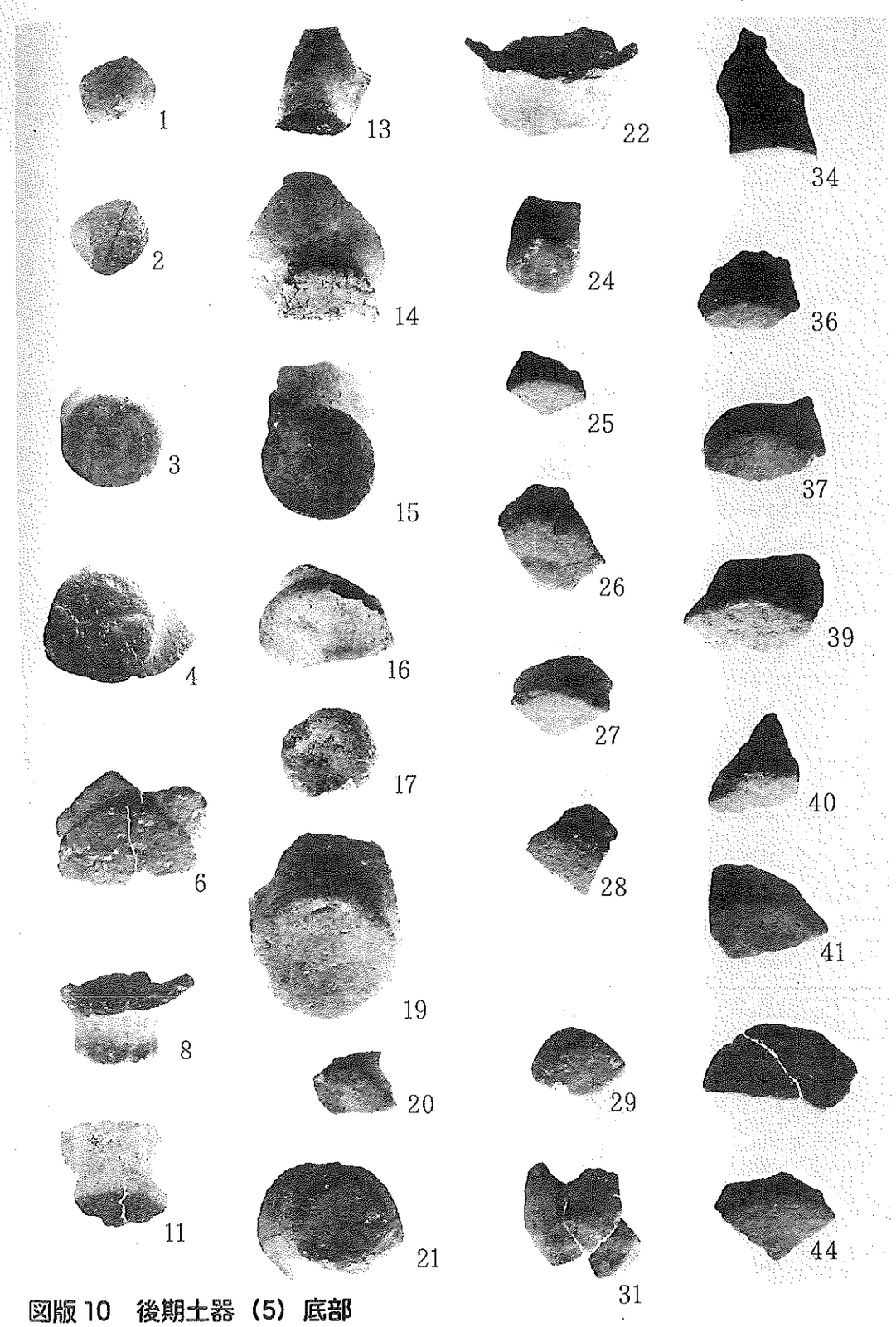
焼成についてみると図 5・8 は脆く、図1〜3、30、41, 71はやや脆く、そのほか、焼成は良好である。

表4　地区・層別底径と底厚の関係

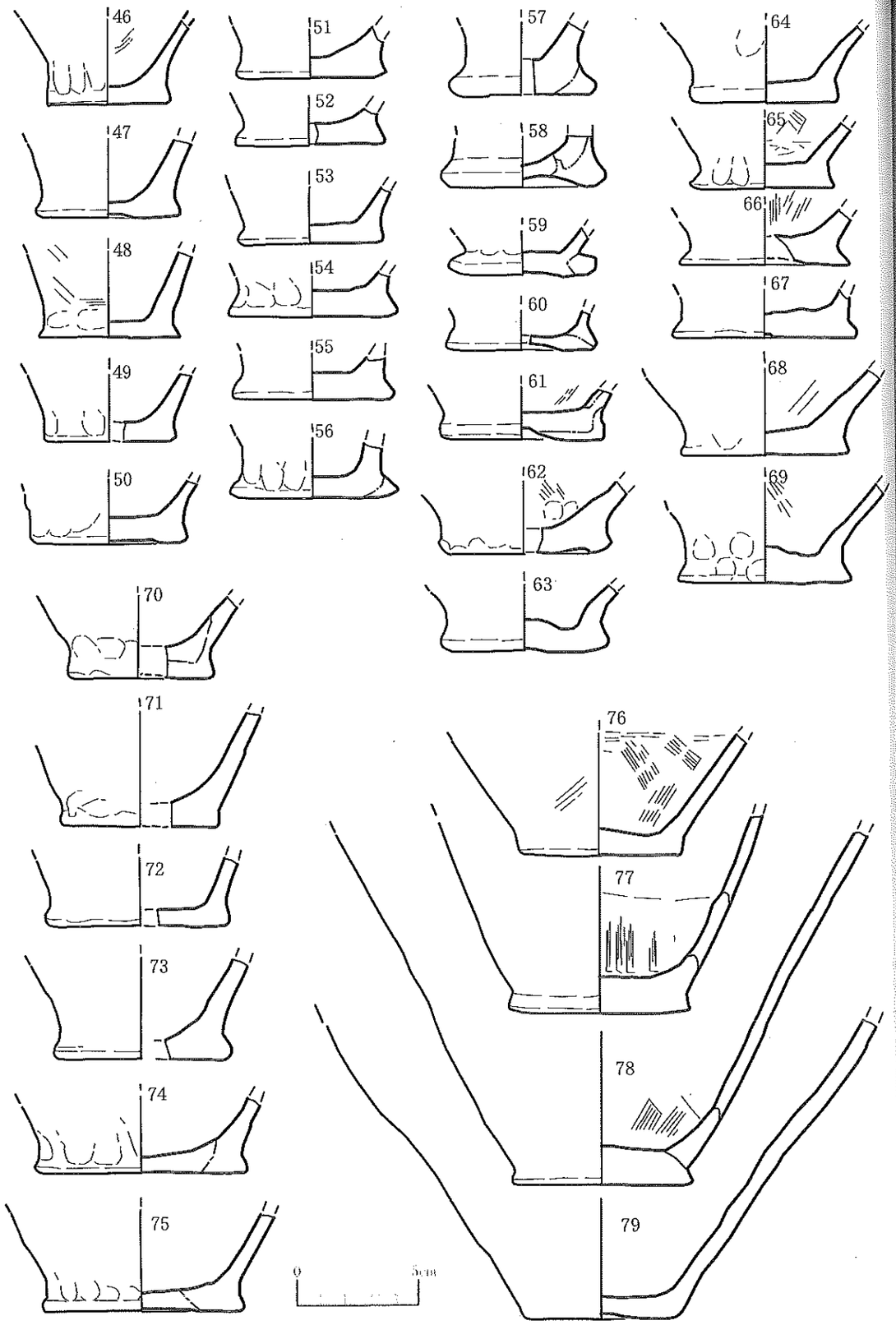
底径	底厚	ハ Ⅰ・Ⅱ	ハ Ⅲ 9/10, 8/10	ハ Ⅲ 1/2, 2/3	ハ Ⅳ	ハ Ⅴ	ホ Ⅱ	ホ Ⅲ	ホ Ⅳ	ヘ Ⅱ	ヘ Ⅲ	ニ Ⅱ	合計
計測不可		15	28	25	3	5	2	18		1	8	9	114
1.0〜3.9	1・2	1	5	1		1		1			1		10
	3・4	2	1					1					4
4.0〜4.9	1・2	1	4	6		1		4			2		18
	3・4		11	1		1		5					18
	5・6		5	4			1	2			1		13
	8・9		1	1									2
5.0〜5.9	2		2	1							1		4
	3・4	1	14	4	3	1		6		1	8		38
	5・6	2	7	7	2	5	1	11		1	2		38
	7・8	1	5	8	1	3		3		1			22
	9・10		3	2							1		6
6.0〜6.9	3・4		4	1			2	6	1		2		16
	5・6		7	4	4	3	1	5		1	1		26
	7・8	1	8	5		3		2					19
	9・10		2		1	1		1					5
	11・12		2	1		1							4
7.0〜7.9	4		2					1			1		4
	5・6			1		1	1	2					5
	7・8			2		2		1					5
	9・11			2	1								3
8.0〜8.9			1							1			2
合計		24	112	76	15	28	8	69	1	6	28	9	376



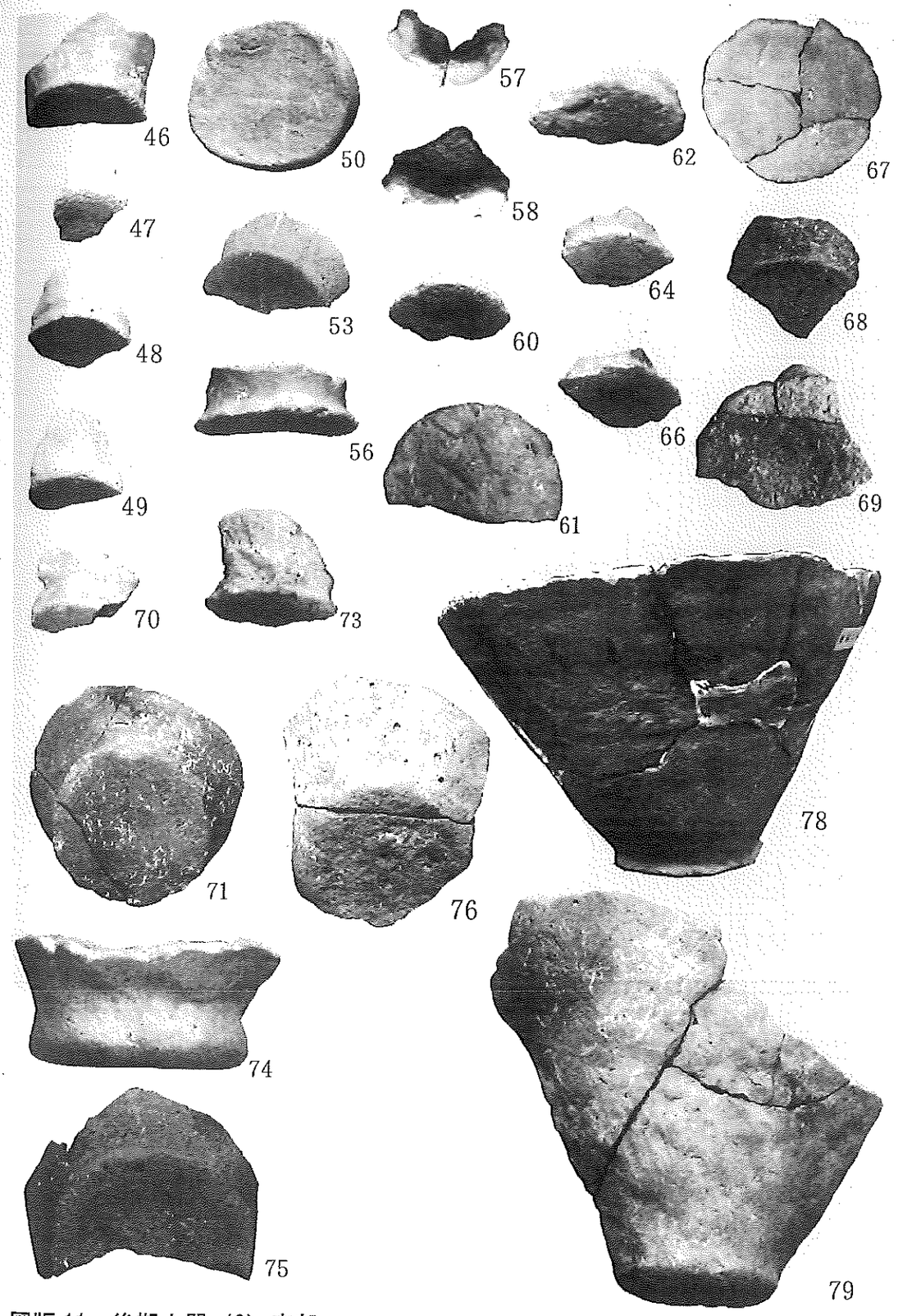
第 12 図　後期土器（5）底部



図版 10　後期土器（5）底部



第13図　後期土器（6）底部



図版11　後期土器（6）底部

表5　土器底部出土一覧

単位:cm

遺物no	底径	底厚	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	ﾚﾍﾞﾙ
1	1	1	ハ	J-44	Ⅱ	
2	2	1.1	ハ	I-45	Ⅲ	1/2
3	3.7	2.4	ハ	J-21	Ⅲ	0/1
4	4.2	2.1	ハ	G-22	Ⅲ	1/2
5	4.8	2.8	ハ	E-28	Ⅲ	0/1
6	5	2.2	ハ	H-30	Ⅲ	0/1
7	5.6	1.7	ハ	I-17	Ⅲ	0/1
8	3.2	2.3	ハ	G-30	Ⅲ	0/1
9	4.4	2	ハ	H-29	Ⅲ	0/1
10	3.8	1.6	ハ	H-31	Ⅲ	0/1
11	4.6	2.2	ハ	H-27	柱穴57	
12	4	0.9	ハ	I-21	Ⅲ	0/1
13	3.4	1.2	ヘ	C-36	Ⅲ	1/2下
14	4.2	2.1	ハ	I-26	Ⅲ	0/1
15	5	1.3	ハ	F-30	Ⅲ	1/2
16	5.2	1.4	ハ	H-30	Ⅲ	0/1
17	4.6	1.1	ハ	F-30	Ⅴ	0/1
18	4.7	1.2	ハ	G,H-34.35	Ⅰ.Ⅱ	
19	5.2	1.4	ハ	H-30	Ⅲ	0/1
20	5.2	0.9	ハ	J-11	Ⅲ	0/1
21	3.4	1.5	ホ	T-17	Ⅲ	1/2
22	4.4	2	ホ	U-11	Ⅲ	0/1
23	3.2	0.8	ハ	H-42	Ⅲ	0/1
24	3.7	0.8	ハ	G-40	Ⅱ	
25	4.5	0.5	ハ	G-38	Ⅲ	2/3
26	4.5	0.7	ハ	I-39	Ⅲ	0/1
27	4.6	1.2	ハ	G-35	―	―
28	4.5	0.9	ハ	J-21	Ⅲ	0/1
29	3.7	0.6	ハ	E-35	Ⅱ	
30	4	1.2	ハ	H-46	Ⅲ	0/1
31	4	0.5	ハ	H-29	Ⅲ	0/1
32	5	1.2	ハ	H-39	Ⅳ	0/1
33	5.4	2.3	ハ	G-26	柱穴45	
34	4.3	0.8	ハ	H-32	Ⅲ	1/2
35	5	0.6	ハ	I-26	Ⅲ	1/2
36	4.8	0.9	ハ	J-43	Ⅲ	1/2
37	5.2	0.5	ハ	I-14	Ⅲ	1/2
38	6.4	0.8	ハ	H-46	Ⅲ	0/1
39	5.7	0.8	ハ	E-30	Ⅴ	0/1
40	6	0.7	ハ	E-27	Ⅲ	攪乱
41	6.4	1.1	ハ	H-23	Ⅲ	1/2
42	5.8	0.8	ハ	H-13	Ⅲ	1/2
44	7	0.8	ハ	J-15	Ⅲ	1/2
45	6.8	0.6	ハ	H-47	Ⅲ	1/2
46	4.9	0.6	ハ	G-29	Ⅲ	0/1
47	5.5	0.5	ハ	G-35	Ⅲ	0/1
48	5.6	0.6	ハ	G-22	Ⅲ	0/1
49	5	0.8	ハ	F-27	Ⅲ	1/2
50	6.3	1	ハ	I-21	Ⅲ	0/1
51	6.3	0.8	ハ	G-39	Ⅴ	0/1
52	6.2	0.9	ハ	E-30	Ⅴ	1/2
53	6	1	ホ	T-14	Ⅲ	0/1
54	6.8	1	ハ	E-37	Ⅴ	0/1
55	6.4	1.2	ハ	H-46	Ⅳ	0/1
56	6.3	0.8	ハ	I-43	Ⅲ	0/1
57	5	1.5	ハ	I-43	Ⅲ	0/1
58	6.2	0.5	ハ	G-31	Ⅲ	0/1
59	5.9	0.8	ハ	H-43	Ⅲ	1/2
60	5.8	0.5	ハ	G-30	Ⅲ	0/1
61	6	0.5	ハ	J-42	Ⅲ	0/1
62	7	1	ハ	G-39	Ⅲ	2/3
63	6.6	1.1	ハ	J-42	Ⅲ	1/2
64	5.7	1.3	ハ	H-43	Ⅱ	
65	5.4	1.1	ハ	H-47	Ⅲ	0/1
66	6.6	1	ハ	G-26	Ⅲ	
67	7.3	1	ハ	E-37	Ⅴ	0/1
68	6.5	0.8	ハ	G-44		
69	7	1.3	ハ	F-28	Ⅲ	1/2
70	5.2	1.4	ハ	H-12	Ⅲ	0/1
71	5.9	1	ハ	F-37	Ⅳ	1/2
72	5	-	ハ	J-43	Ⅲ	1/2
73	6.8	0.8	ハ	I-45	Ⅲ	1/2
74	8	0.8	ハ	H-43	Ⅲ	0/1
75	7.2	0.6	ハ	E	ｱｾﾞ	
76	6.2	1	ハ	F-35	Ⅲ	0/1
77	7.2	1.4	ハ	F-37	Ⅴ	1/2
78	7.2	1.6	ヘ	B-29	Ⅲ	0/1
79	6	0.8	ハ	F-37	Ⅴ	1/2

②グスク土器

グスク土器は4種に分けられる。

A：口縁部が内湾し、4個の瘤状の突起を持ち、底部が広底を呈するもので滑石製石鍋の影響を受けたとされるもの　→滑石模倣土器

B：鍔縁状の口縁（図29）

C：頸部が立つもの（図30～32）

D：外反が強いもの（図33・39b・40）

ハ地区37点、ホ地区15点、ヘ地区2点の計58点出土した。（実測、確認できるもの、胴部を含まない。）

Aタイプには滑石混入するもの（図35・37）で、滑石製石鍋（第20図）の模倣とされる。口縁部の瘤の形態は方形が主体であるが、その断面は長方形が明瞭なもの（図6～8）、円味を帯びるもの（図13～18）、下方に除々に厚くなるも（図10～11）、突起が横長のもの（図5）など若干形状が異なる。また、これらの口縁断面は方形がほとんどであるが、中には内側にやや膨らみを持つもの（図3・6・8・10・14・20・25・26・34・35）、やや丸くなるもの（図4）、舌状（図21、28）などもみられ、形態が略化していくようである。

それ以外のB・C・Dは数少ない。特にDタイプは先行する貝塚後期の土器の形態に近いが、底部が広底になる特徴がある。この時期の土器の形態の変化の過程を示す資料である。

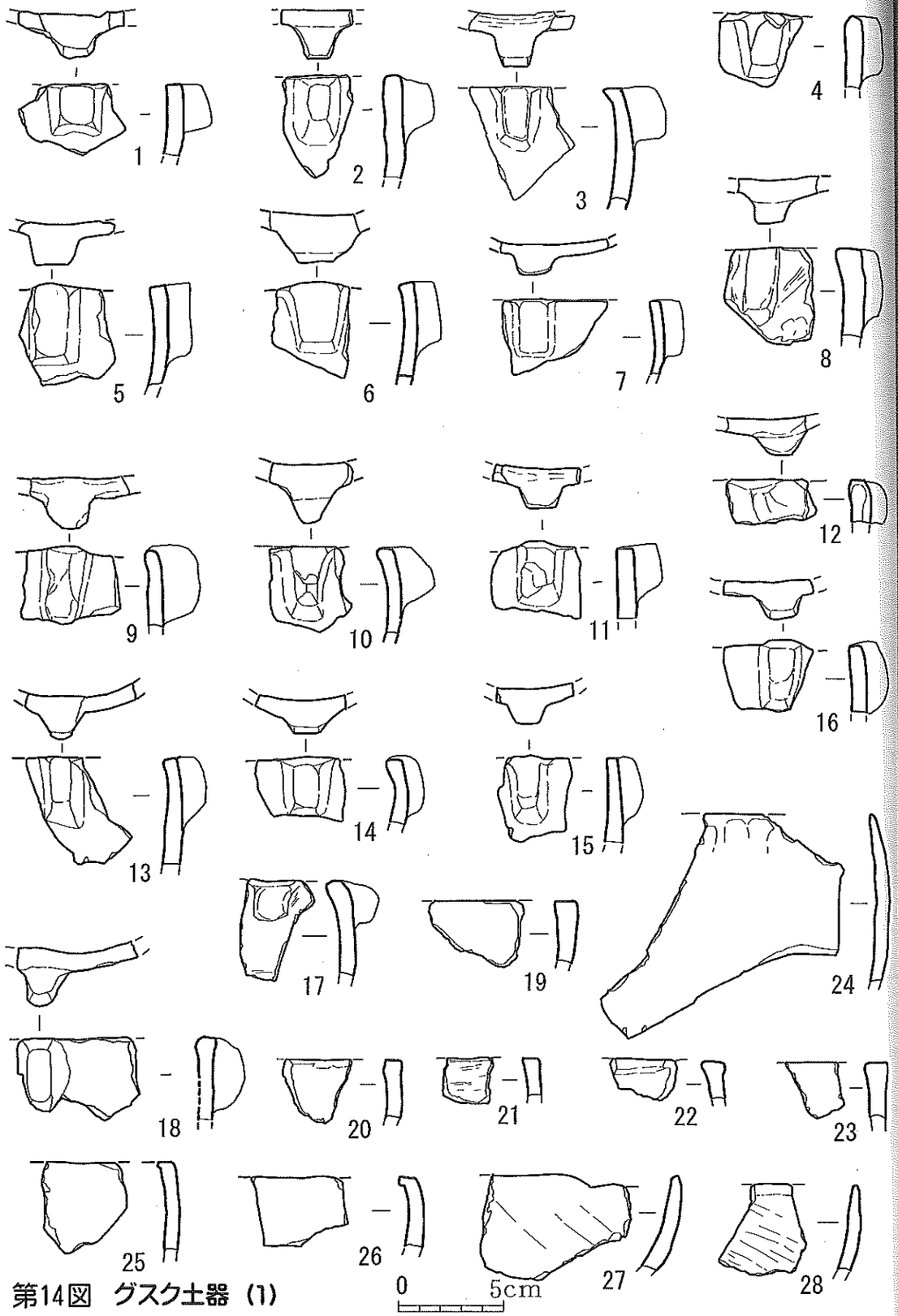
図示したものの出土一覧を表7と出土状況を表8に示した。

表6　グスク土器出土一覧

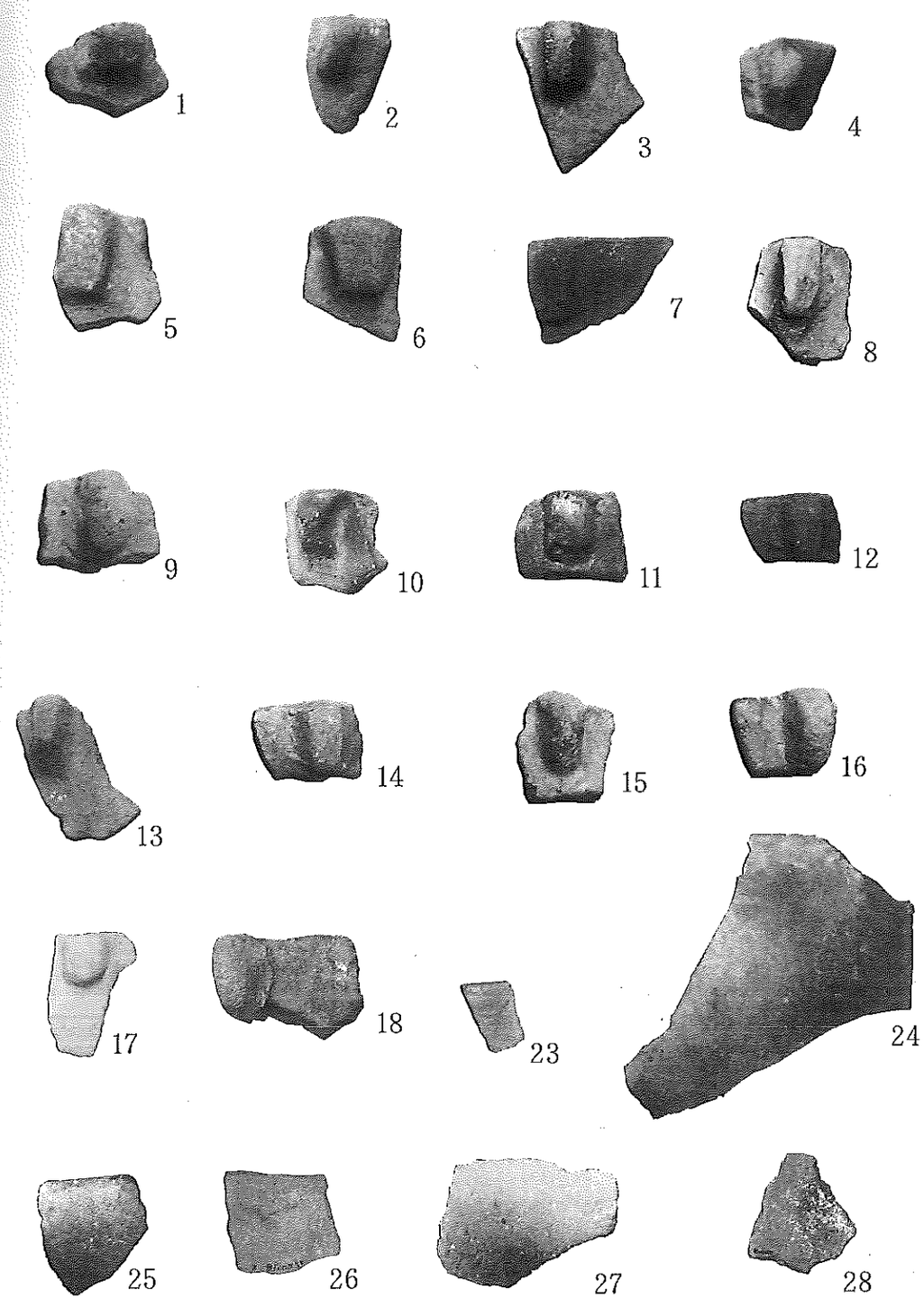
報番号	部位	地区	ｸﾞﾘｯﾄ	層
1	口縁部	ハ	J-46	Ⅲ
2	口縁部	ハ	J-45	Ⅲ0/10
3	口縁部	ハ	I-43	Ⅲ0/10
4	口縁部	ハ	―	―
5	口縁部		―	―
6	口縁部	ハ	H-31	Ⅲ
7	口縁部	ハ	H-29	
8	口縁部	ホ	T-17	Ⅲ
9	口縁部	ハ	ナシ	―
10	口縁部	ハ	ナシ	―
11	口縁部	ハ	H-19	Ⅲ
12	口縁部	ハ	不	―
13	口縁部	―	―	―
14	口縁部	―	―	―
15	口縁部	ハ	H-31	Ⅲ
16	口縁部	ハ	I-46	Ⅲ
17	口縁部	ホ	-18	Ⅲ
18	口縁部	ハ	G-30	Ⅲ
19	口縁部	ホ	T-18	Ⅲ10/20
20	口縁部	ホ	U-16	Ⅲ
21	口縁部	ハ	I-26	Ⅲ攪乱
22	口縁部	ホ	U-15	Ⅲ
23	口縁部	ホ	T-18	Ⅲ
24	口縁部	ホ	T-12	Ⅱ
25	口縁部	ホ	U-15	Ⅲ
26	口縁部	ハ	H-42	Ⅲ0/10
27	口縁部	ホ	T-17	Ⅲ
28	口縁部	ホ	T-13	Ⅲ
29	口縁部	ホ	U-15	Ⅲ
30	口縁部	ハ	I-46	Ⅲ
31	口縁部	ハ	J-42	Ⅲ
32	口縁部	ハ	J-45	Ⅲ0/10
33	口縁部	ハ	J-42	Ⅲ
34	口縁部	ハ	F-27	Ⅲ0/10
35	口～底	ハ	―	―
36	底部	ホ	T-15	Ⅲ10/20
38	底部	ハ	G-26	Ⅲ柱穴53
37	底部	ハ	H-31	Ⅲ
39	口縁部	ハ	E-33	Ⅲ10/20
40	口縁部	ハ	I-43	Ⅲ0/10

表7　グスク土器出土量

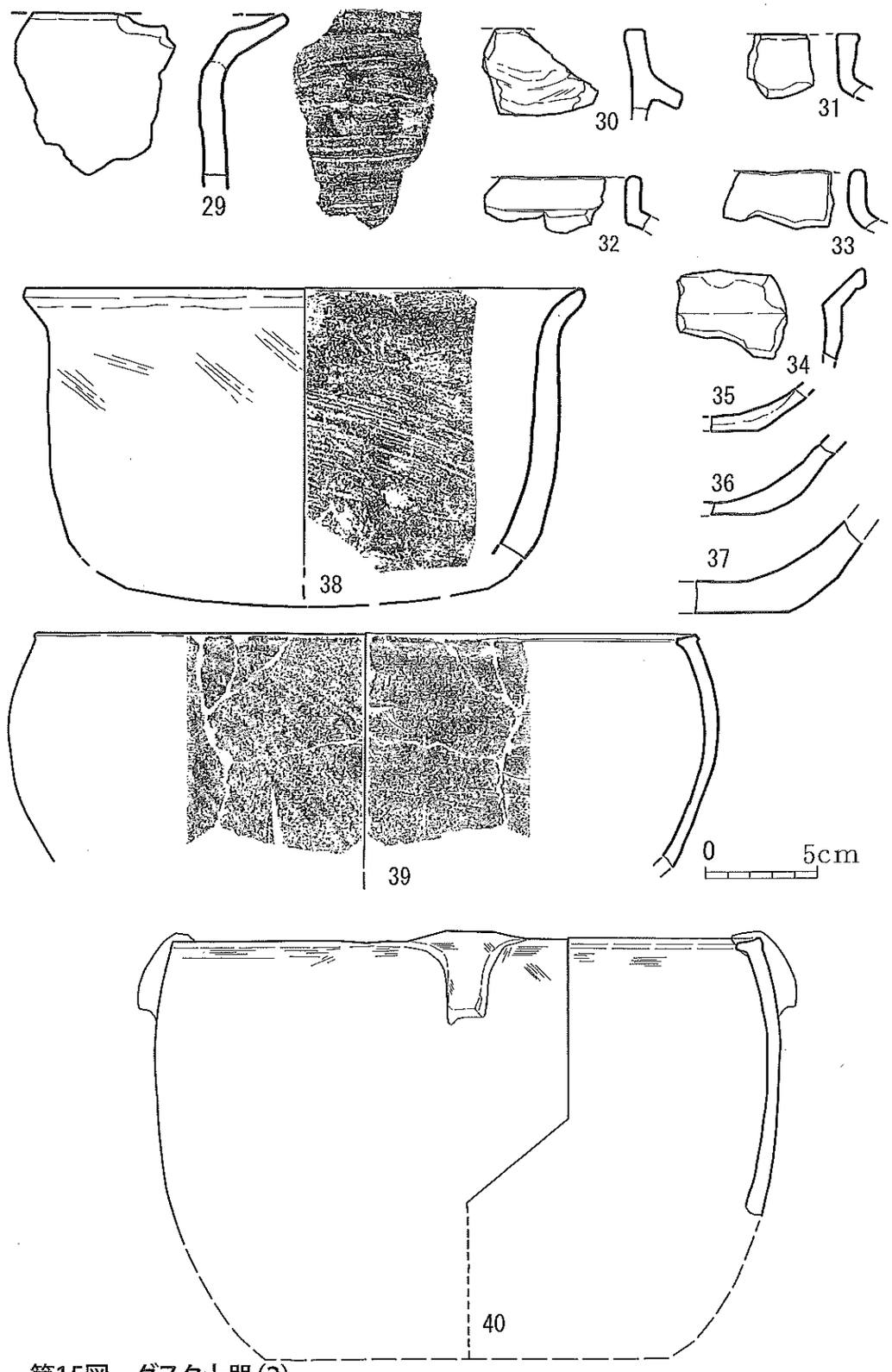
出土地 / 部位	ハ					不明	ホ		ヘ		合計
	Ⅱ	Ⅲ			不明		Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	
			0/10	10/20							
口縁部	2	10	10	2	8	4	1	11		1	49
底部		1	3	1				3	1		9
合計	2	11	13	3	8	4	1	14	1	1	58



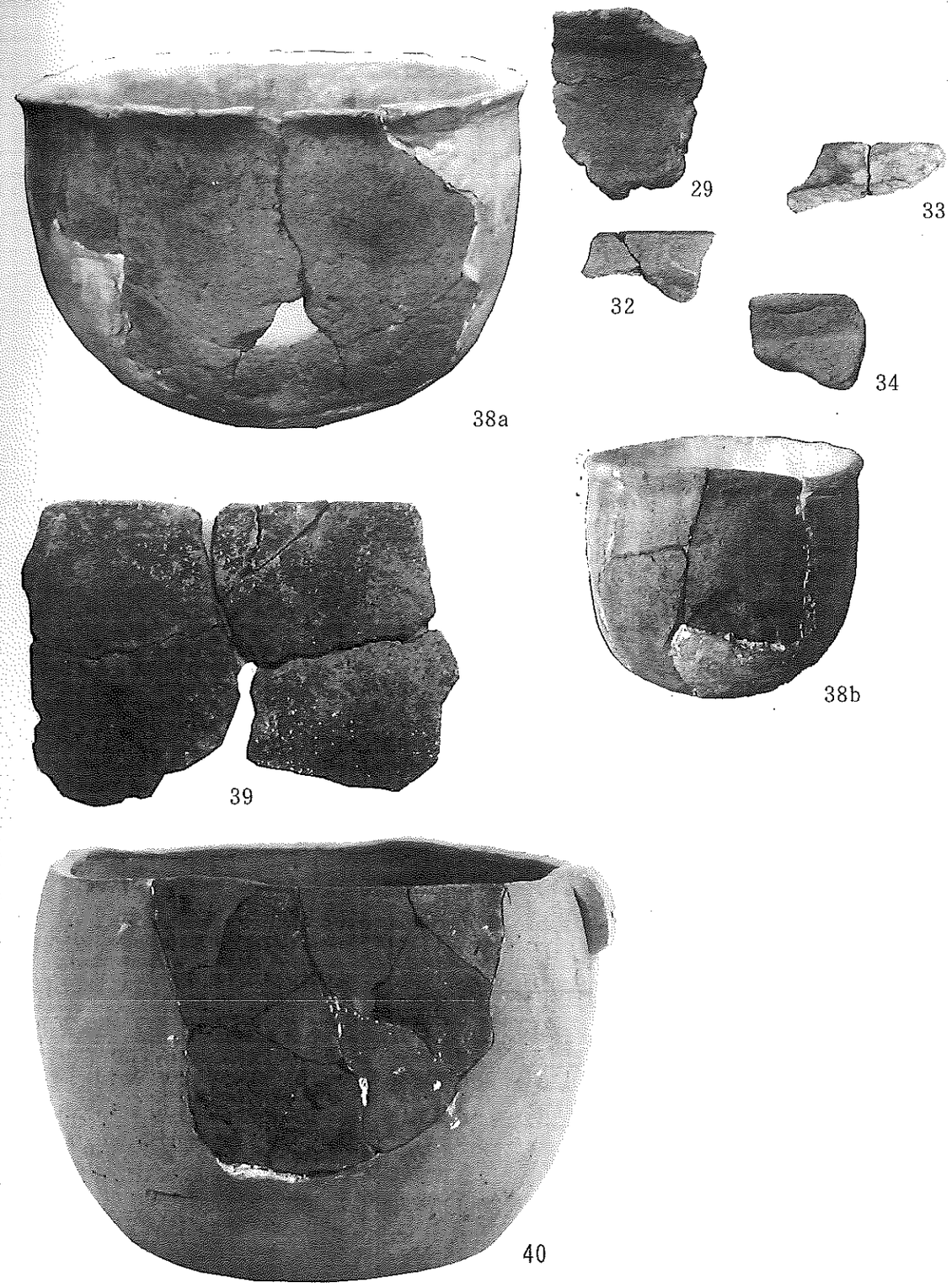
第14図　グスク土器（1）



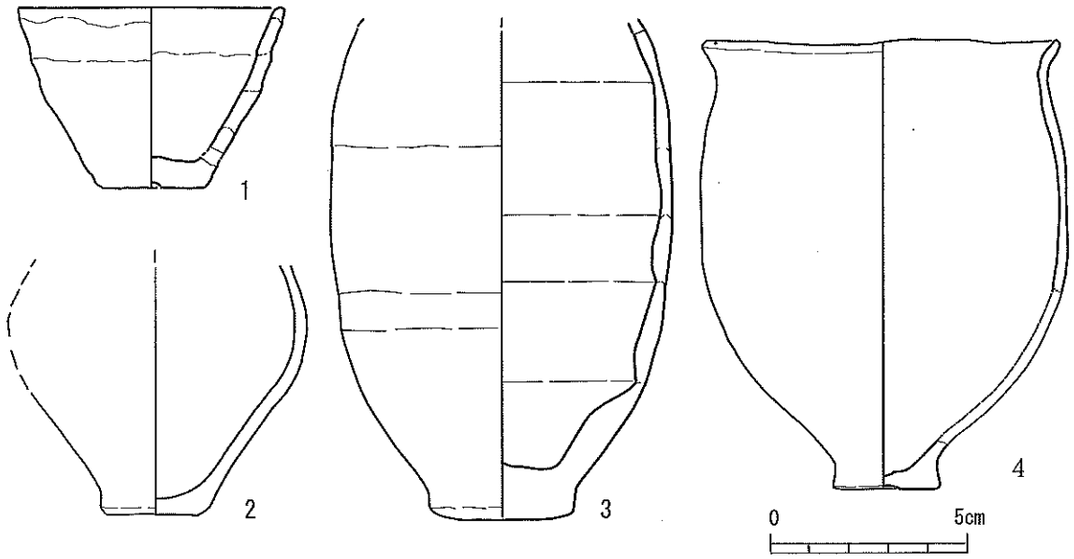
図版 12　グスク土器（1）



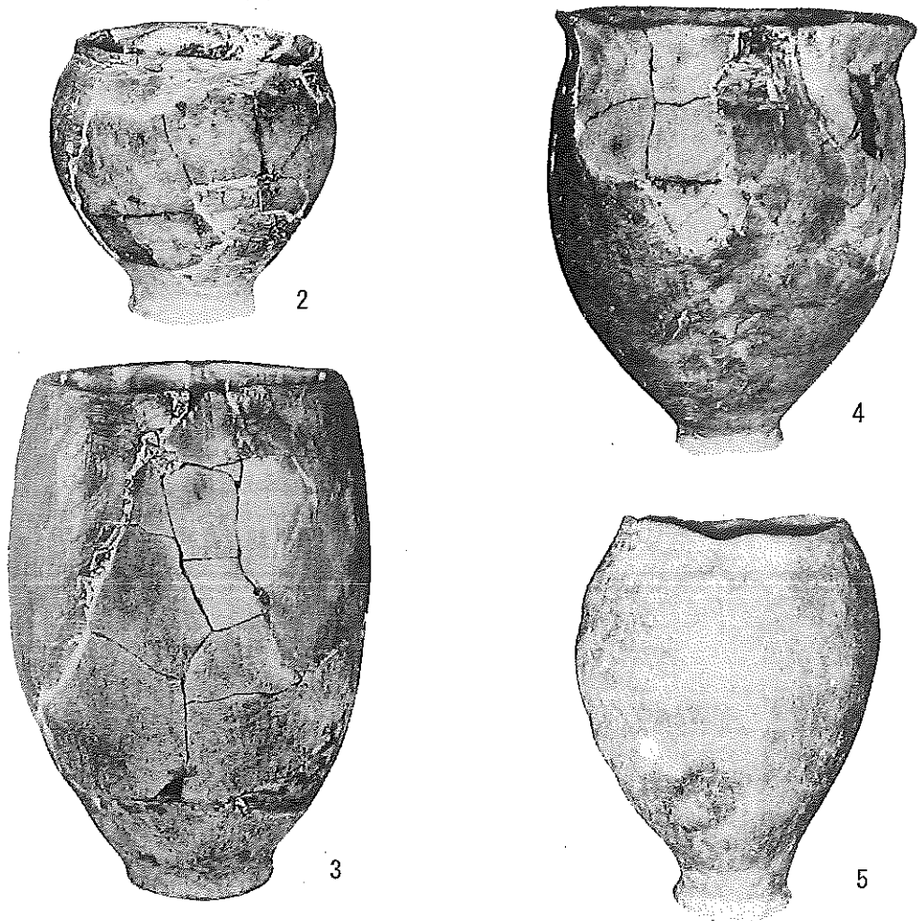
第15図　グスク土器(2)



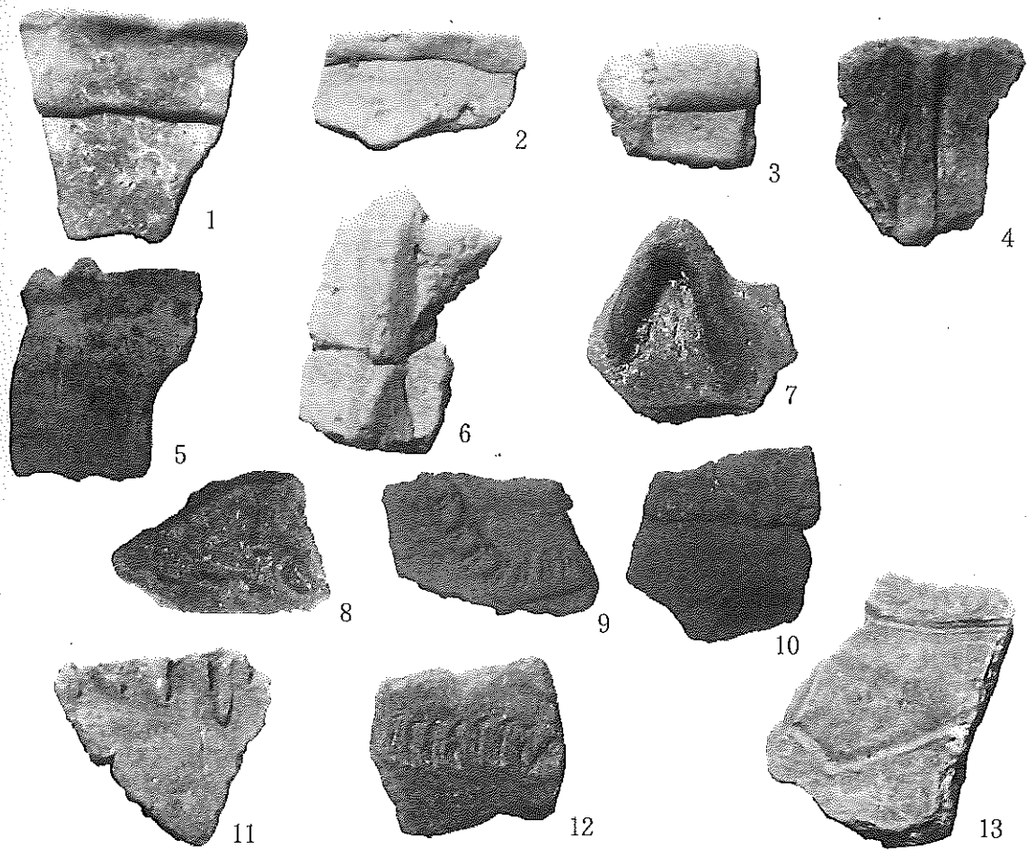
図版13　グスク土器（2）

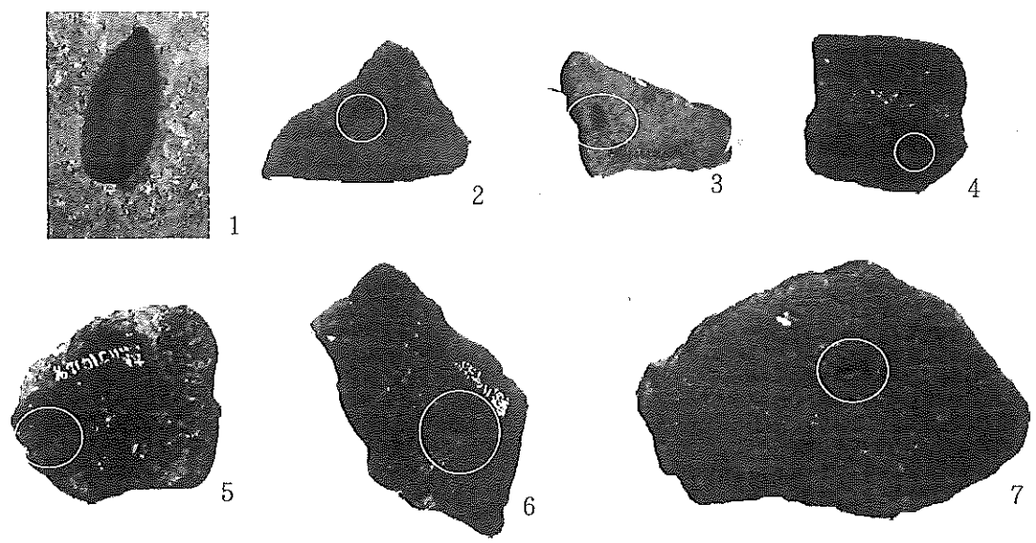


第16図　後期土器（7）完形



図版14　後期土器（7）完形





図版15　上：後期土器（6）有文、下：グスク土器（籾圧痕）

B. 類須恵器

本貝塚出土のものは混和材に白色物質を含む特徴があり、本来の須恵器と異なることから「類須恵器」「南島須恵器」と呼ばれるものである。本貝塚出土のものはすべて白色物質混入している。地区別の出土をみるとハ地区 135 点、ニ地区 2 点、ホ地区 8 点、ヘ地区 10 点、不明 3 点の計 158 点の出土である。最も多く出土したのはハ地区で全体の 85.4%を占める。

出土層位をみると第Ⅲ層で 55%得られ、上層のⅠ・Ⅱ層及び不明を加えると 75%が上層で出土している。出土の詳細は表 9 に示した。

ヘ地区ではⅡ層（70%）、ホ地区Ⅲ層（100%）、ハ地区Ⅲ層で 66%、ⅠⅡ層をあわせると 89%で、ハ地区の出土が最も多い。

部位別には完形（復元）2 点、口縁部 4 点、頸部 3 点、胴部 133 点、底部 18 点の出土である。主な遺物については表 9 に観察一覧、図を第 17 図～第 19 図に図、写真を図版 16～18 に示した。以下主なものについて略述する。

表8　類須恵器出土量

出土地 / 部位	ニ	ヘ				ホ	不明	ハ								合計
	Ⅱ	盛土	Ⅱ	Ⅲ	合計	Ⅲ		Ⅰ	ⅠⅡ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	不明	合計	
口縁部					0					2	1		1		4	4
頸部					0			1			1	1			3	3
胴部	2	1	7	1	9	8	2	6	5	13	76	1		11	112	133
底部				1	1		1	1	1	2	11			1	16	18
合計	2	1	7	2	10	8	3	8	6	17	89	2	1	12	135	158

＜口～底＞

復元された図 1～3 は壺で 1 は口縁形態が直口で小形の短頸、図 2 は図 1 よりは大きくなり外反でやや肩部の張る壺、図 3 は口～肩部まで口縁部は断面が三角形に肥厚し、頸部で大きくくびれるものである。詳細の観察は表 10 に示した。

＜口縁部＞

口縁部についてみると大きく直口口縁と外反口縁に分けられ、外反口縁は肥厚するもの（図 3）と方形のもの（図 2）その中間タイプで玉縁状（図 5）がある。器厚は 5 ㎜と薄手である。

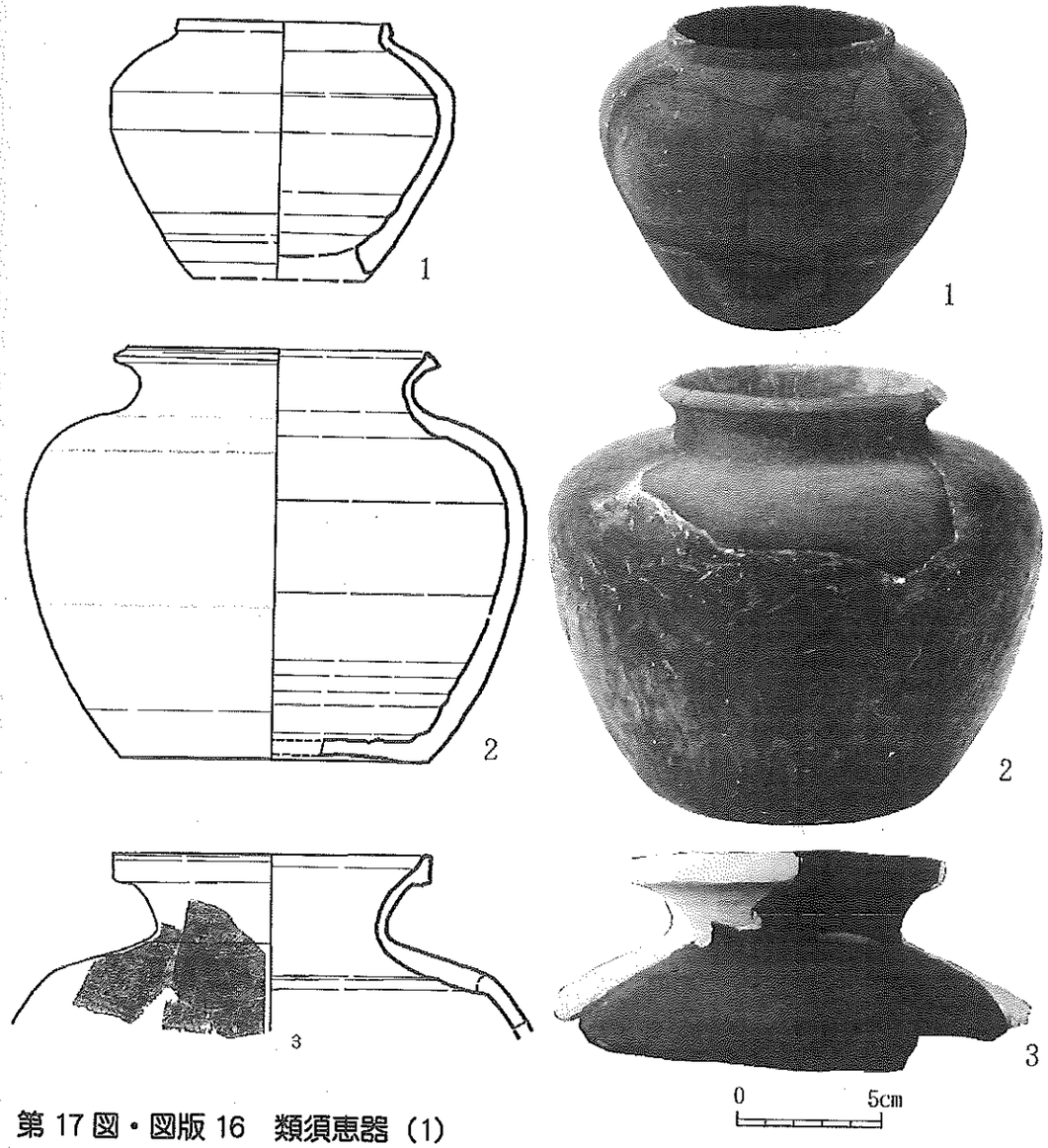
＜頸・胴部＞

図 6・7 は頸部で、口に近い方は 3 ㎜と薄くなる。図 7 は器壁が 7.5 ㎜と厚く、前者より、大きいタイプと思われる。

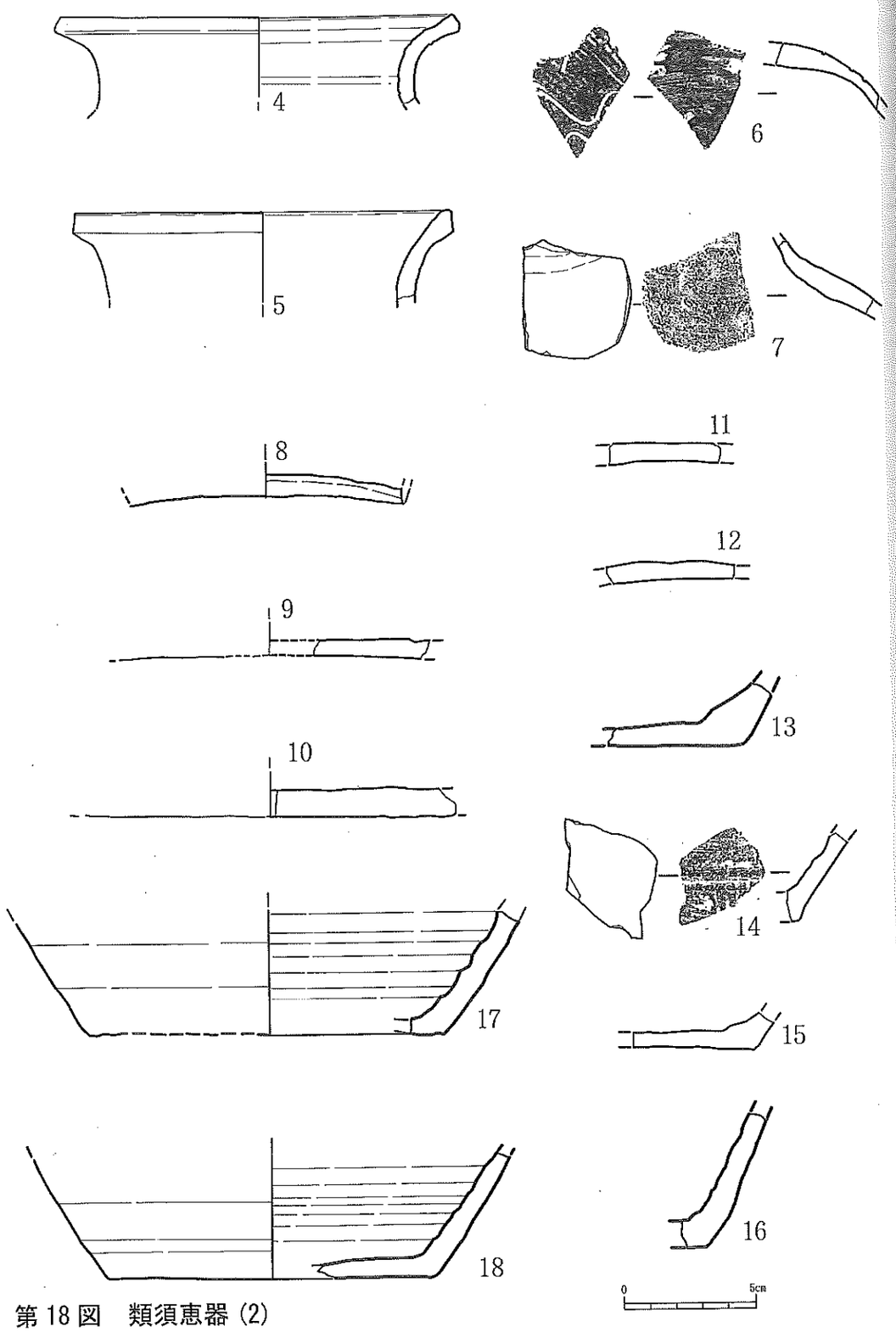
図 6 は肩部近くに波状文が二条確認できる。肩部の方が器壁 7.25 ㎜と厚い。肩部は張りが強いようである。胴部は肩部に近い薄手のもの、胴部に近い厚手のものがあり、前者は表裏ともたたきが顕著で後者は裏面の轆轤痕が顕著である。

＜底部＞

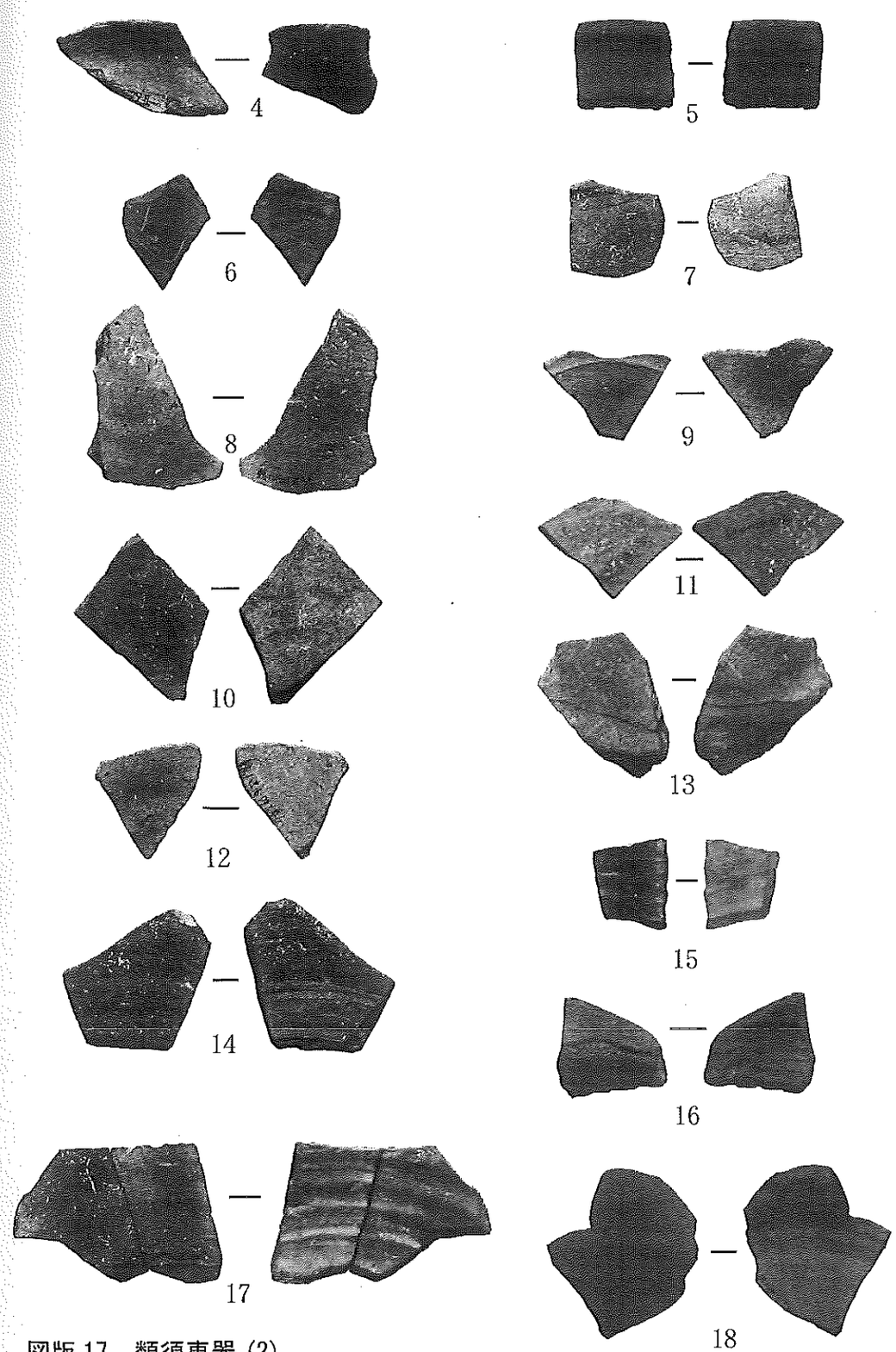
14 個出土したが、そのうち復元可能なものは図 17・18 の 2 個である。また、底面のみは 5 個で、そのうち 3 個は轆轤痕から図上復元を試みた（図 8～10）。底面から胴部にかけて丸みを帯びるもの図 16、胴部が若干張り気味（図 14・17）、直状気味（図 13、15）などがある。



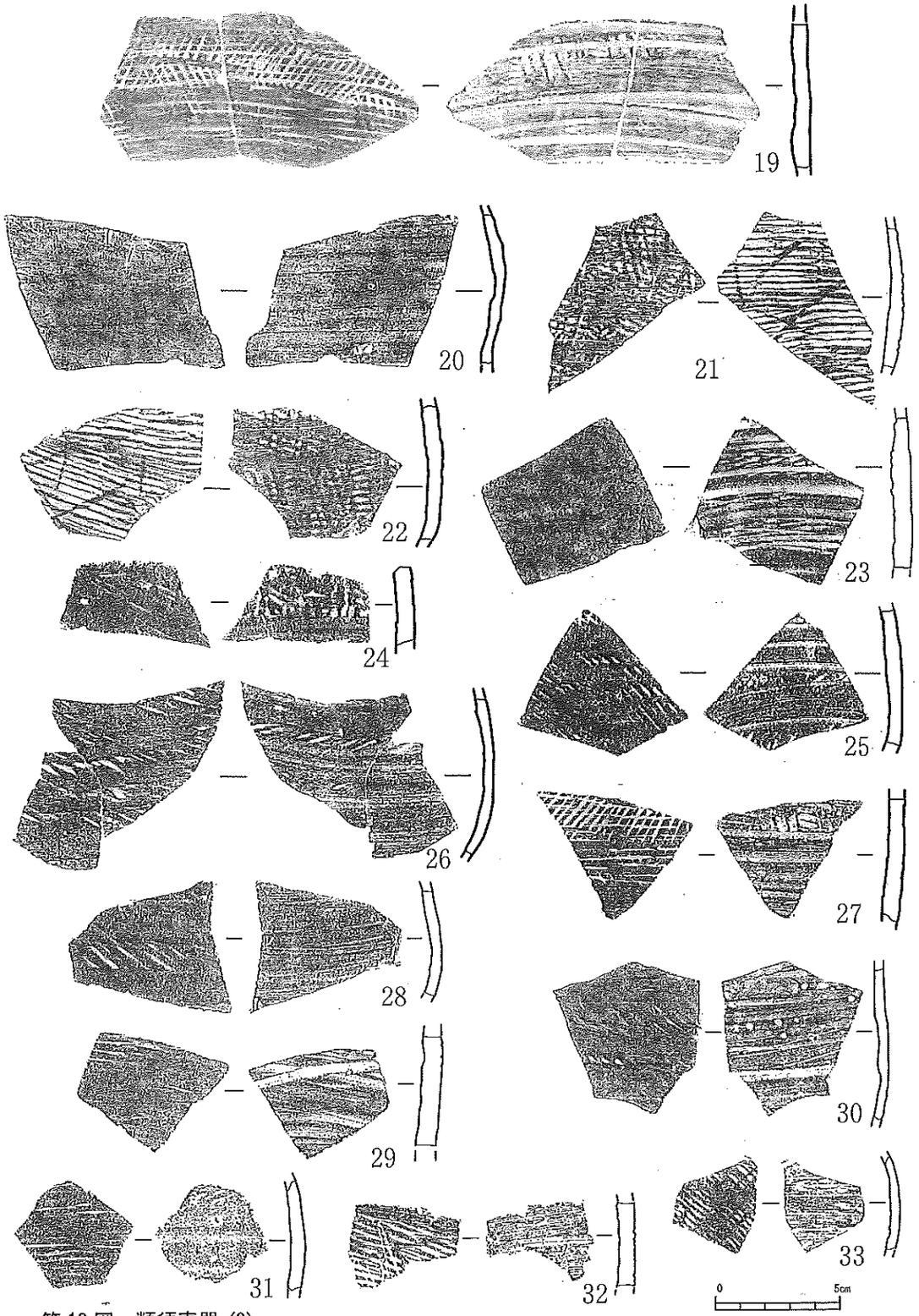
第 17 図・図版 16　類須恵器（1）



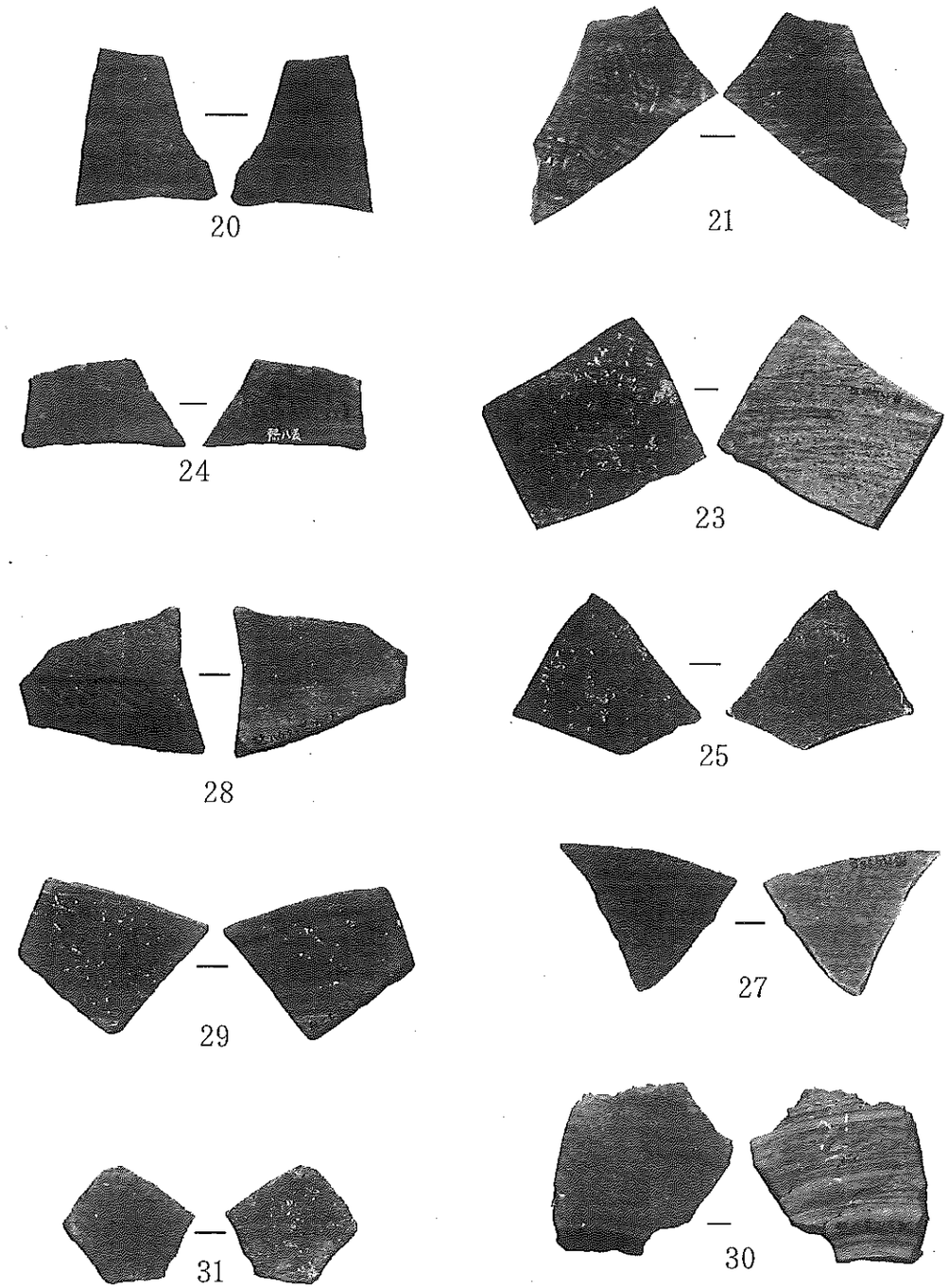
第 18 図　類須恵器 (2)



図版 17　類須恵器 (2)



第19図　類須恵器 (3)



図版18　類須恵器 (3)

(19　22　26　32　33は写真なし)

表9　類須恵器観察一覧　　単位:cm、器厚:mm

番号	部位	法量	観察事項	出土地
1	口～底	口径8.5、最大胴径11.75、器高9.5、底径6.25cm		
2	口～底	口径11、最大胴径18.5、器高15、底径11.25cm		ハE-28Ⅲ
3	口縁部	口径11.8		ハG-26Ⅲ
4	口縁部	口径:17 器厚5	白色物質。表裏面一灰色、内部赤味。焼成良好ヨコナデ	ハF-22G-21 Ⅱ0/10
5	口縁部		白色物質、多量。表裏面一暗灰褐色。焼成良好ヨコナデ	ハF-18Ⅲ0/10
6	胴部	器厚7.5	波状文。白色物質（微粒）表面一暗褐色、裏面一灰色、内部赤味。焼成あまい。タタキ、ヨコナデ	ハH-16Ⅲ
7	頸部	器厚5.3	表裏面一灰色、内面やや暗褐色。焼成悪い。表裏面一ヨコナデ	ハF-37Ⅳ0/1
8	底部	器厚8.8	砂底。白色物質、礫混る。表裏面一灰色。焼成良好。裏面一ヨコナデ	ハH-31 Ⅲ　0/10
9	底部	器厚5.25	砂底。白色物質。表裏面一灰色、内部暗赤味。焼成良好。ヨコナデ	ハG-27 Ⅲ　0/10
10	底部	器厚7.5	断面に亀裂。白色物質。表裏面一灰色。焼成良好。ヨコナデ	ハE-29・30Ⅲ
11	底部	器厚6	白色物質。表裏面一灰色。焼成良好。ヨコナデ	ハI-20 Ⅲ0/10
12	底部	器厚6	白色物質。表裏面一灰色。焼成良好。ヨコナデ	ハI-16・17Ⅰ
13	底部	器厚7.5	砂底。白色物質。表裏面一灰色、内部赤（茶）色。焼成やや悪い。ヨコナデ	ハF-29 Ⅱ
14	底部 近く	器厚5	白色物質（微粒）。表裏面一灰色。焼成良好。ヨコナデ、タタキ。	ハF-28
15	底部	器厚5.5	表裏面一灰色、内部赤味。焼成良好。裏面一轆轤痕、浅い。	ハE-36№51
16	底部	器厚6.2	白色物質。表裏面一暗灰色、内部赤味。焼成やや悪い。ヨコナ	ハI-16Ⅲ
17	底部	底径:11.9 器厚6.8	白色物質。表面一暗灰褐色、裏面一灰色。焼成良好。裏面一ヨコナデ	ヘB-27 Ⅲ0/10
18	底部	底径12.3	砂底。白色物質。表面一暗灰色、裏面一灰色、内部やや赤味。焼成良好、ヨコナデ。	ハH-26 Ⅲ
19	胴部	器厚6	白色物質。灰色、表面-ナデタタキによる格子文。焼成良好。	ハH-22+G-26柱穴no.2Ⅲ0/10
20	胴部	器厚4.3	白色物質。表裏面一灰褐色、内部やや赤味。焼成良好。裏面一轆轤痕、浅い。	ハF-25 Ⅰ
21	胴部	器厚3.8	白色物質（微砂粒）表面一暗褐色、裏面一灰色。内部一赤味。焼成やや悪い表裏面一タタキが顕著。	ホT-15 Ⅲ
22	胴部	器厚6.2	白色物質（微粒）。表面一赤褐色、裏面一灰色、内部赤味。焼成もろい。表裏面一タタキ（格子目文）。	ホU-26 Ⅲ
23	胴部	器厚7.2	白色物質。表裏面一灰色。焼成良好。裏面一タタキ（格子目）の後、轆轤痕深い。	ハG-27
24	胴部	器厚6.2	白色物質（微粒）表面一灰色、裏面一暗褐色、内部赤味。焼成良好表裏面一タタキ、ヨコナデ	ハ 表採
25	胴部	器厚5.6	白色物質（微粒）。表裏面一灰色。焼成良好。表面一タタキ（格子目文）、裏面一タタキ後轆轤痕深い。	ハ 柱no.47
26	胴部	器厚5	表裏面一タタキ（格子目文）、轆轤痕、深い。	ハ柱no.3
27	胴部	器厚6.5	白色物質（微粒）表裏面一灰色焼成良好タタキヨコナデ（刷毛目）	ハG-26 Ⅲ0/10
28	胴部	器厚3.75	白色物質（微粒）。表裏面一暗灰色、内部赤味。焼成良好。表面一タタキを消してヨコナデ、裏面一ヨコナデ	ハG-26 Ⅲ
29	胴部 底部近	器厚8.1	白色物質、砂粒。表裏面一灰色、内部赤味。焼成良好。表面一タタキ痕、裏面	ニO-36 Ⅱ0/5
30	胴部	器厚3.75	白色物質（微粒）表裏面一灰色、内部赤味。焼成もろい表面一タタキ後、ヨコナデ、裏面一轆轤痕深い。	ハH-25 Ⅲ0/10
31	胴部	器厚5	白色物質（微砂粒）、部分的に気泡。表裏面一灰色、内部やや赤味。焼成やや悪い。表面一タタキ後、轆轤痕。	ホT-14 Ⅲ
32	胴部	器厚6.25	白色物質・鉱物表裏面一灰色。内部赤褐色。焼成良好表面一タタキ、裏面一轆轤痕。	ヘB-23 Ⅱ0/10
33	胴部	器厚3.8	白色物質（微砂粒）。表裏面一暗灰色、内部赤味。焼成良好。表裏面一タタキ（格子目文）	ホT-15 Ⅲ

C. 滑石製品

滑石製品は石鍋と二次加工品に分けられる。

出土総数は14個で、地区別には、ヘ地区Ⅱ層1個、ハ地区Ⅲ層で13個とそのほとんどがハ地区の出土である。これらの出土グリッドをみるとH-22・23, I-15・16にまとまりが見られるようである。

・石鍋

第20図の口縁部（図1）と同図の底部（図7）は厚さや表面の削りの幅などから同一個体と思われる。図7は底の部分は薄い。他に口縁部は（図2・3・8）、胴部は（図9）がある。

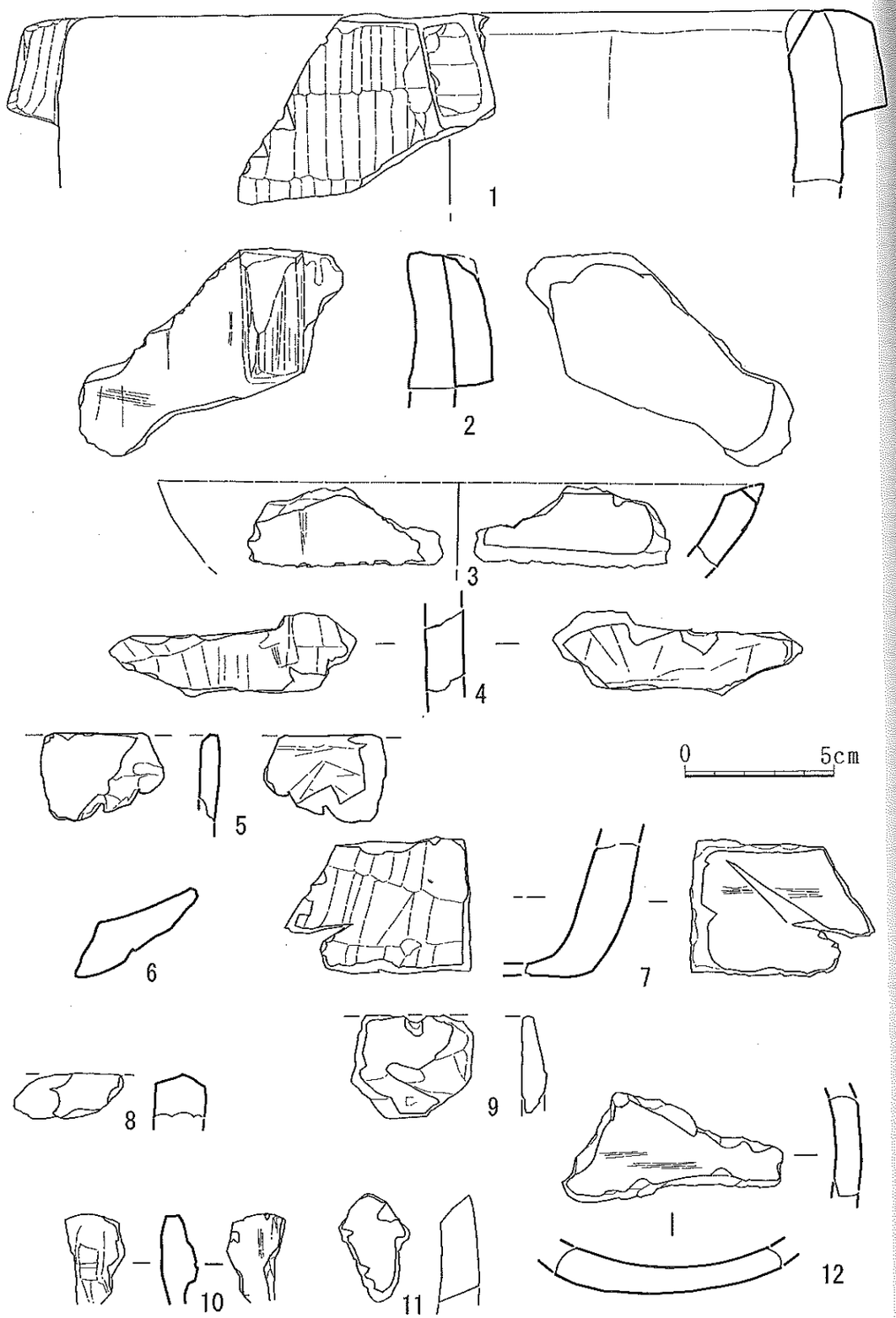
口縁部（図5）、胴部（図12）は薄手で、二次加工品の可能性も考えられる。また、図1と2は方形耳で大きさは縦3.4～4.6㎝、幅2.0～2.4㎝、厚さ1.7㎝を測り、大きめである。

・二次加工

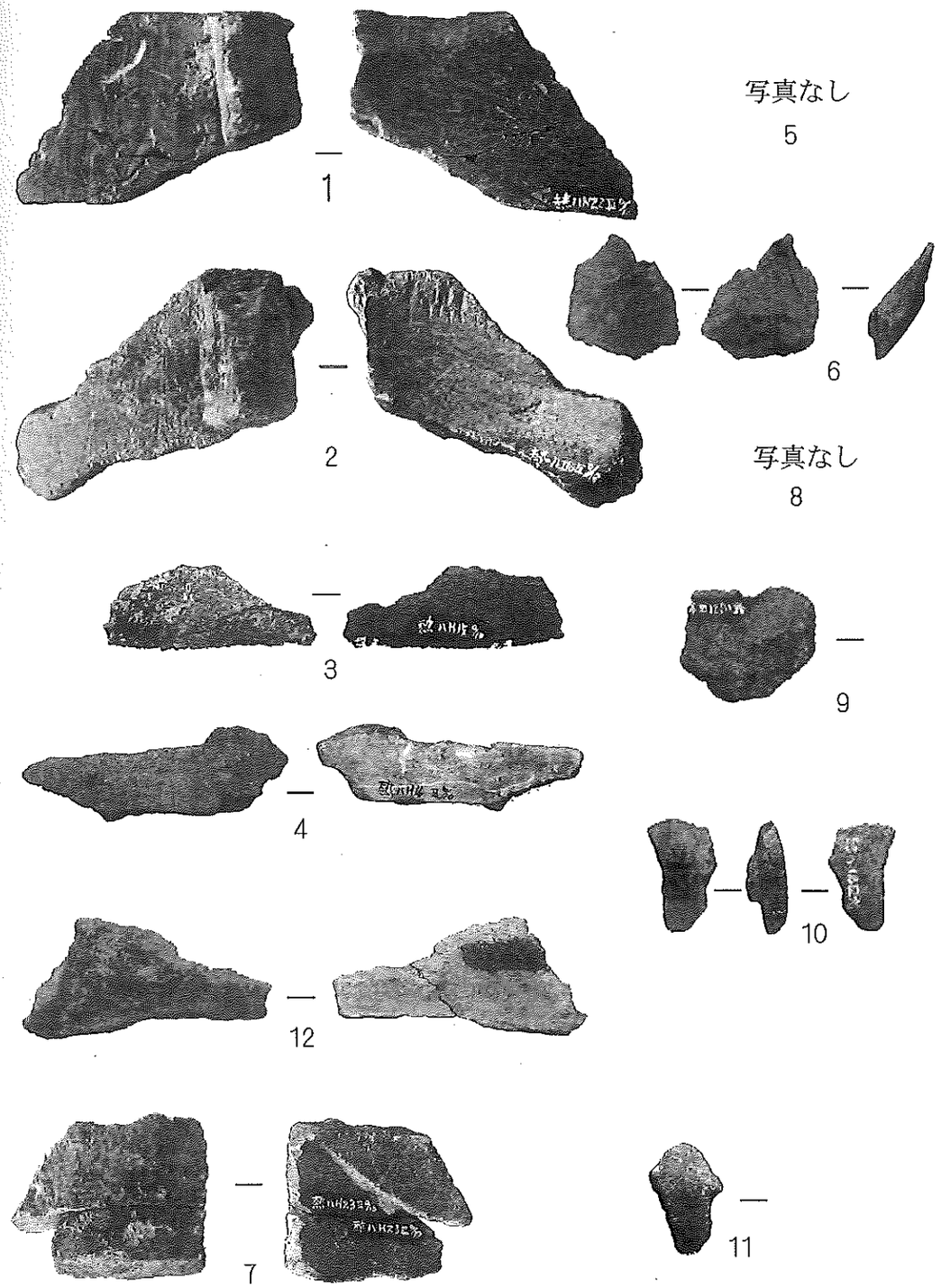
図10は周縁を削り、つまみ状に加工したもの、図4・5は縁を薄くし、板状に加工したものである。

表10　滑石製品観察一覧

図番	部位	厚さ mm	観察事項	出土地
1	口	16	口唇舌状、内唇削り。方形-耳(3.4×2.0×1.7cm)。外面:削り	ハH22ⅢO/10
2	口	15	口唇一平ら、方形耳(4.6×2.1×1.2cm)外面:削り丁寧。	ハI16ⅢO/10
3	口	11	口唇一斜め、外面:削り顕著。	ハH15ⅢO/10
4	二次	7	底部近く。外面削り、顕著、内面破損	ハJ21ⅢO/10
5	口	7	口唇、薄く、二次加工かも、	ハH23ⅢO/10
6	底部 近く	10	外面:破損、内面:研磨。	ハI16Ⅲ
7	底部	15	削り幅1×2.5cm。外面煤付着。	ハH23ⅢO/10
8	口	18	口唇一内外から削り、断面山札外面一煤付着。	ハG19ⅢO/10
9	胴	13	内外面;削り、研磨顕著。	ハH16ⅢO/10
10	二次	11	撮みの部分に煤付着、横位に幅0.2Cmの溝	ハH16ⅢO/10
11	胴	14		ハI16ⅢO/10
12	胴	9	外面:煤付着。	ハI16Ⅲ10/20
	胴	16		ヘB35Ⅱ10/20



第20図　滑石製品



図版19　滑石製品

D. 白磁

ハ地区Ⅱ層で口縁部１点、Ⅲ層で口縁部７点、不明で口縁部１点、底部２点、ニ地区Ⅱ層で口縁部１点出土した。

口縁部の形態をみると玉縁口縁７点、外反口縁１点、不明が２点である。

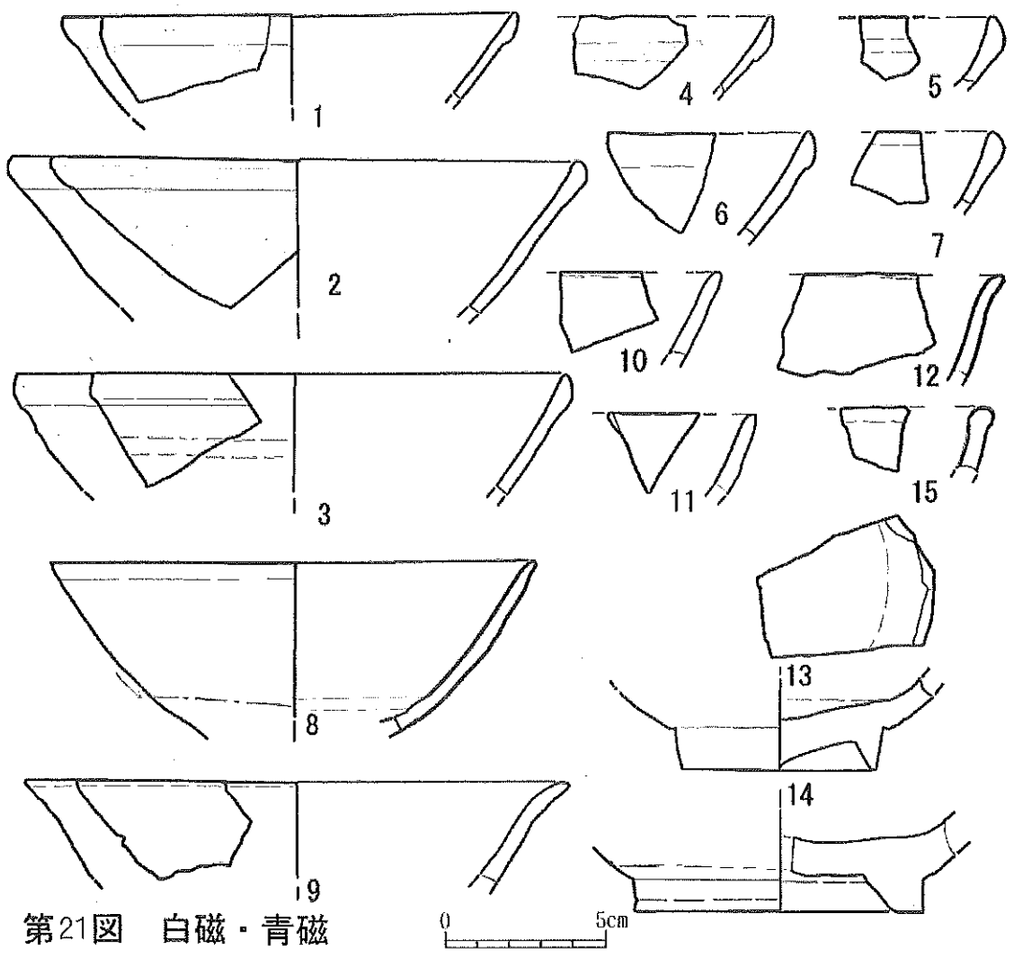
玉縁口縁碗は全体に薄手であるが、幅狭い（図 1）、幅広い（図 4・5）、膨らむ（図 2・3・7）がある。また、外反口縁は若干くびれる（図 8・10）、ややくびれの強い（図 9・12）

底部は畳付が尖る（図 3）と逆「ハ」字状の断面を呈する（図 14）がある。

E. 青磁

ハ地区Ⅲ層 0-10 で１点、Ⅱ層１点の出土である。図 15 は口縁部がやや玉縁をなすものである。

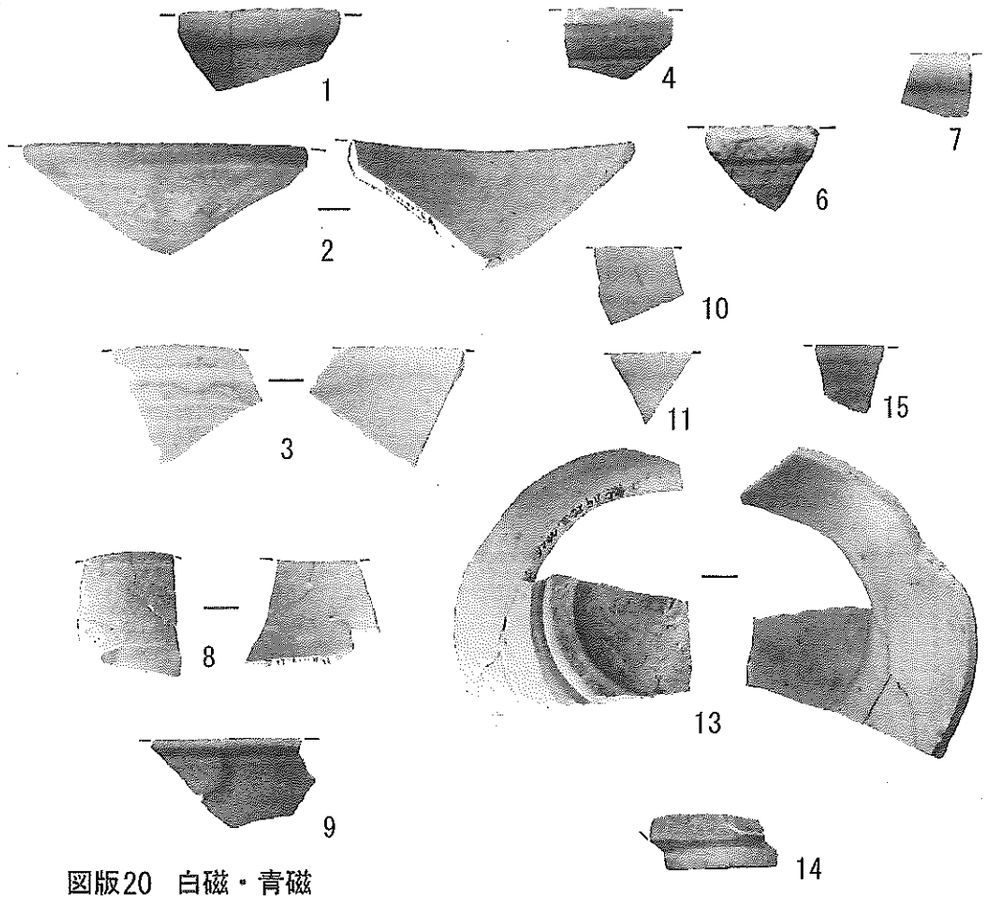
詳細の観察は表 12、第 21 図、図版 20 に示した。



第21図　白磁・青磁

表11　白磁・青磁観察一覧

番号	種類、部位	法量cm	観察	出土地
1	白磁, 口, 玉縁	口14	淡緑色釉, , , 有り	ハI-17Ⅱ
2	白磁, 口. 玉縁	口18	淡緑色, 白色・緻密, 上部ー凹凸あり、下部ーヘラケズリ,	ハH-29Ⅲ0-10
3	白磁, 口, 玉縁	口16.6	白色, , , なし	ハ柱穴48
4	白磁, 口玉縁		クリーム色, , 雑な施釉, きわめて細かい	ハH-20Ⅲ10-20
5	白磁, 口, 玉縁		白色, , , なし	ハG-36Ⅲ0-10
6	白磁, 口, 玉縁		淡淡緑白色, , , 有り	ハE-28Ⅲ0-10
7	白磁, 口, 玉縁		淡黄緑白色, , , なし	ハH-25Ⅲ0-10
8	白磁, 口, 舌	口15	褐色を帯びた汚れた白色, , 上部ーわずかな凹線。下部ー釉なし、露胎淡褐色、細沈線,	ハG-26Ⅲ攪
9	青磁, 口		, , ,	ニRⅡ60-80
10	白磁, 口, 丸		白色, , , なし	ハH-27Ⅲ攪乱
11	白磁, 口, 舌		淡緑色, 貫入なし	ハH-29Ⅲ0-10
12	青磁？, 口		オリーブ色, 雑で空洞が多い。石英？を含む, ,	ハG-34Ⅲ0-10
13	白磁, 底部	底6	淡緑白色, 白色, ,	ハ柱穴53+柱穴2
14	白磁, 底部	底, 6.2	, クリーム色・緻密, 露胎ーヘラケズリ,	—
15	青磁, 口, 玉縁		深緑色, ヒビ有り, ,	ハE-32Ⅱ



図版20　白磁・青磁

F　貝製品

人工遺物では土器に次いで多く 1011 点出土した。
大きく実用品と考えられるものと装飾品と考えられるものに分けられる。

実用品は貝匙（ヤコウガイ）と貝に粗孔を施すもの（ヤコウガイ、オオベッコウガサ、クロチョウガイ、二枚貝）とタカラガイの背面を除去したもの、二枚貝の腹縁を研磨し、附刃したもの（クロチョウガイ、チョウセンハマグリ）、スイジガイの突起を加工したもの、貝皿（シャコウ）、装飾品は中型イモガイや小型巻き貝（マクラガイ、イモガイ、キバタケガイ）の体層を両側面から研磨あるいは摩耗したもの、二枚貝（リュウキュウバカガイ）の殻頂を研磨したもの、貝輪（メンガイ）がある。

表に全体の出土量、主なものは第 22～28 図に示し、表 12 に観察一覧を掲載した。
以下、各々の製品について略述する。

表 12 に各地区の貝製品の出土状況を示した。これによるとハ地区 394 点、ホ地区 87 点、ヘ地区 9 点、ニ地区 1 点計 1031 点の出土である。
地区別出土状況をみるとハ地区で 91%、ホ地区で 8%、ヘ地区で 1%とほとんどはハ地区の出土である。

製品別の出土状況を最も出土量の多いハ地区でみると二枚貝有孔製品が 93.9%、オオベッコウガサ製品が 2.0%、ヤコウガイ製匙が 1.2%、ヤコウガイ有孔製品が 1.1%、クロチョウガイ有孔製品が 0.5%、タカラガイ製品が 0.5%、その他が 1.2%の出土で二枚貝有孔製品が主体である。

表12　貝製品地区別出土量

地区・層 ＼ 製品		ヤコウガイ貝匙	ヤコウガイ有孔製品	クロチョウガイ有孔製品	オオベッコウガサ製品	タカラガイ製品	二枚貝有孔製品	その他	合計
ハ	Ⅰ	1			3		11	3	15
	Ⅱ	2			1	2	52	1	58
	Ⅲ	7	2		11	2	401	6	429
	Ⅳ	1	2	2	1		130		136
	Ⅴ		6	3	2	1	245		257
	撹乱						19	1	19
	合計	11	10	5	18	5	858	11	914
ニ	Ⅱ						1		1
ヘ						1	8	2	9
ホ	Ⅱ						5		5
	Ⅲ	1			1		67	4	69
	Ⅳ					1	12		13
	合計	1	0	0	1	1	84	4	87
総合計		12	10	5	19	7	951	17	1011

①ヤコウガイ製貝匙

ヤコウガイ貝匙、及び粗加工品がハ地区で 11 点、ホ地区で 1 点の計 12 点出土した。
ハ地区ではⅡ層 2 点、Ⅲ層 7 点、Ⅳ層 1 点、不明 1 点、ホ地区ではⅢ層の出土である。
表 13 に出土一覧と主なものを第 22 図、図版 21 に示した。

図 1 はほぼ完形で周縁を打割調整のみで、外殻に部分的に研磨調整が認められる。

図 5 の柄のように周縁を丁寧に研磨し、ほぼ中央にすり切りによる穿孔したものもあることから、粗加工段階のものと思われる。

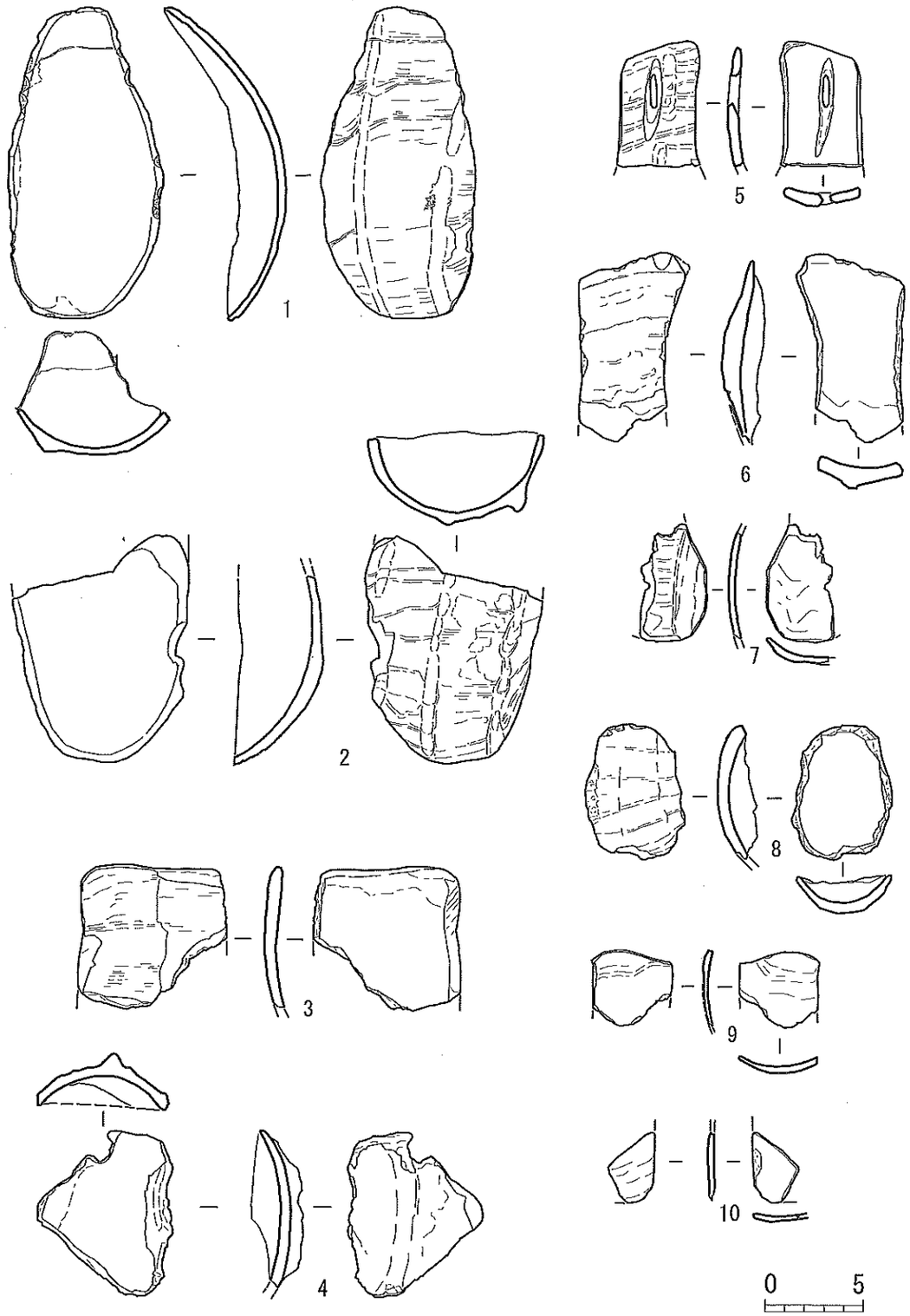
また、図 1 以外は破損し、図 2・4・7～10（未掲載 2 点）は身、図 3・5～6 は柄に相当する部分である。そのうち、図 4 以外は部分的に研磨が認められる。特に図 3・5・7 は研磨が顕著であることから完成品の破片と思われる。

図 8 は身の部分に相当するものであるが、小形である。突起の状況からヤコウガイの腹面の部分を使用したものである。大きさも小さく、使用部位も他の背面利用ものとは異なり、腹面を用いていることから、小型のものを意識して加工したものと思われる。ヤコウガイ製匙のサイズの分化が想定される。

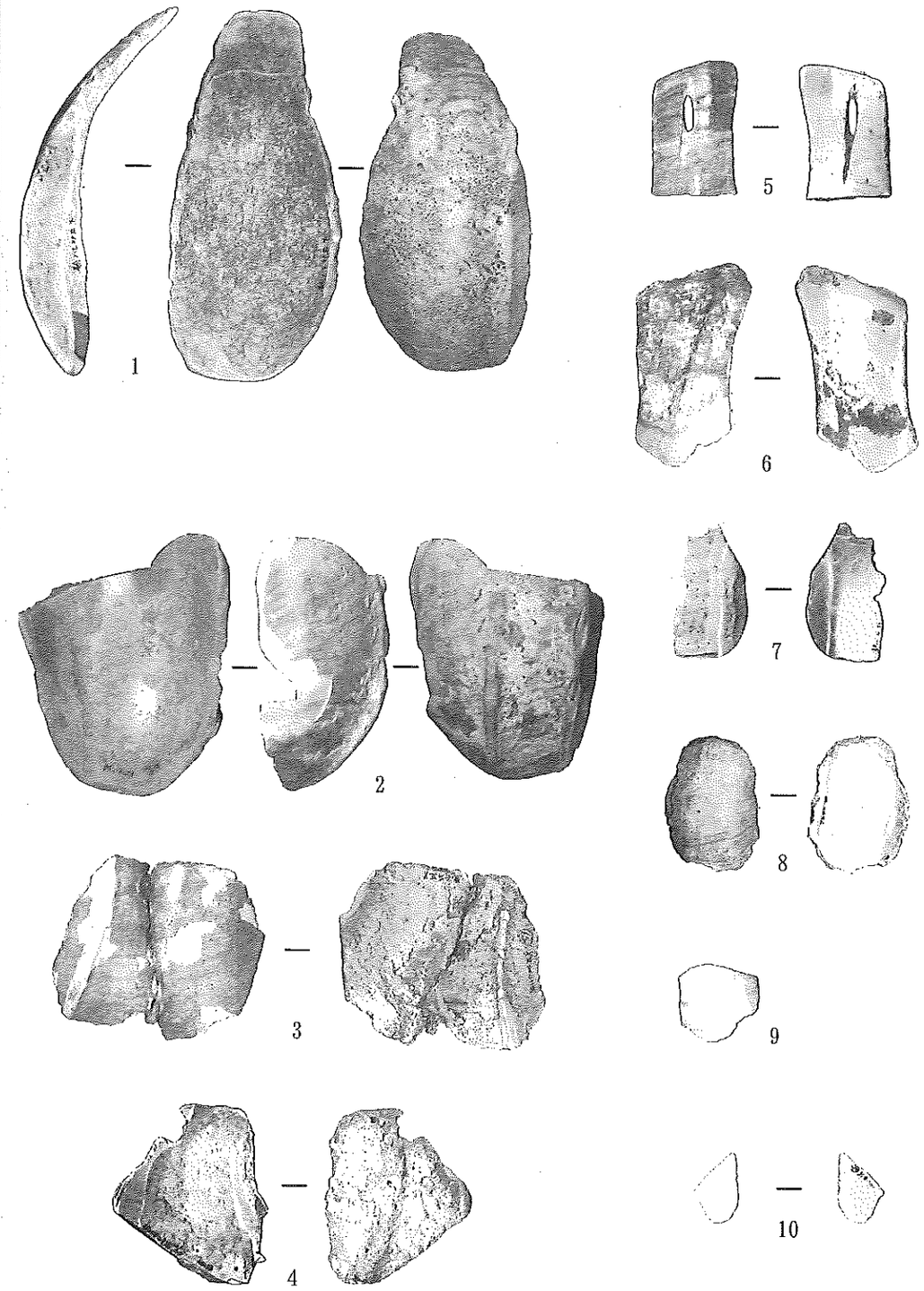
図 9～10 は外殻が剥離し、真珠層が露出し、加工の精度が高い。

表13　ヤコウガイ製貝匙観察一覧　　単位（g, cm）

no	製品	使用部位	縦	横	重さ	観察事項	出土地
1	完形	殻口～体層	16	7.9	122	周縁打割後一部研磨。突起部分、研磨。アバタ有。	ハE-35 Ⅲ下
2	身	体層	9.6	8.9	110	柄は殻口側。周縁研磨、突起打割。	ハF-23
3	身	殻口	7.1	7.4	69.98	周縁部分研磨、外殻半分剥離。	ハE-30 Ⅲ10/20
4	身	殻口	9	6.5	52.8		ハF-29 Ⅲ10/20
5	柄	殻口	6.3	3.8	24	周縁及び突起研磨有。	ハG-23 Ⅲ10/20
6	柄	殻口	8.2	5.6	56.24	両側面は打割後研磨、突起加工無。	ハE-30 Ⅱ0/10
7	身	体層	5.3	3.3	13.55	周縁研磨顕著。突起打割。	ハG-36 Ⅳ0/10
8	身	体層	7.1	5	35.2	腹面使用。研磨か、アバタ有。	ハH-15 Ⅱ
9	身	殻口	4	4.2	6.79		ホU-16 Ⅲ10/20
10	身	殻口	3.4	2.5	–		ハG-21 Ⅲ10/20
–	身	殻口	9.3	10	73.49	周縁打割と研磨。突起研磨顕著。	ハG-24 Ⅲ0/10
–	身	殻口	4.8	4.4	19.91	周縁研磨と打割。	ハG-28 Ⅲ10/20



第22図　ヤコウガイ製貝匙



図版 21　ヤコウガイ製貝匙

②ヤコウガイ有孔製品

10 点出土した。すべてハ地区の出土。E-30,35～38 の北側で出土

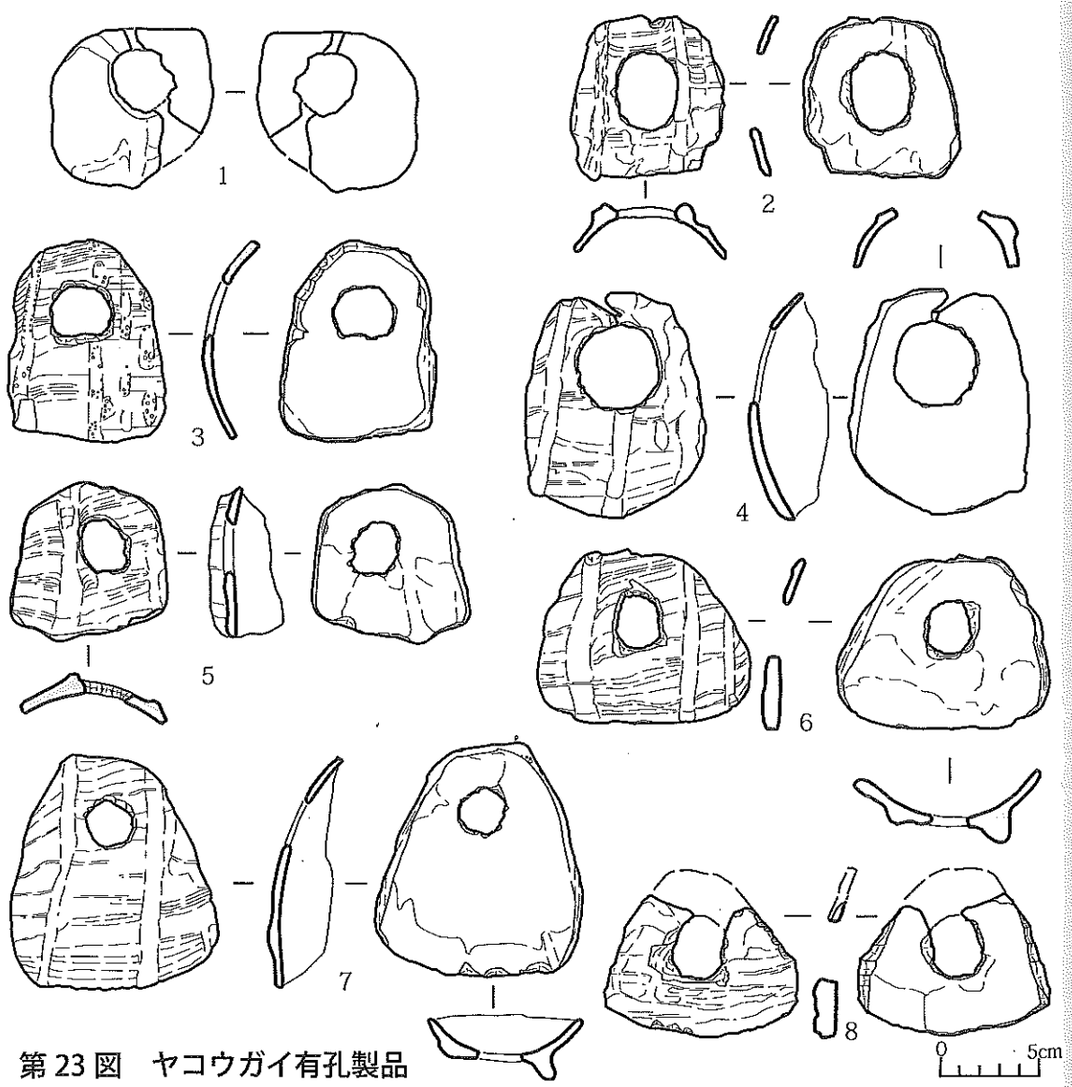
Ⅲ層－2 点、そのうち、図 5Ⅲ10/20 の下部で出土。Ⅳ層で 2 点、Ⅴ層で 6 点。下層で出だが多い。

ヤコウガイの殻口あるいは体層を切り取り、径 1.0～2.0cm の粗孔を施すものである。

殻口を用いたもの（図 1・5～8）、体層（図 2～4）を用いたものがある。

図 2 はシャコガイと共伴、図 8 はメンガイと伴出、

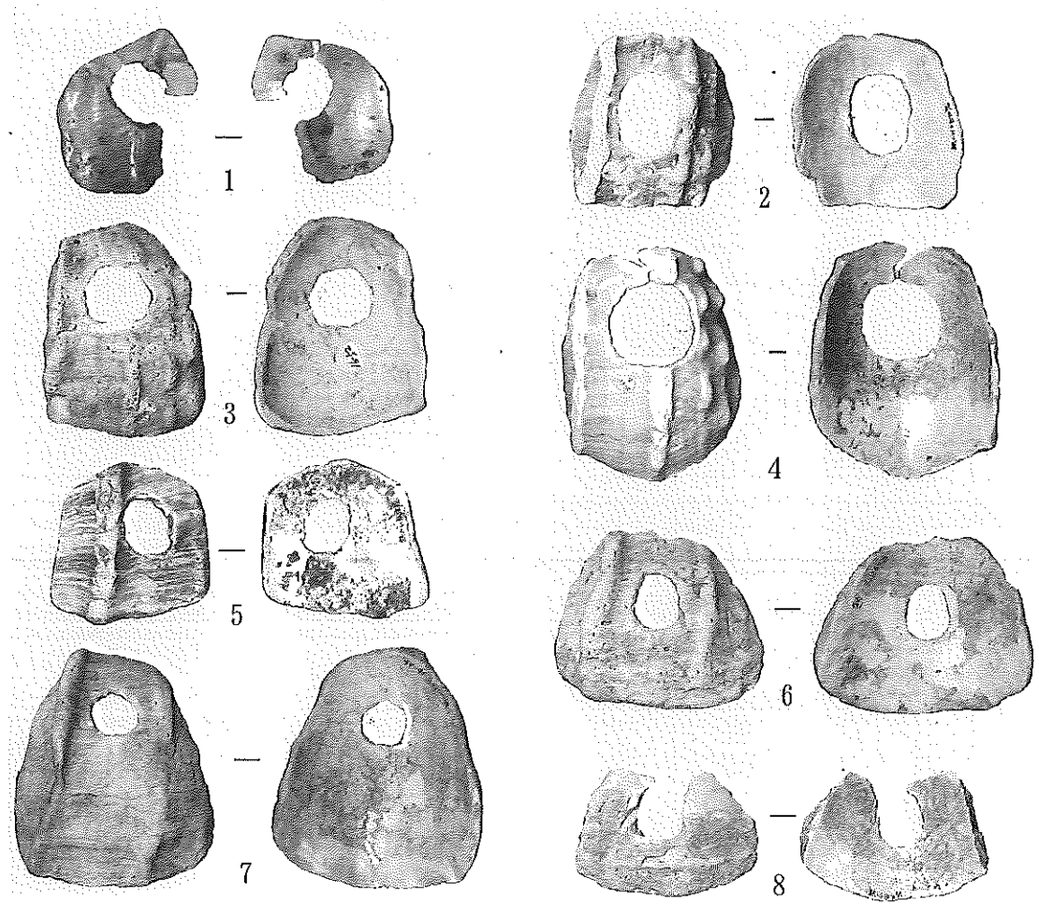
図 4 突起を打割調整し、平らにする。



第 23 図　ヤコウガイ有孔製品

表14　ヤコウガイ有孔製品観察一覧

図	部位	践存率	重さ	縦×横 孔縦×横	観察	孔形・加工・位置	出土地
1	殻口	0.8	22.48	7.8×5.5 3.1×2.2	周縁部は摩耗。内外面:真珠層のみ、突起も研磨。風化気味。	縦長楕円。 内→外、打割。	ハF-37 Ⅴ10/20
2	体層	1	56	7.9×7.6 3.7×3.1	形:長方形。周縁下部と左側縁は打割後研磨、上部と右側縁打割のみ。突起部は打割。シャコ貝製錘と共伴。	縦長楕円。 内外打割。 位置:中上。	ハH-38 ⅣO/10
3	体層	1	90	10.1×7.8 2.4×3	形:やや横長の円形。周縁:上下部摩耗、両側縁は打割顕著。突起は自然でアバタ有。	ﾋﾓｽﾞﾚか。	ハF-37 Ⅴ10/20
4	体層	0.9	108.9	11.2×9 4.1×3.8	形:やや縦長方形。周縁は打割痕有、両側縁は摩耗。突起2列打割調整。上部やや破損。	隅丸方形	ハG-38 Ⅲ
5	殻口	1	60	7.5×7.7 2.5×2.1	形:縦長方形。周縁:打割と研磨。外面:突起打割。	縦長楕円。内外打割。突起を避	ハE-30 Ⅲ10/20
6	殻口	1	150	8.6×10.7 26×21	形:台形。周縁:打割の後、摩耗、上下は打割明瞭。突起の加工丁寧。	縦長の楕円。中上。	ハF-37 VO/10
7	殻口	1	146.1	16×13 2.3×2.3	形:台形。周縁:打割後、研磨あるいは摩耗。突起2列、高い部分は打割、低い部分は自然	円形 内外打割。	ハG-37 VO/10
8	殻口	0.5	93.7	7×9.6 2.9×2.5	形:台形。周縁:打割、上部は破損。突起、加工無。本品はメンガイ製貝錘と伴出。	縦長楕円 両面打割。	ハG-38 VO/10



図版 22　ヤコウガイ有孔製品

③オオベッコウガサ製品

オオベッコウガサは貝殻の性質上、殻頂部を中心に、大きい孔を有するものや貝殻の外縁に剥離が見られるものもあるが、それ以外に殻頂や殻頂上方にやや楕円形の孔を有するものを製品とした。

表15　オオベッコウガサ製品出土量

地区	層	上孔	中央孔	自然貝	合計
ハ	Ⅰ	3		3	6
	Ⅱ	1		2	3
	Ⅲ	8	3	13	24
	Ⅳ		1	1	2
	Ⅴ		2	1	3
ホ	Ⅲ			1	1
合計		12	6	21	39

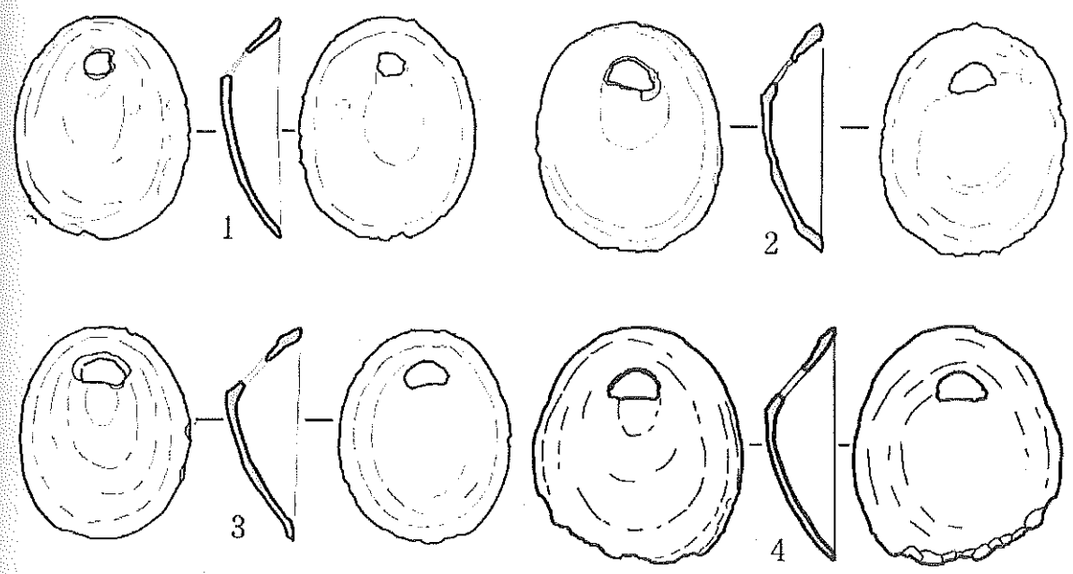
Ⅰ層は畦、不明、撹乱を含む。

製品は18点出土し、そのうち図に示したような殻頂より上位に施すものは12点である。その中にはH-19とI-18・19（図1）で二枚貝有孔製品（リュウキュウサルボオ）と共伴して出土したものもある。

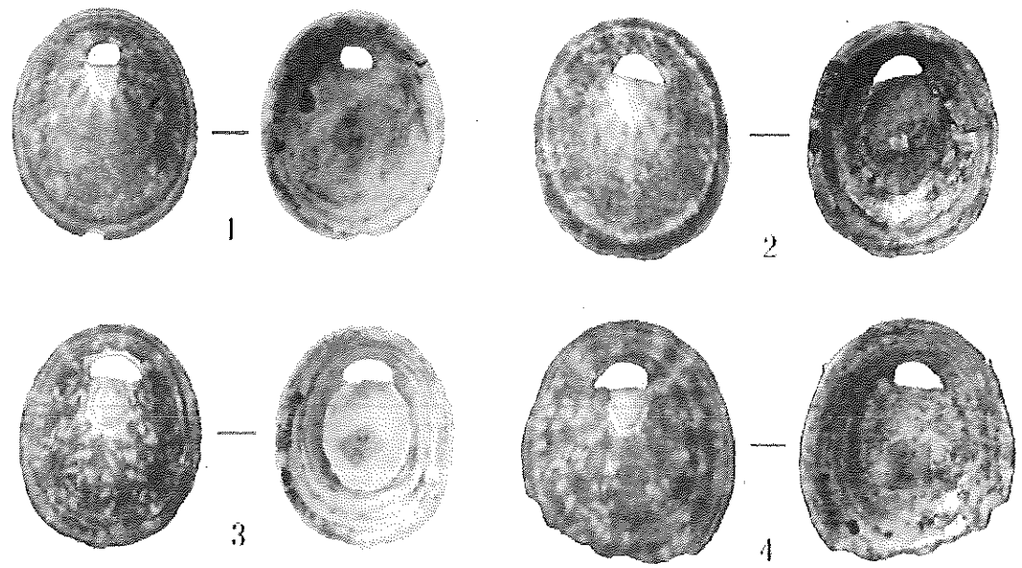
また、図3と図4は一括出土した。本品の用途を知る上で貴重な出土状況である。表15に分類別の出土状況と各製品については表16に観察一覧を示した。

表16　オオベッコウガサ製品観察一覧　　単位:cm、g

no	残存	殻高	殻長	重量	孔縦	孔横	孔位置	孔形	穿孔方向	外縁	出土地	備考
1	完	7	5.6	17	0.9	1	上中	a=b	内	無	ハⅠ-18・19 Ⅱ	no355のリュウキュウサルボウの貝錘共伴
2	完	6.8	5.9	17	1.2	1.3	上中	a<b	内	無	ハH-19 Ⅲ10/20	
3	完	6.7	5.4	18	1.1	1.6	上中	a<b	内	無	ハⅠ-19 Ⅲ20/30	
4	完	7.2	5.9	21	1.2	1.6	上中	a<b	内	有	ハⅠ-19Ⅲ 20/30	
_	完	4.5	3.6	3	1.3	1.4		不規則	内	無	ハF-32 撹乱	
_	完	4.5	3.9	5	1.8	1.1		不規則	内	無	ハE-33 Ⅴ20/30	
_	完	4.6	3.6	4	1.7	1.3		a=b	内	無	ハF-30 Ⅲ10/20	
_	完	5.6	4.3	10	0.3	1.8		不規則	外	無	ハF-33 Ⅴ0/10	
_	完	5.5	4.4	6							ハI-21 Ⅲ0/10	全体的に剥離
_	完	3.5	3	1.8			中中				ハJ-44 Ⅲ0/10	
_	完	2.9	3.5	1.9	2	1.7	中中				ホU-18 Ⅲ20/30	



第24図　オオベッコウガサ製品　　0　5cm

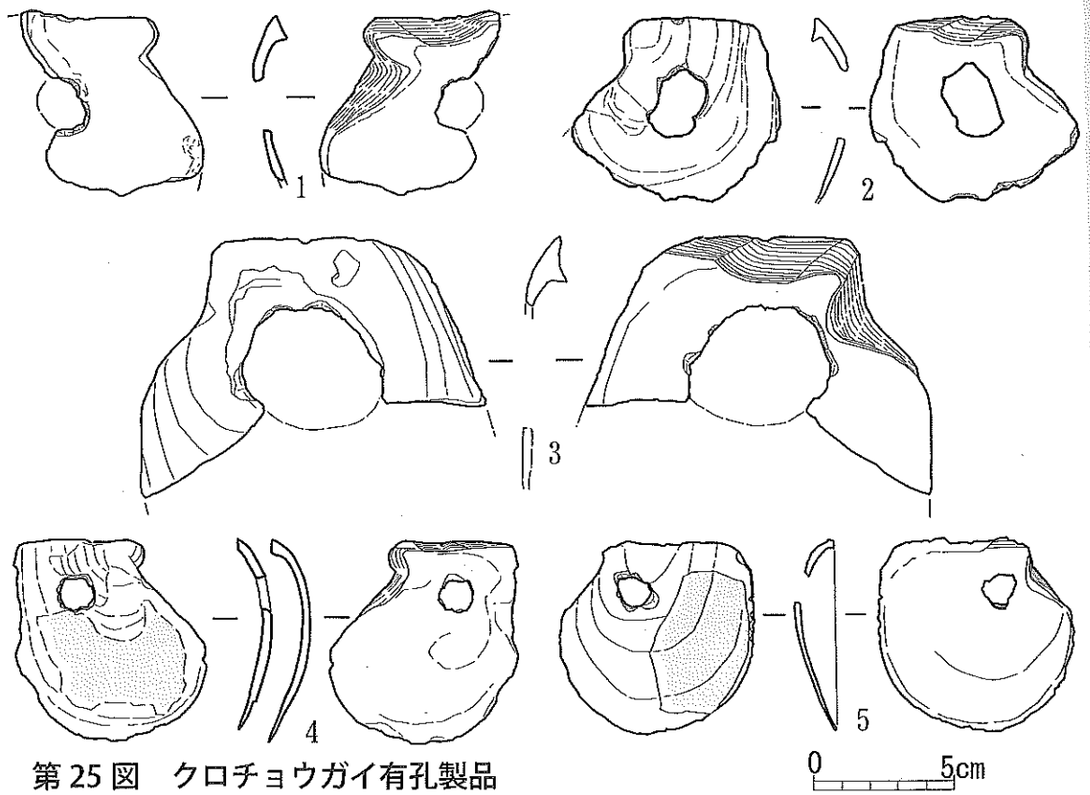


図版23　オオベッコウガサ製品

④クロチョウガイ有孔製品

クロチョウガイの殻頂近くにに0.1～2.0cmの粗孔を施すもので、中には腹縁を破損するものがある。（図2）

すべてハ地区北側の出土で、出土層はⅣ層で1点、Ⅴ層で4点の出土である。
残存状況から腹縁を破損するのが多く、使用によるものと想定される。
他の二枚貝有孔製品と同じように何かに結んで、腹縁を垂らすように用いたものと思われる。



第25図　クロチョウガイ有孔製品

表17　クロチョウガイ有孔製品観察一覧

単位：cm、g

番号	貝種	残存	重さ	殻高×殻長 孔縦×横	貝の状態	孔形・穿孔	出土地
1	クロチョウガイ	殻頂	35.07	6.4×6.5 孔2×-	真珠層露出。	方形、複孔、 内→外	ハF-34 Ⅳ0/1
2	クロチョウガイ	殻頂	21.83	6.8×7.1 孔2.55×1.55	腹縁一深く打割	楕円、 内→外	ハF-28 Ⅴ0/1
3	クロチョウガイ	殻頂	55.5	8.8×11.6 孔4.1×5	殻表一残。	楕円、 内→外	ハF-34 Ⅴ0/1
4	クロチョウガイ	完形	21.34	6.9×6.6 孔1.1×1.25	殻表一残。	楕円、 内→外	ハG-38 Ⅳ0/1
5	クロチョウガイ	完形	17.21	6.8×7 孔1.1×1.05	腹縁ヒビ	方形、複孔、 内→外	ハG-37 Ⅴ0/1

図版24　クロチョウガイ有孔製品

⑤二枚貝有孔製品

貝種別にはソメワケグリ 15 点、カワラガイ 6 点、リュウキュウサルボオ 50 点、リュウキュウザルガイ 1 点、メンガイ類 585 点、ヒメジャコ 201 点、ヒレジャコ 46 点、シラナミ 30 点、シャコガイ 11 点、エガイ 1 点、キクザル 15 点、ヌノメガイ 2 点、サメザラ 1 点、フネガイ科 2 点、貝種不明 7 点、合計 932 点出土した。

その中ではメンガイ類が最も多く、次いでヒメジャコ、シラナミ、ヒレジャコなどのシャコガイ類が続く。

出土地別にみるとハ地区ではⅠ層 11 点、Ⅱ層 52 点、Ⅲ層 401 点、Ⅳ層 130 点、Ⅴ層 245 点、撹乱層 19 点、合計 839 点と最も多い。その他にニ地区Ⅱ層で 1 点、ヘ地区Ⅱ層で 2 点、Ⅲ層 6 点の計 8 点、ホ地区Ⅱ層 5 点、Ⅲ層 67 点、Ⅳ層 12 点の合計 84 点出土した。

表18　二枚貝有孔製品出土量

地区	層＼貝種	ソメワケグリ?	カワラガイ	リュウキュウサルボウ	リュウキュウザルガイ	メンガイ類	ヒメジャコ	ヒレジャコ	シラナミ	シャコガイ	エガイ	キクザル	ヌノメガイ	サメザラ	フネガイ科	貝種不明	合計
ハ	撹乱					10	3	3	2	1							19
	Ⅰ					6	3	1	1								11
	Ⅱ	1	1	4		33	9	1	1				1			1	52
	Ⅲ	8	3	18	1	231	89	16	11	8		12		1	2	1	401
	Ⅳ	1	1	4		93	20	8	2							1	130
	Ⅴ	3		16		142	56	13	10	1		2				2	245
	合計	14	4	44	1	527	186	43	28	10		14	1	1	2	5	839
ニ	Ⅱ	1															1
ヘ			1	3		4											8
ホ	Ⅱ			1		4											5
	Ⅲ		3	2		40	12	2	2	1	1	1	1			2	67
	Ⅳ					9	2	1									12
	合計	0	1	3		54	15	3	2	1	1	1	1			2	84
総合計	総合計	15	6	50	1	585	201	46	30	11	1	15	2	1	2	7	932

重量でみるとメンガイ 1.2～シラナミ 460 g と幅があり、平均は 24.7 g を測る。

ハ地区では図版 25 で示すように二枚貝有孔製品が一括で出土した。10 個以上一括で出土したものは、①E-29Ⅲ層 20/30、11 点（メンガイ 10 点、ヒメジャコ 1 点）、②F-38Ⅴ層 0/10（ヒメジャコ、リュウキュウサルボオ各 1 点、メンガイ 3 点）、③G-27Ⅲ0/10（ヒメジャコ 11 点、シャコガイ 1 点、メンガイ類 2 点）、④E-35Ⅴ層 10/20、16 点、⑤F-30Ⅴ層 0/10、10 点、⑥F-37Ⅴ層 10/20、25 点、⑦F-37Ⅴ層 10/20、11 点、⑧G-36Ⅴ層 0//10、13 点、⑨H-40Ⅴ層 0/10（表 20）10 点、Ⅳ層では⑩F-35Ⅳ層 31 点、⑪H44Ⅳ層 23 点。

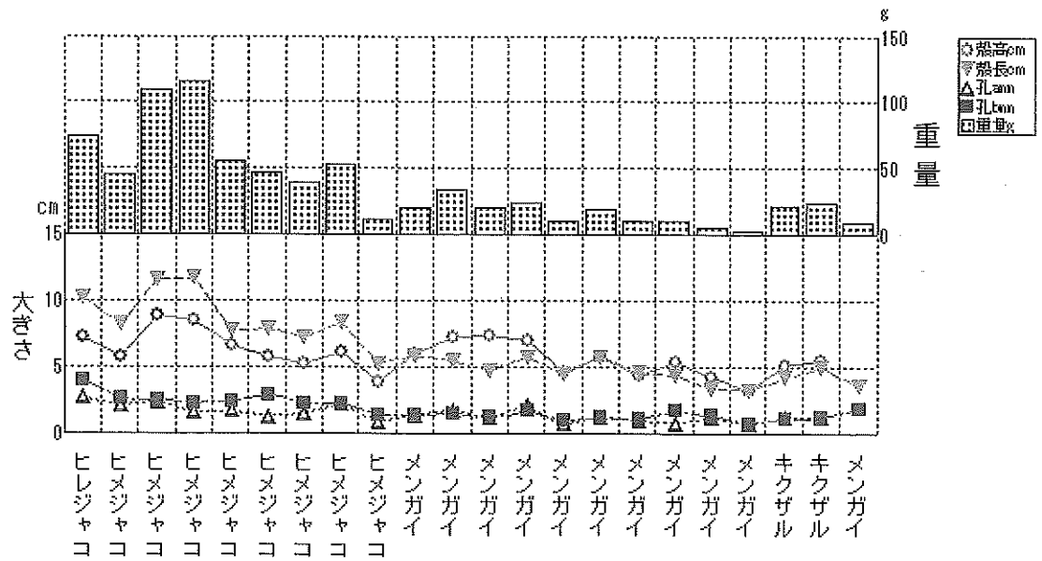
二枚貝有孔製品の一括出土は本品の用途を考える上で重要である。1969 年の調査でも 218 点出土している。平面分布（第 26 図）を見るとH-44、ＥＦ34～37 グリッドに集中し、F-40F-30、G-27・20・G-14 にある程度のまとまりが見られる。

第 26 図（F-36Ⅴ10/20）に一括出土の貝殻の大きさ（殻長・殻高）重量・孔の大きさをグラフで示した。これによると殻長・殻高の大きさ及び孔の大きさほぼ一定している。

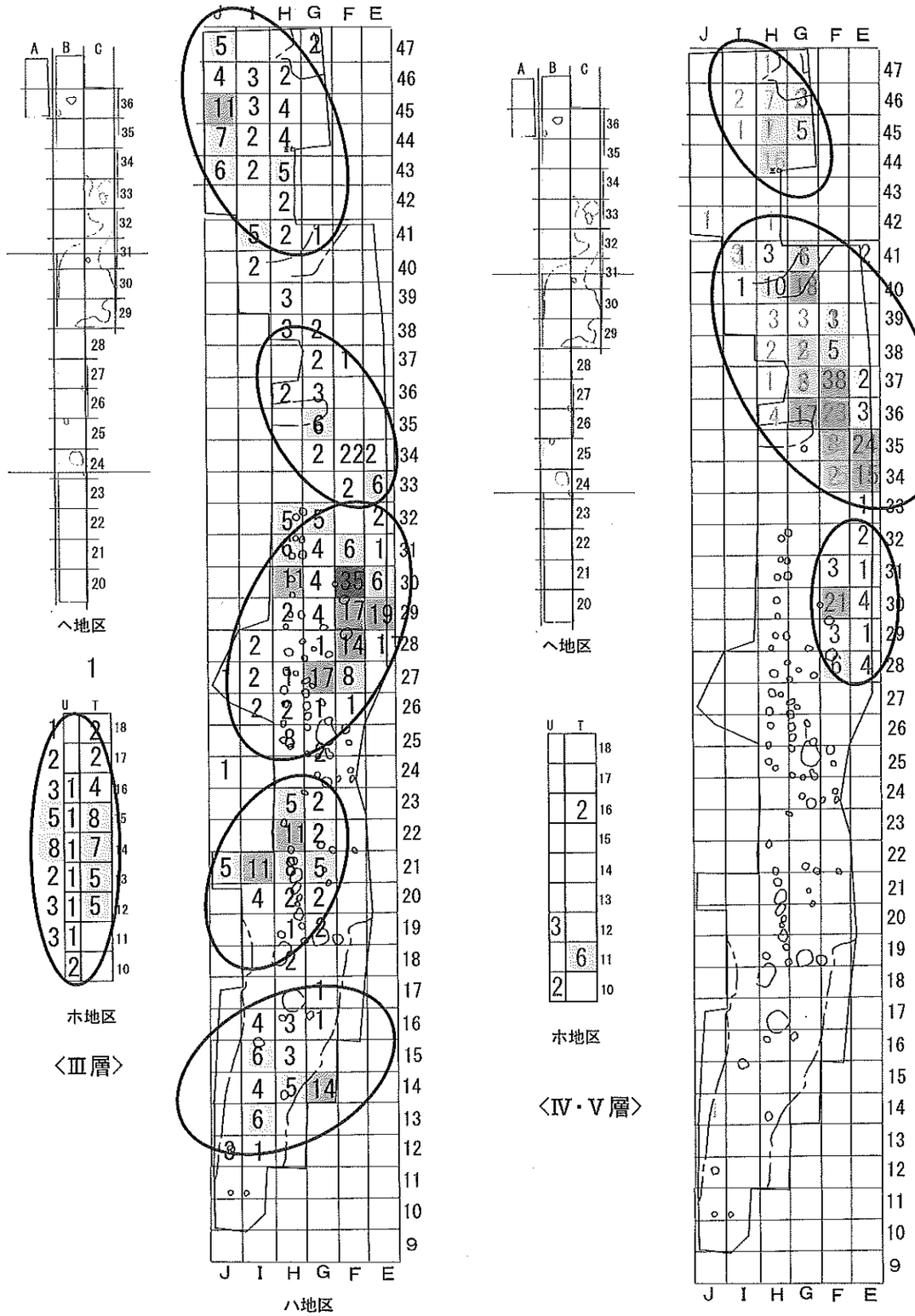
表19　二枚貝有孔製品観察一覧（一括出土）

no	貝種	左右	殻高 cm	殻長 cm	重量g	孔タテmm	孔ヨコmm	孔位置	孔形	穿孔方向	外縁	出土地
1	メンガイ	左	4.2	4.7	7.84	1.2	1.6	上中	楕円	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
2	メンガイ	左	4.6	3.8	6.63	1.4	1.9	上中	楕円	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
3	メンガイ	左	4.3	3.8	8.16	0.7	0.6	上中	方形	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
4	メンガイ	左	6.2	4.7	13.52	0.9	1.7	上中	楕円	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
5	メンガイ	左	5.6	4.5	12.9	2.2	1.5	上中	不定形	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
6	メンガイ	左	5.3	4.9	17.94	3	2.2	中中	不定形	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
7	ヒメジャコ	左	3.5	4.2	7.51	0.8	0.8	上前	方形	内→外	前後背縁	ハH40Ⅴ0-10
8	ヒメジャコ	左	5.4	5.5	11.6	0.8	1.8	上中	不定形	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
9	ヒメジャコ	左	4.2	5.4	12.39	0.9	1.4	上中	複孔	内→外	摩耗	ハH40Ⅴ0-10
10	ヒメジャコ	左	9	6.7	66.39	1.9	1.4	上前	不定形	内→外	×	ハH40Ⅴ0-10

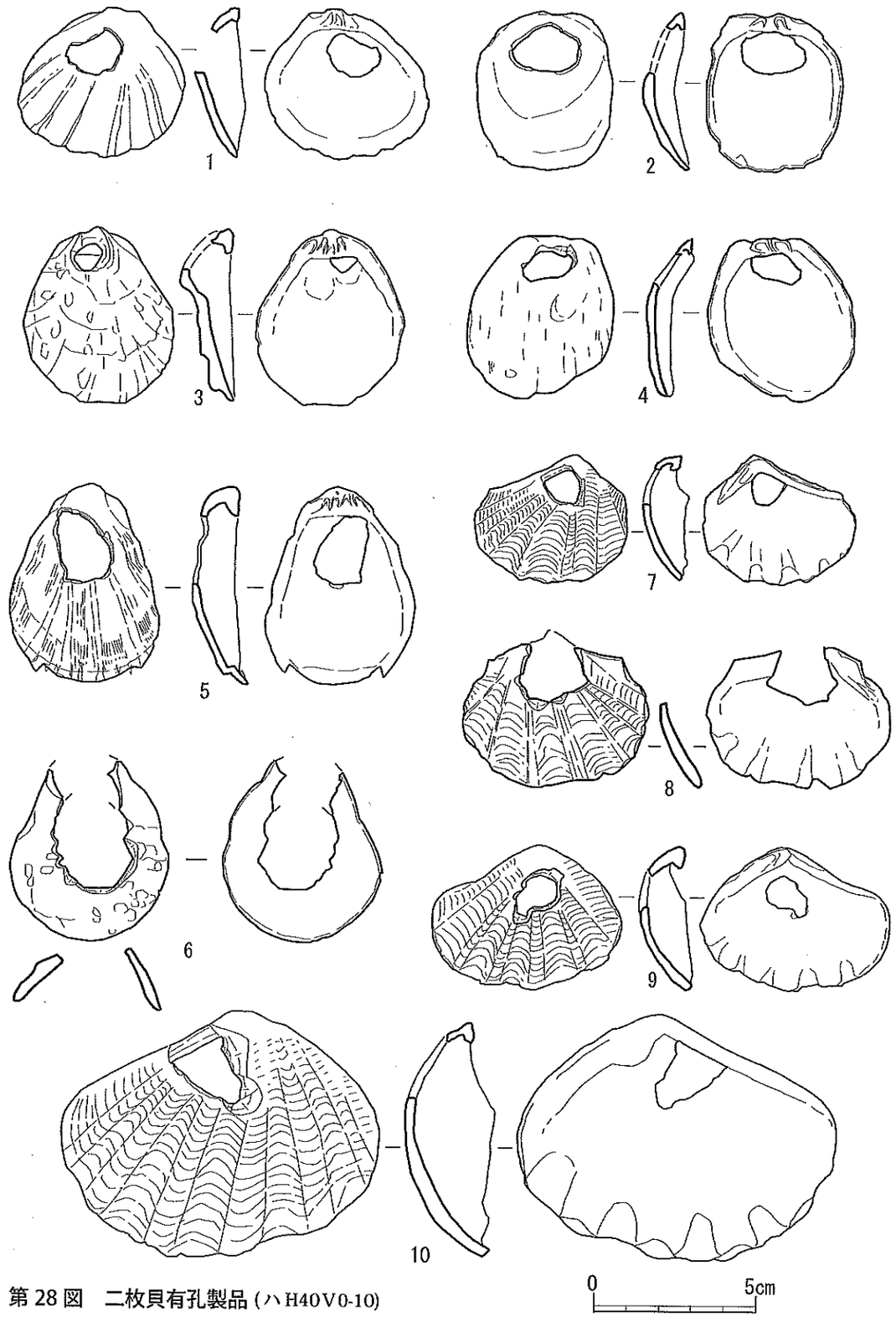
第 26 図　一括出土二枚貝有孔製品の法量（⑥F-36Ⅴ10/20）



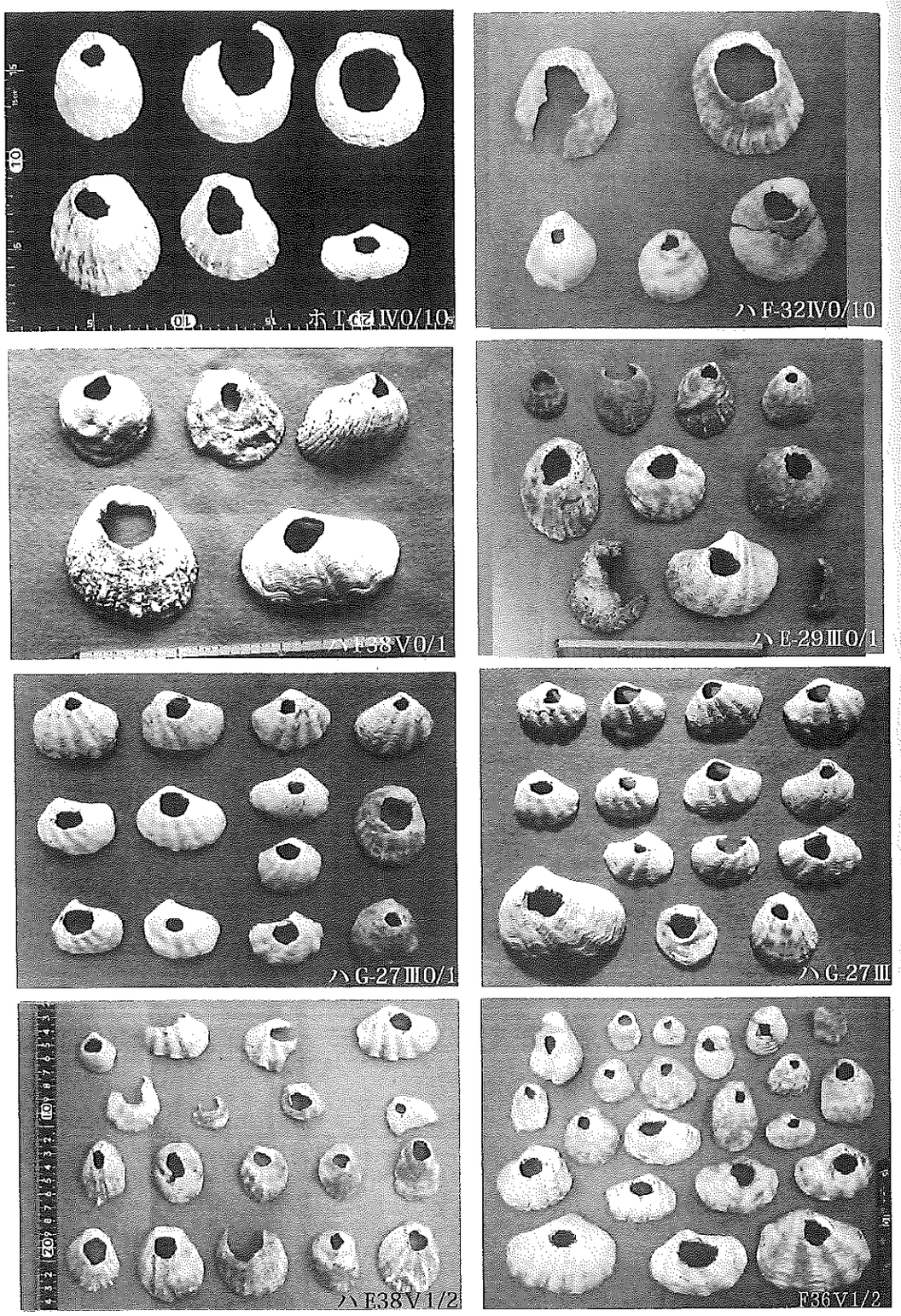
重量は 3 つに分かれ、メンガイ・キクザルは重さ 10g 前後、ヒメジャコは 50g 以下と 100g 前後がある。総じて、重さは貝の種類によって若干バリエーションが見られるが、貝種ごとにはほぼ一定している。貝殻の大きさは重さよりは一定するが、大きさが異なる 1～2 個確認される。



第 27 図　二枚貝有孔製品層別平面分布　(数字は個数を示す)



第 28 図　二枚貝有孔製品 (ハ H40V0-10)



図版 25 二枚貝有孔製品（一括）

⑥その他

マクラガイ：図 1 はマクラガイの殻頂及び体層を両面から研磨したもので、その厚さは 0.9cm である。

イモガイ：図 2～5 は小形、図 6～7 は中形のイモガイである。図 2 と 3 はマクラガイと同じように研磨され、図 2 は殻頂、図 3 は殻頂と体層を両側面から研磨し、三角形状をなす。図 4 と 5 は摩耗により、穿孔するもので自然の摩擦、あるいは人工かははっきりしない。前者は腹面、後者は背面と腹面の両側に見られる。図 6 と 7 は中型のイモガイで殻頂部分が打割により、大きく穿孔する。体層部分は破損するが、加工は明瞭でない。いずれも肩部は摩耗により、丸味を帯びる。

マガキガイ：図 8 はマガキガイの殻頂部分を円盤状にしたもので、全体的に摩耗する。

キバタケガイ：図 9 はキバタケガイの加工品で、殻頂を欠損し、両体層面を研磨するもので、前述のマクラガイやイモガイに共通する。

ノシガイ：図 10 はノシガイで殻頂を欠損し、背面を打割により穿孔するものである。

ソデガイ：図 11 はソデガイの背面と腹面を摩耗により欠損するものである。

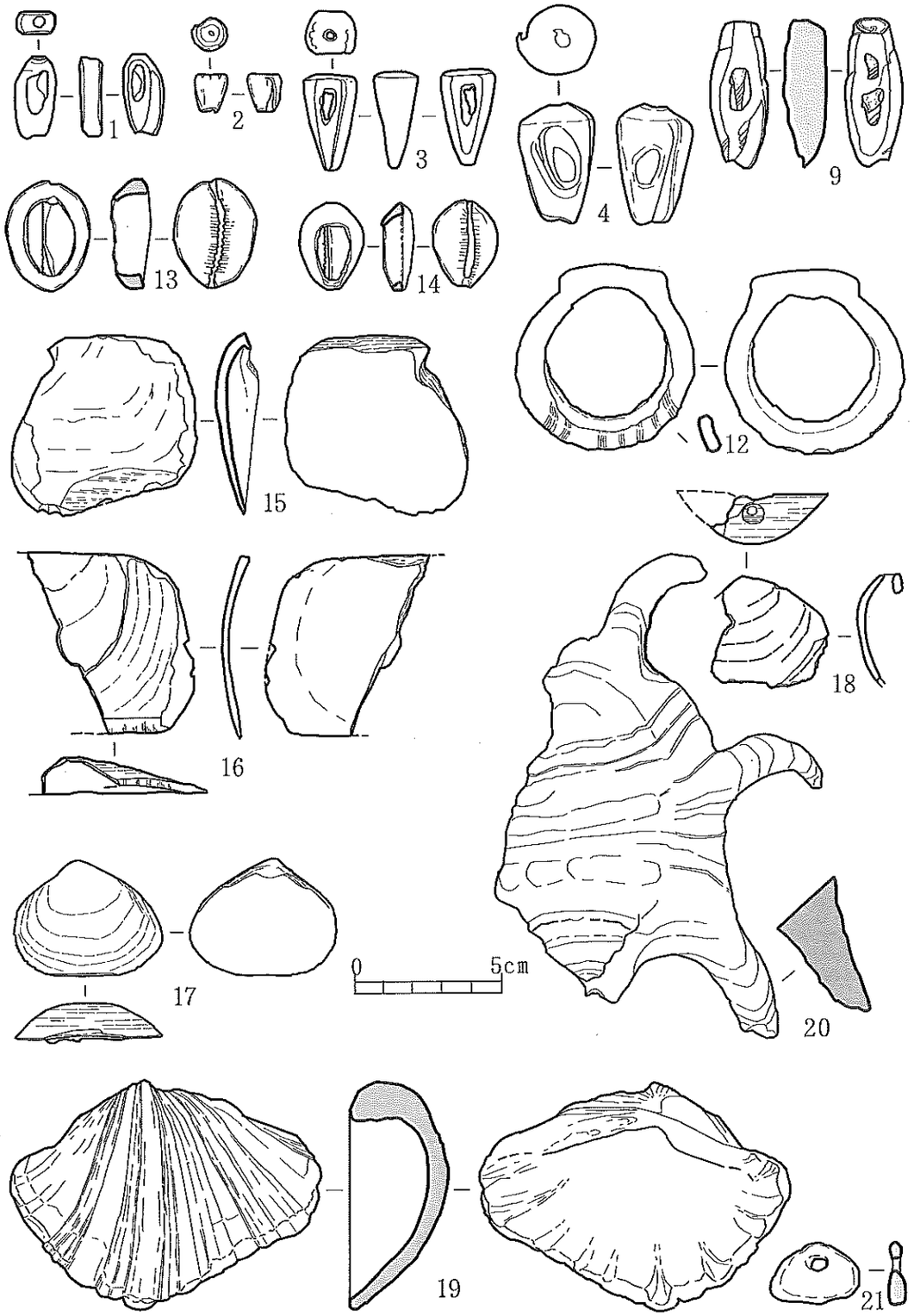
メンガイ：図 12 はメンガイの内縁を打ち割り、リング状にしたものである。

タカラガイ：図 13 と 14 はタカラガイの背面を打ち割り、加工したもので、前者がハナマルユキ、後者がハナビラダカラで、前者は殻軸も一部欠落する。いずれもハ地区 H-22Ⅲ層の出土である。本遺跡でハナビラダカラ 2 点、ハナマルユキ 4 点、種不明 2 点計 6 点出土している。その内、2 点図化した。他の製品は摩耗し、製品の可能性は低い。

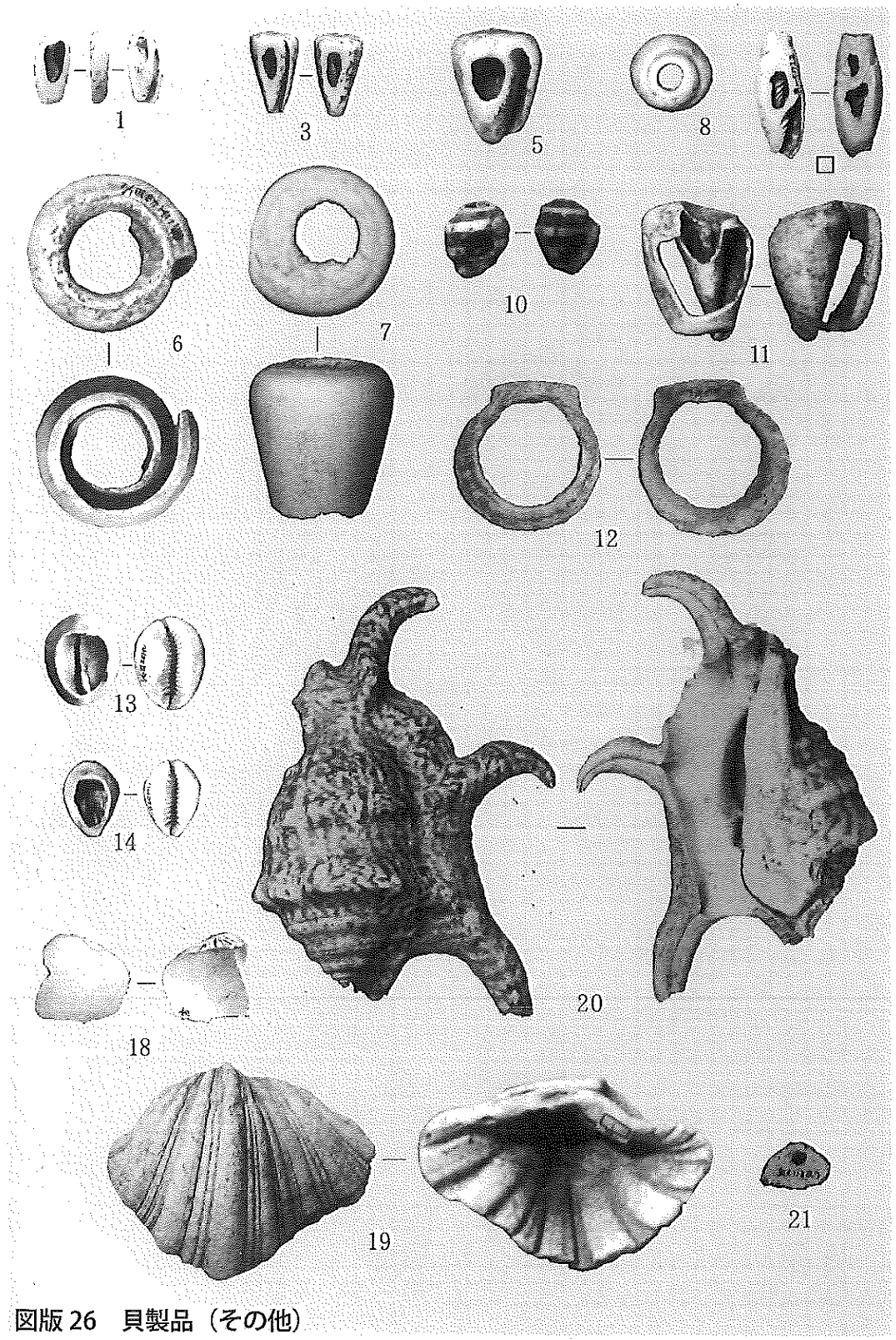
表20　その他貝製品観察一覧

単位:cm,g

no.	貝種	完破	縦	横	孔ﾀﾃ	孔ﾖｺ	重さ	観察	出土地
1	マクラガイ	完形	1.7	0.9				殻頂、両面研磨	ハ柱穴73
2	イモガイ	完形	1.2	0.8	0.6			研磨	ハJ-46Ⅲ0/10
3	イモガイ	完形	5.7	1.8	0.3	0.3	8	研磨	ホT-14Ⅲ10/20
4	イモガイ	完形		1.7	0.7	0.7		摩耗	ハI-39Ⅰ・Ⅱ
5	イモガイ	完形	3.38	3.5				摩耗	ホT-21Ⅲ0/10
6	イモガイ	完形	2.8	3.9	1.5	1.8	29	打割	ハH-43Ⅲ10/20
7	イモガイ	完形	2.9	4	1.8	1.7		打割	ハ柱穴53
8	マガキガイ	完形	2.1	2	0.6	0.6		摩耗か	ハI-11Ⅲ0/10
9	キバタケガイ	完形	5.1	1.9	–	–	10	研磨両面研磨	ハE-37Ⅰ・Ⅱ
10	ノシガイ	完形	1.4	1.3	0.4	0.3	0.5	打割体層	ホU-11Ⅲ10/20
11	ソデガイ	完形	3.5	3.1			16.8	背面欠、腹面摩耗	ハH-22
12	メンガイ	完形	6.4	6.2	4.8	4.1		摩耗内縁、打ち割り	ヘA-38Ⅱ
13	ハナマルユキ	完形	3.3	2.6	0	0	7.09	背面欠殻軸欠	ハH-22Ⅲ0/10
14	ハナビラダカラ	完形	2.6	2			3.78	背面欠	ハH-22Ⅲ0/10
15	クロチョウガイ	完形	6.1	6.2	–	–		腹縁研磨	ホU-14Ⅲ10/20
16	クロチョウガイ	半欠	6.2	–	–	–		腹縁研磨	ホT-14Ⅲ10/20
17	リュウキュウバカガイ	完形	4.5	5.8	–	–		腹縁研磨	ホU-17Ⅲ30/40
18	ハマグリ	半欠						殻頂研磨、腹縁剥離、破損	ヘA-38Ⅱ
19	シャゴウ	完形	9.9	138	–	–	310	腹縁摩耗	ハE-37Ⅰ・Ⅱ
20	スイジガイ	完形	11.8	8	0	0	252	突起欠、①のみ残、打割	ハI-42Ⅲ10/20
21	サンゴ	完形	2.5	1.8	0.5	0.6	3.08	孔	ハE-30Ⅱ0/10



第29図　貝製品（その他）



図版 26　貝製品（その他）

貝刃：二枚貝の腹縁を外殻面から研磨したもので、図 15、16 はクロチョウガイ、図 17 はリュウキュウバカガイである。クロチョウガイは前者が小さめ、後者が大きい貝殻を用いている。

ハマグリ：図 18 はハマグリの殻頂を研磨し、穿孔するもので、腹縁は大きく剥離する。

貝皿：図 19 は大型のシャコウの周縁を摩耗するもので、容器として用いた可能性が高い。

スイジガイ：図 20 はスイジガイで突起①以外の突起を欠くもので、人工かどうか明瞭でない。この種の製品は突起①を残す例がおおい

サンゴ：図 21 はサンゴ石で上方に径 0.5cm の孔を有するが、人工か自然かは明瞭でない。

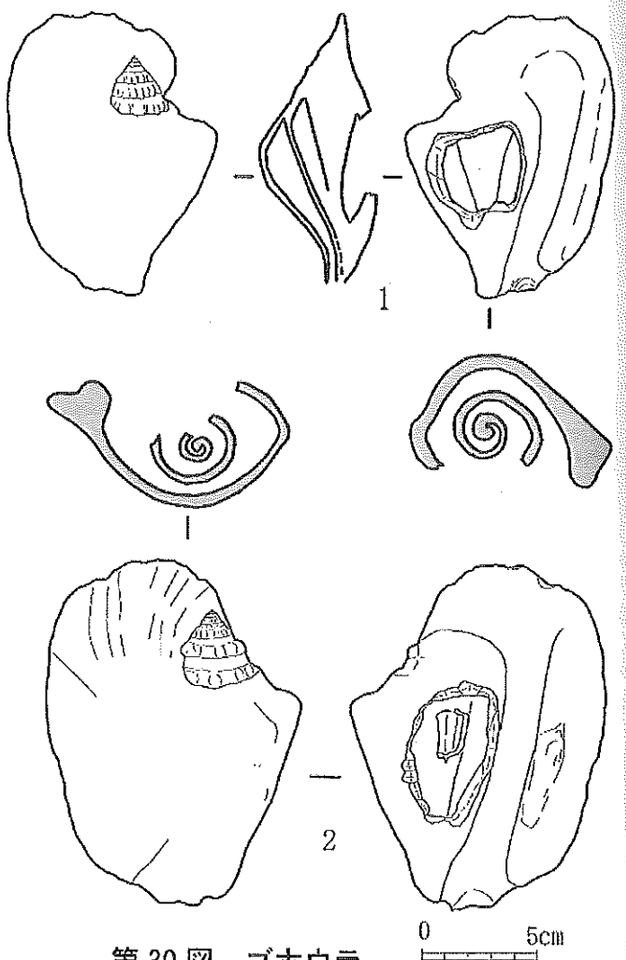
⑦　ゴホウラとアツソデガイ

貝製品の素材となるゴホウラとアツソデガイが 127 点得られている。表 21 に示したようにゴホウラがハ地区で 82 個、ヘ地区で 9 個、ホ地区で 19 個、ニ地区で 1 個の計 111 点、アツソデガイがハ地区 9 点、ヘ地区 1 点、ホ地区 6 点の計 16 点出土した。これらの貝を割れ方で分類すると図版 27 に示したように A（背面欠損）、B（側面欠損）、C（両面欠損）、D（腹面欠損）、E（破片）、F（完形）に分けられる。その出土割合は E タイプが最も多く 45.05%、B タイプ 20.72%、C タイプ 14.41%、A タイプ 12.61%で、完形の F タイプは 2.7%と最も少ない。

第 30 図に示した様に腹面を欠損した（D タイプ）ものは 2 種あり、図 1 は製品の加工の可能性もあるが、図 2 は破損面が内側を向いており、製品加工の可能性は低いと思われる。

また、E タイプの中には焼けた貝殻も 3 例確認された。

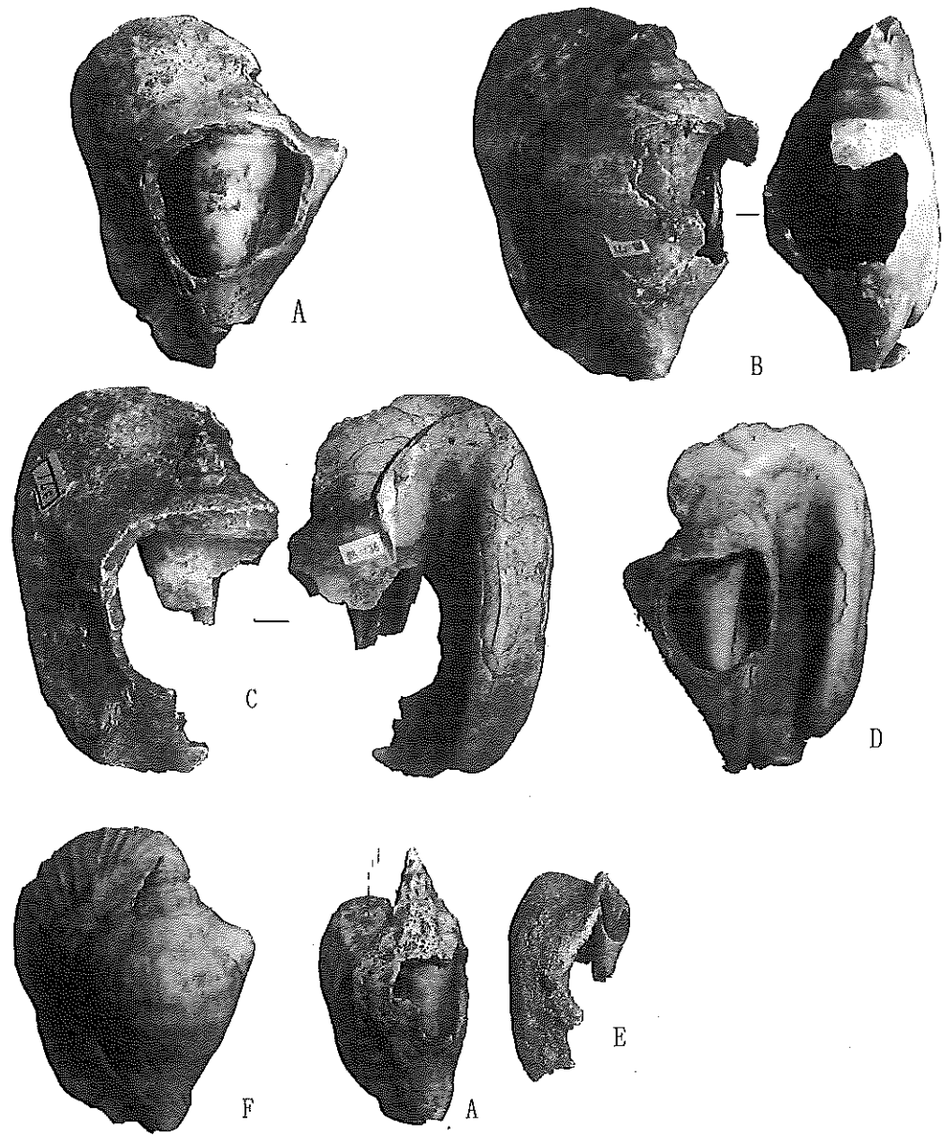
以上のことより、ゴホウラ・アツソデガイは貝製品の素材とされているが、本貝塚出土ものは食用の可能性が高いのが大半を占めるものと思われる。これは本貝塚からゴホウラ・アツソデガイの貝輪や未製品が出土してないこともから窺える。また、最も多く出土しハ地区においてはⅢ0/10 10/20 の上層部に集中（79.3%）し、出土する土器もくびれ平底土器であることから後期終末の時期である。



第 30 図　ゴホウラ

表21　ゴホウラ・アツソデガイ割れ方別出土量

地区層＼貝種		ゴホウラ A	B	C	D	E	F	合計	アツソデガイ A	B	C	D	E	F	合計
ハ	Ⅰ・Ⅱ	3	4	2		4		13		1			2		3
	Ⅲ	8	14	6	2	34	1	65			1	1		4	6
	Ⅳ・Ⅴ		1	1		1	1	4							0
ヘ	Ⅲ	1	2	2	2	2		9						1	1
ホ	Ⅲ	2	2	4	1	9	1	19			1		5		6
ニ	Ⅱ			1				1							0
合計		14	23	16	5	50	3	111	0	1	2	1	7	5	16



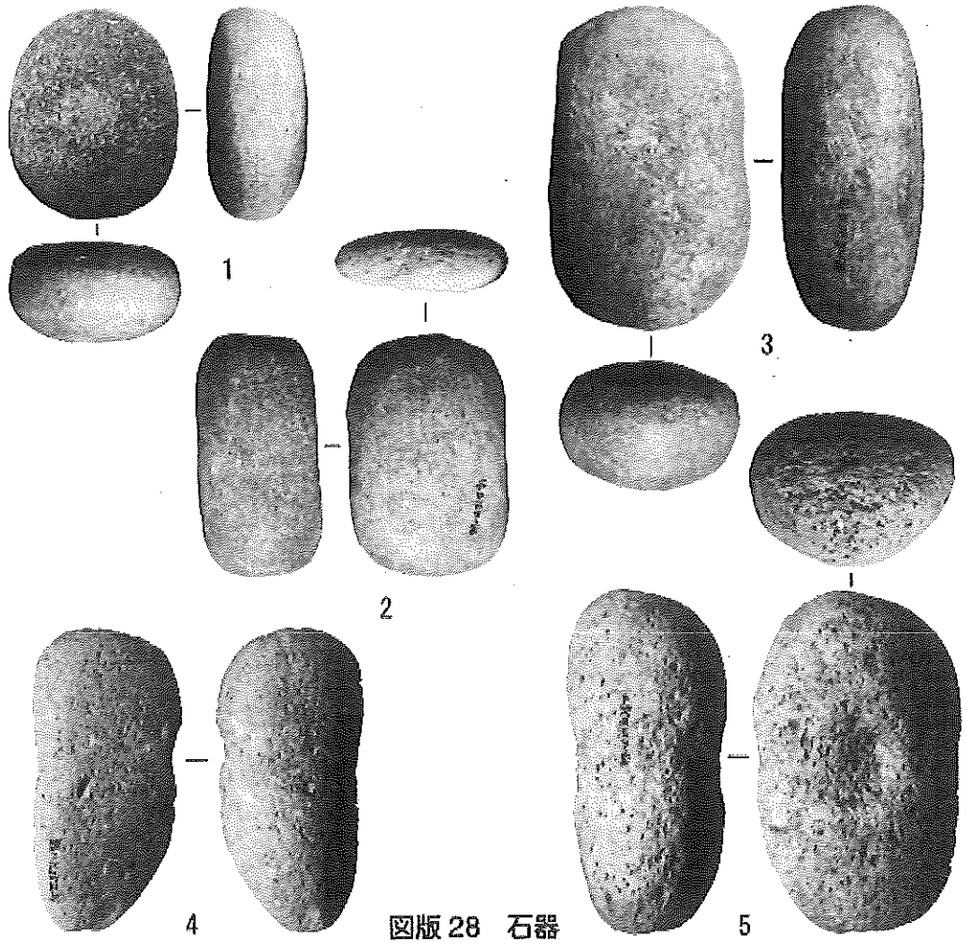
図版 27　ゴホウラ・アツソデガイ（分類）

G　石器

本遺跡出土の石器はクガニ石１点、凹み石７点、敲き石５点、磨り石２点、石器片２点、スレート点、打製石斧２点、石器片５点、合計25点である。出土地別にはハ地区18点、ヘ地区５点、ホ地区２点、ニ地区１点の、計25点である。

表22　石器観察一覧

no	種類	完破	石質	縦 cm	横 cm	厚さ cm	重さ g	観察	出土地
1	敲き石	完	砂岩	7.4	5.8	3.3	230	表面-敲き、裏面-凹み。	ホT-11Ⅳ0/10
2	凹み石	完	硬砂岩	8.6	5.4	4.3	379	全面-凹みあり。	ハG-31Ⅴ0/10
3	くがに石	完	砂岩	11.4	8.9	4.78	676	表面-中央凹み、上面-研磨、下・両側面-敲き。	ハG-30Ⅲ20/30
4	敲き石	完	砂岩	10.5	5	3.2	221	表面は凹み、上下側面-敲き、横断面は台形。	ハH-35Ⅲ0/10
5	凹み石	完	黒雲母石英はん岩	12.2	78	5	723	表面に凹み、上・側面に敲き痕。産地-名護市世冨慶。	ヘC-29Ⅲ10/20



図版28　石器

H　鉄製品

刀子４点、鏃状製品１点の計５点出土した。

出土地別にみるとハ地区Ⅴ層（図１）、柱穴で３点（図２，３，５）、ホ地区Ⅲ層で１点（図４）である。　以下、観察一覧を表23、第31図に示す。

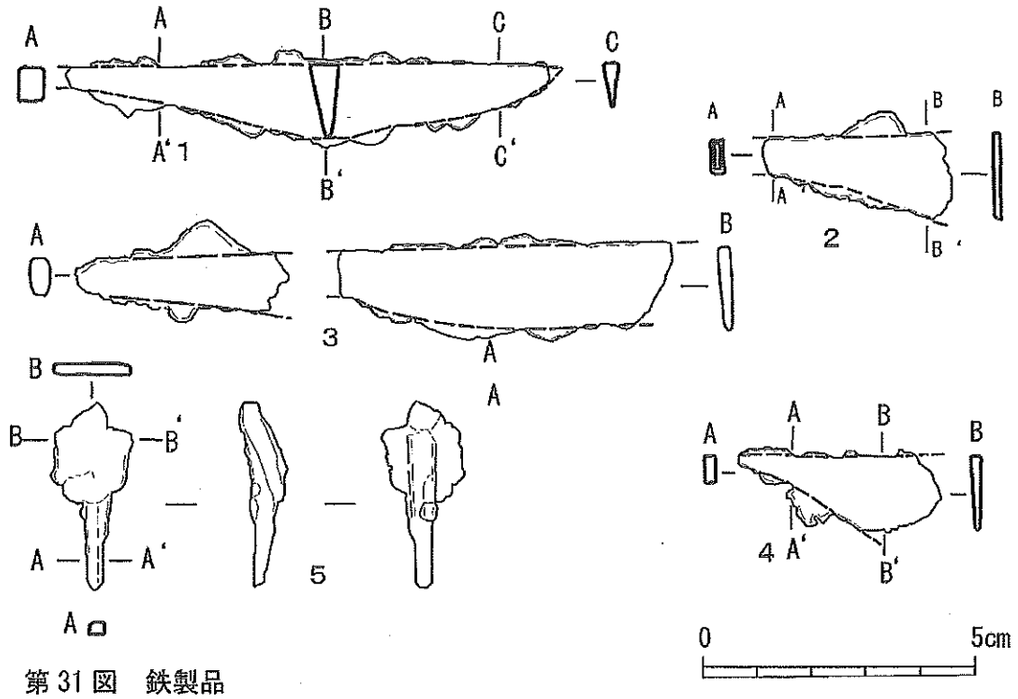
刀子は柄の太いタイプ（図1）、細いタイプ（図2,3,4）があり、身は図１の上縁は5mm弱と厚いが、他は2mm程度と薄手である。

出土遺跡をみると刀子や鉄鏃は伊波後原遺跡、勝連城跡、フェンサ城貝塚、大城グスク等のグスク時代の遺跡である。本貝塚のような砂丘の遺跡では初めての出土である。

表23　鉄製品観察一覧

単位:cm

no.	器種		長さ	最大幅	頭部厚	柄厚	観察事項	出土地
1	刀子	完形	8.9	1.6 (1.4)	0.55	0.4×0.6	先端部が破損(約2mm)ほぼ完形。刀部から柄部にかけては、緩やかに移行する。	ハE32Ⅴ最下部
2	刀子	破片	3.4 (破)	1.5	0.15	0.2×0.6	柄の部分は空洞。刀部の部分は薄い。刀子？	ハ柱穴No.59
3	刀子	破片		1.7 (1.5)	0.25	0.3×0.6	柄の部分はやや丸みを帯びる。(錆のためか)先端は破損。刀部の断面は2と類似する。	ハF22Ⅲ下 柱穴No.25
4	刀子	破片	3.7	1.3 (破)	0.15	0.2×0.4	頭部から刀部に徐々(0.8mm)に細くなる。1に比べて柄部が短いか、それとも破損しているかどうか不明。	ホT17Ⅲ20/30 .S80・W50
5	鉄鏃？	破片	3.4	1.3	0.2	0.3×0.2	芯の部分と鉄板の部分が分離する。側面観は反りが強い。	ハ柱穴No.50



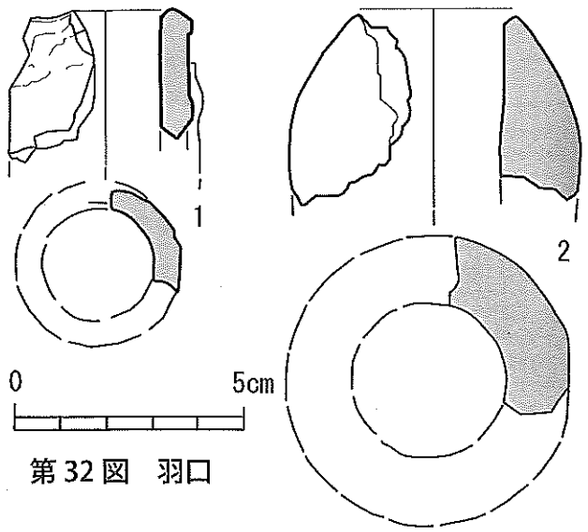
第31図　鉄製品

I　羽口

羽口と考えられるものは2点出土した。

図1は外径36.5㎜、内径24㎜、筒状を呈するもので厚さ8㎜と後述の図2に比べて薄手である。端部の横断面は丸味をおび、鉄滓が付着する。ハ地区I-28Ⅲ層の出土。

図2は外径64㎜、内径32㎜の筒状を呈するもので、厚さが15㎜で土器に比して厚い。残存長は35㎜で、端部の横断面は内面方向に舌状を呈するものである。その周縁は2〜3㎜幅の鉄分らしきものが溶け、アバタで、色調は火を受けたためか黒褐色が主で、部分的み黄褐色も認められる。ハ地区G-36Ⅲ層の出土である。



第32図　羽口

以上より両者ともその形態から、鉄を溶かすために利用したふいごの羽口と思われるが、報告例はなく、詳細は今後の資料の追加を待ちたい。

J　銭貨

開元通宝2点、乾隆通宝1点、寛永通宝3点の計6点出土した。表24に詳細を示した。開元通宝はいずれもホ地区T-18Ⅲ層10/20で出土。乾隆通宝はヘ地区C-29Ⅲ層0/10、寛永通宝はハ・ヘ地区Ⅱ層で出土した。

表24　銭貨観察一覧　(単位:cm、g)

no	表面	裏面	残存	直径	孔径	重さ	鋳造年	断面	備考	地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層レベル
1	開元通宝	文字？	完	2.95	0.7	3.7	621年	平ら		ホ	T-18	Ⅲ層10/20
2	開元通宝	無文	完	2.3	0.6	3.2	621年	平ら	字摩滅	ホ	T-18	Ⅲ層10/20
3	乾隆通宝	2文字	完	2.3	0.5	4.6	1735年	平ら	隷書、字面平ら	ヘ	C-29	Ⅲ層0/10
4	寛永通宝	無文	完	2.3	0.7	2.3	1626年 (寛永3年)	湾曲	昭和6年21波銭鋳 昭和7年大波銭鋳	ハ	F-18	Ⅱ層上部
5	寛永通宝	無文	完	2.4	0.7	2.9		平ら		ヘ	G-36	Ⅱ層
6	寛永通宝	無文	完				1636年			ハ	F-20	Ⅱ層下部

K　簪

図7が簪の頭部である。花弁は6枚でやや窪み、中央には径9㎜の円の中に、中央に1個、周囲に6個の丸を配する。裏面は花弁の接合部がずれ、周縁は1㎜の溝状を呈する。縦2.5cm（長），1.5cm（短），重さ1.94g，ハ地区G-24Ⅱ層の出土。

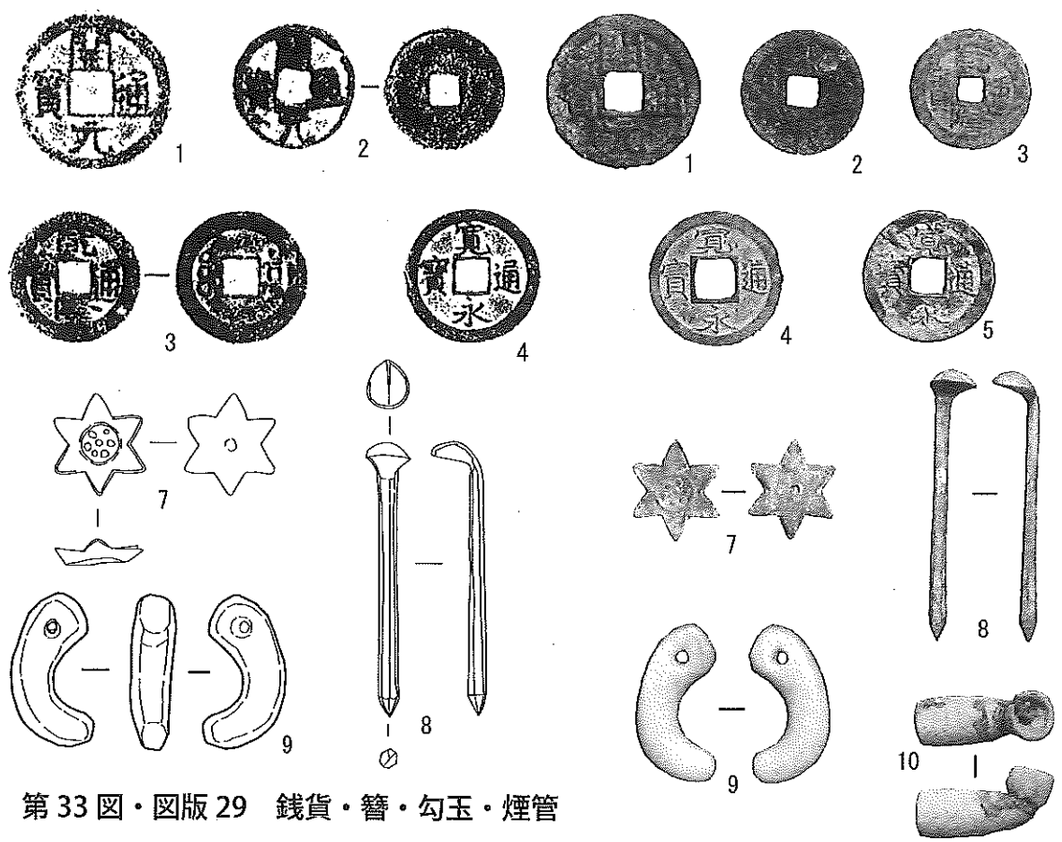
図8は完形でスプーン型である。先端は6面から削り尖がらす。大きさ縦5.85cm，横0.98cm，重さ4.05gハ地区F-16Ⅱ層下部の出土。

L　勾玉

図9は勾玉の完形で、光沢はない。孔の上方は研磨が認められ、紐ずれの可能性がある。断面はやや方形で、孔は0.17cmで、両面穿孔、孔の縁は丸味がある。縦2.9cm，横1cm，厚さ0.77cm，重3.9g，ハ地区H-44Ⅲ層10/20の出土。

M　煙管

図10は青銅製の煙管である。火皿径1.4cm，縦4.2cm，横1.5cm，厚さ1.4cm。ハ地区F-23の出土。



第33図・図版29　銭貨・簪・勾玉・煙管

N. 貝類

本調査でハ、ホ、ヘ地区で自然貝が多数出土した。

＜資料整理の方法＞

・出土した貝は他の遺物同様すべて採集し、集計した。

・集計は完形と殻頂、破片に分け、巻き貝は完形と殻頂、二枚貝は、巻き貝と同じように分け、さらに左右に分け、多い方を個体数とした。

・貝の同定はそれぞれサンプルを作成し、下記の貝類図鑑を参考した。

白井祥平 1977 『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書

吉良哲朗 1964 『原色日本貝類図鑑』保育社

波部忠重 1962 『原色日本貝類図鑑』保育社

＜結果＞

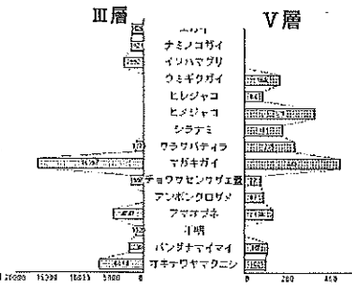
集計の結果、ハ・ホ・ヘ・ニ地区で多数の貝が得られた。本書では遺物包含層の上下がはっきりしているハ地区のⅢ層とⅤ層の貝種別出土量を掲載した。

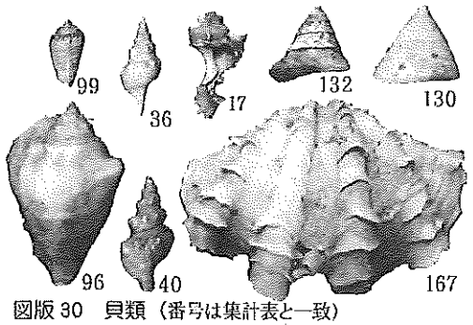
これによるとⅤ層では1枚貝2科3種、陸産貝3種。巻貝25科69種、二枚貝13科24種。Ⅲ層では一枚貝2科3種、陸産貝6種、巻貝科131種、二枚貝19科26種と種類、量ともⅢ層が多い。両層の貝の出土を比較するといずれの層もマガキガイが多く、Ⅲ層で26.3%、Ⅴ層 15.2%を占める。しかし、次ぎに多いものはⅢ層とⅤ層では異なり、Ⅲ層では小型の二枚貝イソハマグリ（4.8%）、ナミノコガイ（3.1%）、エガイ（2.9%）、チョウセンサザエ（3.3%）が多く採集され、Ⅴ層では大型の二枚貝ヒメジャコ（11.3%）、シラナミ（6.2%）、ヒレジャコ（2.9%）、ウミギクガイ（5.6%）、アンボンクロザメ（3.0%）が多く採集されている。

また、食用ではないが、陸産貝がオキナワヤマタニシ、パンダナマイマイがいずれの層でも多く、Ⅴ層で7.0%、Ⅲ層で15%を占める。

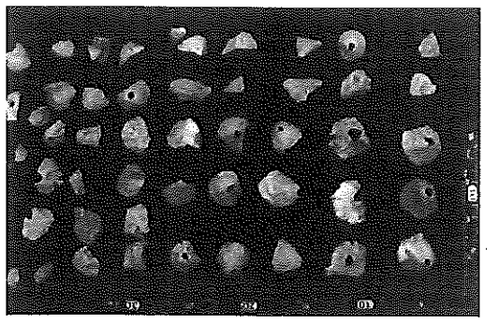
これらの貝以外に本貝塚ではフジツボ（写真）が多数出土した。この様な例は徳之島の犬田布貝塚で報告されている。

第34図　貝類層別棲息地比較





図版30　貝類（番号は集計表と一致）



図版31　フジツボ

表25　ハ地区Ⅲ層貝類出土量

番号	科	貝種	完/R	殻頂a/L	殻頂b	破	個体数
1	甲殻類	ウニ	6	7		41	23
2		パイプウニ	51	81		98	132
3	ツタノハガイ科	ベッコウガサ	3	6		4	9
4		オオベッコウガサ	78	193	18	256	271
5		不明	12	15	1	3	42
6	ミミガイ科	アナゴウ	4	22		33	26
7	キセルガイ科	ツヤギセル	27	31		12	58
8	陸産マイマイ	ウスカワマイマイ	6	14		22	20
9		オキナワヤマタニシ	3178	3636		453	6814
10		クンチャンマイマイ	3	6		55	9
11		パンダナマイマイ	966	1272	100	609	2238
12		コシダカマイマイ		5		2	5
13		不明	255	425	3	297	1320
14	クモニナ科	イトカケヘナタリ	42	152		82	194
15	アクキガイ科	アカイガレイシ	101	157		35	258
16		イボニシ	3	4		2	7
17		ガンセキボラ？	44	100		82	144
18		キナレイシ？	2	3		1	5
19		シラクモガイ	4	11		4	15
20		ツノレイシ	2	18		18	20
21		テツレイシ	84	213		216	297
22		ムラサキイガレイシ	3	6		3	9
23		レイシダマシ	19	35		5	54
24		不明	2	7		5	9
25	アマオブネ科	アマオブネ	1707	3040		556	4747
26		イガカノコ	1	5		2	6
27		オオマルアマオブネ	19	28		8	47
28		カノコガイ	75	371	338	285	446
29		キバアマガイ	6	14		8	20
30		コシダカアマガイ	35	61	1	8	96
31		シマカノコ	1	2			3
32		ニシキアマオブネ	164	322	1	405	486
33		マルアマオブネ	45	97		6	142
34	イトマキボラ科	不明	92	352	44	612	735
35		ウズラガイ	1	10		10	11
36		チトセボラ	8	53		92	61
37		ツノマタモドキ	6	7		4	13
38		ナガイトマキボラ				2	△
39		ナガニシ	4	13		6	17
40		ベニマキガイ	3	9		23	12
41		マルニシ	1	6		7	7
42		アカシマミナシ		1	6	19	1
43		アンボンクロザメ	80	1111		2870	1191
44		イトマキイモ			1	1	△
45		イボカバイモ	1	37		68	38
46		イボシマイモ	121	428		619	549
47		オトメイモ	6	33		89	39
48		クロザメモドキ	10	79		173	89
49		クロフモドキ	3	43		89	46
50		クロミナシ	3	35	12	87	38
51		コマダライモガイ	1	2	1	1	3
52		ゴマフイモ	2	14	2	21	16
53		コモンイモ？	9	30		98	39
54		サヤガタイモ	14	23		16	37
55		サラサミナシ	5	10	2	14	15
56	イモガイ科	サラサモドキ	13	110	2	251	123
57		ソウジョウイモ		1		7	1
58		タガヤサンミナシ	4	76		187	80
59		ツボイモ	2	48	1	143	60
60		ナガサラサミナシ		2		9	2
61		ニシキミナシガイ				2	△
62		ハナイモガイ？	1	4		10	5
63		ヒラカラマツ	9	13			22
64		ヒラマキイモ	10	23		28	33
65		ベッコウイモガイ				1	△
66		マダライモ	89	167	60	179	256
67		ミカドミナシ		13		43	13
68		ヤセイモ	36	85	1	141	121
69		ヤナギシボリイモ	37	220	918	549	257
70		不明	20	557		1655	577
71	エゾバイ科	ノシガイ	4	12		3	16
72	オカミミガイ科	オキヒラシイノミガイ		2			2
73	オキニシ科	オキニシ	16	59		63	114
74		シロナルトボラ	3	3		2	6
75	オニコブシ科	オニコブシ	9	22		87	31
76		コオニコブシ	262	574		419	836
77	オニノツノガイ科	オオシマカニモリ		3		3	3
78		オニノツノガイ	34	322	70	715	356
79		カニモリ	5	9		3	14
80		クワノミカニモリ	60	418	1	183	478
81		コベルトカニモリ	12	46		24	58
82		タケノコカニモリ	1	1			2
83	オリイレヨウバイ科	オリイレヨウバイ科	40	68		5	108
84		ヨフバイモドキ	170	345	3	9	546
85	クサベラガイ科	ヒザラガイ	130	209		17	339
86	サザエ科	カンギク	21	85		53	106
87		カンギク蓋	1	2			3
88		チョウサセンサザエ蓋	936	1061		110	1997
89		チョウセンサザエ	89	906		1630	995
90		ヤコウガイ蓋	17	23	39	45	41
91	ショクコウラ科	ショクコウラ	1	1	7		2
92	ソデボラ科	イボソデガイ	3	9		13	12
93		ウラスジマイノソデガイ	3	10		3	13
94		オハグロモドキ				1	△
95		クモガイ	6	533		2264	539
96		ゴホウラ	6	3	4	2	9
97		スイジガイ	1	155	1005	208	156
98		マイノソデ	3	5		9	8
99		マガキガイ	4557	11840	174	5326	16397
100		ムカシタモトガイ	7	15		7	22
101		ネジマガキ	9	23		4	32
102	タカラガイ科	キッコウダカラ？	1	2		3	3
103		コモンダカラ	1	6		6	7
104		ジュドウマクラ				1	△
105		ナシジダカラ		1			1
106		ナツメガイ？	3	23		31	33
107		ナツメモドキ	2	5		4	7
108		ネズミガイ	21	50		10	71
109		ハチジョウダカラ	3	12		13	15
110		ハツユキダカラ		2		6	2

番号	科	貝種	完/R	殻頂a/L	殻頂b	破	個体数
111		ハナビラダカラ	76	289		371	365
112		ハナマルユキ	34	340		544	374
113		ハルシャガイ？	2	193	1	453	195
114		フシダカラキイロダカラ	1	2		1	3
115		ホシダカラ	1	20		51	21
116		ヤクシマダカラ	9	157		287	202
117		不明	3	20		86	26
118	タケノコガイ科	タケノコガイ		5		5	5
119		ベニタケ		2		2	2
120	タマガイ科	アラゴマフダマ	1	4		2	5
121		クチグロタマガイ		2		2	2
122		トミガイ	5	10		5	15
123		リスガイ	30	71		17	101
124		不明	18	65		21	83
125	タマキビ科	不明	33	85		20	118
126	ワカムラガイ科	トウカムリガイ	3	8		7	11
127	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	2	3			5
128	ニシキウズ科	イシダタミ		1			1
129		オキナワイシダタミ	90	192		32	282
130		ギンタカハマ	20	61		292	81
131		クマノコガイ	24	128		116	152
132		サラサバティラ	250	878		2465	1273
133		ベニシリダカ	93	110		183	203
134		ニシキウズ	29	320		1049	349
135	フジツガイ科	アラレボラ	6	17		8	23
136		サツマボラ	5	14		15	19
137		シオボラ？	4	17		13	21
138		ボシュウボラ	1	1			2
139		ホラガイ	2	21		311	23
140		不明	9	29		22	38
141	フデガイ科	チョウセンフデ	3	5		5	13
142	フトコロガイ科	フトコロガイ	4	10	2	1	14
143	フネアマガイ科	フネアマガイ	6	8		1	14
144	マクラガイ科	シロアンボイナ		1		1	1
145		ルリグチマクラ	3	7		14	10
146		不明	17	27		84	54
147	ミミズガイ科	ミミズガイ		5		7	5
148	ムシロガイ科	アツムシロ	317	647		23	1175
149		不明	18	18			36
150	ヤツシロガイ科	イトカワトキワ	2	3		3	5
151		スジウズラ	4	16		30	20
152	リュウテン科	リュウテン	1	11	20	13	12
153		ウラウズガイ	2	4	5	7	6
154	イガイ科	ヒバリガイ	15	15	1	20	15
155	ウグイスガイ科	アコヤガイ	2	33		112	35
156	イタボガキ科	オハグロガキ	314	570		614	884
157		チサラガイ				1	△
158	ウミギクガイ科	ウミギクガイ	248	350	44	487	598
159	キクザルガイ科	不明	2	3		4	3
160	ザルガイ科	カワラガイ	30	41		43	41
161		リュウキュウザルガイ	29	36	209	38	65
162	シオサザナミ科	マスオガイ	61	68	2	52	129
163	シジミ科	シレナシジミ	38	86		103	86
164		シャゴウ	25	58		265	83

番号	科	貝種	完/R	殻頂a/L	殻頂b	破	個体数
165	シャコガイ科	シラナミ	169	143	1	969	169
166		ヒメジャコ	825	901		1670	901
167		ヒレジャコ	64	54	134	189	49
168	タマキガイ科	ソメワケグリ				1	△
169	チドリマスオ科	イソハマグリ	2992	2787	1	165	2992
170	ツキガイ科	クチベニツキガイ	3	2		2	5
171		ツキガイ		1		1	1
172	ニッコウガイ科	サメザラ	20	21		48	21
173		サラガイ	1				1
174		モチヅキザラ	19	22		8	49
175		リュウキュウシラトリ	44	23	2	19	67
176	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	27	50	2623	67	77
177	フジノハナガイ科	ナミノコガイ	970	951		57	1921
178	フネガイ科	エガイ	1826	1506	175	374	1826
179		リュウキュウサルボオ	254	208	39	160	462
180	マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	49	47	38	20	96
181		アラヌノメガイ	6	33		24	33
182		スダレハマグリ	1	1	1463	1	1
183		タマカガミガイ	1	1		1	2
184		ヌノメガイ	142	200	41	465	200
185		ホソシジミナシ	11	14		1	25
186		マルオミナエシ	9	11		3	20
187		ユウカゲハマグリ	1	1			2
188		リュウキュウアサリ	2	1		3	3
189		ヒメアサリ	17	14		12	17
190	ヒバガイ科	オオミノガイ	2	2			4
191	二枚貝	不明	4	15		16	19
192	不明	不明	34	62		31	96
193	–	シロアフリ？	8	23		32	31
194	–	スガイ？				2	△
195	–	オニノキバ		2			2
196	–	キイロイガイガレイシ	1	3			4
197	–	オオヒシガイ？	1	1		1	2

表27　フジツボ出土量

層	ハ	ホ	ヘ	合計
Ⅰ	8	1	0	9
Ⅰ・Ⅱ				
Ⅱ	66	20	28	
Ⅱ・Ⅲ	383	91	122	596
Ⅲ				
Ⅳ	24	2	2	28
Ⅴ	9	0	1	10
他	31	3	3	
合計	521	117	156	794

表26　八地区Ⅴ層貝類出土量

番号	科	貝種	完/R	殻頂a/L	殻頂b	破	個体数
1	甲殻類	ウニ				4	△
2		パイプウニ	3	1		1	4
3	ツタノハガイ科	ベッコウガサ？	1	3			4
4		オオベッコウガサ	26	27		35	53
5		不明		2			2
6	ミミガイ科	アナゴウ	1	6		6	7
9	陸産マイマイ	オキナワヤマタニシ	48	54		4	102
10		クンチャンマイマイ				3	△
11		パンダナマイマイ	45	62		45	107
13		不明	11	9	1		38
15	アクキガイ科	アカイガレイシ	8	8			16
17		ガンセキボラ		1		2	2
21		テツレイシ	6	6		2	12
25	アマオブネ科	アマオブネ	71	63		23	134
27		オオマルアマオブネ				2	△
28		カノコガイ	4	6		8	10
30		コシダカアマガイ	3	3			6
32		ニシキアマオブネ	9	11		15	20
33		マルアマオブネ		1			1
36	イトマキボラ科	チトセボラ		2		4	2
134	ニシキウズ科	ニシキウズ	8	11		29	19
40	イトマキボラ科	ヒメイトマキボラ		1		2	1
34		不明	12	19		69	31
42	イモガイ科	アカシマミナシ		1		3	1
43		アンボンクロザメ	19	68		156	87
45		イボカバイモ	9	13		10	41
47		オトメイモ	4	11		17	17
48		クロザメモドキ	1	1		1	2
49		クロフモドキ		2		5	2
50		クロミナシ				1	△
54		サヤガタイモ		1		1	1
		サラサミナシガイモドキ				1	△
56		サラサモドキ		2		6	2
58		タガヤサンミナシ		1		6	1
59		ツボイモ		1		1	1
61		ニシキミナシガイ		1		5	1
66		マダライモ	2	2			4
67		ミカドミナシ		2		4	2
68		ヤセイモ				2	△
69		ヤナギシボリイモ	2	5		8	7
14	ウミニナ科	イトカケヘナタリ	2	2			4
74	オキニシ科	シロナルトボラ		1		2	1
75	オニコブシ科	オニコブシ	2	3		5	5
76		コオニコブシ	10	11		8	21
78	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	4	17		14	21
80		クワノミカニモリ		5		5	5
84	オリレヨフバイ科	ヨフバイモドキ		1		1	1
85	クサズリガイ科	ヒザラガイ					
86	リュウテン科	カンギク	3	8		4	11
87		カンギク蓋	1	1			2
88		チョウサセンサザエ蓋	44	33		19	77
89		チョウセンサザエ	7	53		147	60
90		ヤコウガイ		1		39	1
90		ヤコウガイ蓋	1	1		3	2
94		オハグロモドキ				1	△
95		クモガイ	5	52		153	57

番号	科	貝種	完/R	殻頂a/L	殻頂b	破	個体数
96	ソデボラ科	ゴホウラ	1	24		46	25
97		スイジガイ		5		5	9
99		マガキガイ	162	281		126	443
106	クカラガイ科	ナツメガイ？	1	1		1	2
108		ネズミガイ	1	1			2
111		ハナビラダカラ	3	5		5	8
112		ハナマルユキ		3		11	3
115		ホシダカラ				1	△
116		ヤクシマダカラ	1	6		13	7
118	タケノコガイ科	タケノコガイ		1		1	1
123	タマガイ科	リスガイ	1	1			2
124		不明	2	3		1	8
125	タマキビ科	不明		1			1
129	ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	2	4			6
130		ギンタカハマ		4		18	4
131		クマノコガイ	9	33		27	42
132		サラサバティラ	49	98		245	235
133		ベニシリダカ	26	23	22	32	49
139	フジツガイ科	ホラガイ		4		27	4
143	フネアマガイ科	フネアマガイ		1		1	1
145	マクラガイ科	ルリグチマクラ				1	△
147	ミミズガイ科	ミミズガイ				2	△
148	ムシロガイ科	アツムシロ	2	2			4
150	ヤツシロガイ科	イワカワトキワ				1	△
151		スジウズラ		4		8	4
	巻き貝	不明	1	3		3	4
156	イタボガキ科	オハグロガキ	29	17	14	25	46
160	ザルガイ科	カワラガイ	8	6	3	1	14
161		リュウキュウザルガイ	6	3	4	1	9
161		不明	3	3		4	6
162	シオサザナミ科	マスオガイ	4	1	3	1	5
163	シジミ科	シレナシジミ	3	5	7	24	8
164	シャコガイ科	シャゴウ	29	21	20	19	50
165		シラナミ	107	74	70	170	181
166		ヒメジャコ	206	123	107	80	329
167		ヒレジャコ	50	34	34	37	84
168	タマキガイ科	ソメワケグリ	2		2		2
169	チドリマスオ科	イソハマグリ	24	14	12	1	24
172	ニッコウガイ科	サメザラ	2	2		5	4
175		リュウキュウシラトリ	2	1	2	2	3
176	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	5	4	4	3	9
177	フジノハナガイ科	ナミノコガイ	7	5	5		12
178	フネガイ科	エガイ	14	8	11	4	22
179		リュウキュウサルボオ	18	11	9	8	29
180	マルスダレガイ科	アラスジケマンガイ	1	2		1	2
181		アラヌノメガイ	2	2	1	2	2
182		スダレハマグリ			1	1	△
184		ヌノメガイ	21	19	11	26	40
186		マルオミナエシ	2	1	1	2	3
187		ユウカゲハマグリ			1	1	△
154	イガイ科	ヒバリガイ	1		1		1
155	ウグイスガイ科	アコヤガイ		11	9	72	11
158	ウミギクガイ科	ウミギクガイ	77	79	22	83	164
191	二枚貝	不明	1		1		1
193	–	シロアフリ？	2	2	2	1	4

第３章　調査成果

以上、発掘調査の成果を記述した。国道 58 号線を挟んだ各地区の調査について層や遺構、出土遺物から時代ごとに整理し、本貝塚の考古学的意義をまとめる。

主な調査区はハ地区、ホ地区、ヘ地区である。その調査から 17 世紀代の青磁、寶、寛永通宝、乾隆通宝や 11～12 世紀代の白磁、滑石製品、類須恵器、グスク土器。貝塚時代後期のくびれ平底土器が多数出土したことから 3 つの時期が営まれていたと思われる。

地区別にみると 17 世紀代の遺物は少ないが、主にハ・ホ・ヘ地区で確認される。

11～12 世紀のグスク移行期は、ハ・ホ・ヘ地区で得られているが、主体はハ地区である。ハ地区の中央より南側（9～28 ライン）からは柱穴が多数検出され、掘立柱建物や炉跡が想定される。沖縄で初めて滑石製石鍋が発見され、グスク時代の基準とされる類須恵器（嵩元政秀 1978）と共伴していること、さらに 11～12 世紀の玉縁口縁白磁碗が得られた。また、グスク土器も得られ、中には滑石を混入したものもあり、グスク土器の瘤状突起が滑石製石鍋を模倣したことが明らかになった（滑石製石鍋模倣土器）。また、グスク土器の破片からは籾らしき痕も確認されている。ハ地区Ⅲ層上部がグスク時代移行期の隆盛期であることが明らかになった。

貝塚時代後期はハ地区のⅢ層下部、Ⅴ層、ホ地区Ⅲ層、ヘ地区Ⅲ層にみられ、多数のくびれ平底土器や開元通宝、硬玉製勾玉が得られた。この時期の遺構としてはホ・ヘ地区で柱穴、ハ地区で炉址らしきものが検出され、遺物の出土量などや柱穴の配列から第 5 図に示したようなプランが想定される。また、前述の遺物以外に敲き石、磨石などの石器やヤコウガイ貝匙、ヤコウガイ有孔製品、二枚貝有孔製品、貝刃、マクラガイ、イモガイ、キバウミニナなどの巻貝加工品も出土した。特に二枚貝有孔製品（貝錘）は約 900 点得られ、大量の自然貝や獣魚骨類の出土も考慮すると貝塚後期の時期は漁撈への依存が高いことを示すものである。ニ地区は厚い砂層であるが、くびれ平底が数 10 点出土しており、貝塚時代後期の包含層の末端部分と考えられる。イ・ロ地区はほとんど遺物は検出されなかった。

また、ハ地区北側では（28～47 ライン）Ⅲ層とⅤ層の二枚の文化層が確認され（第 3・4 図）、明らかに時間差が見られた。グスク時代の掘立柱建物址や（滑石製石鍋、類須恵器・玉縁白磁碗）が砂丘で検出されことからグスク時代移行期と把握される。

食料としては貝塚後期にはイノシシ（未掲載）や大型貝、フジツボなどが考えられ、グスク時代移行期はグスク土器から籾圧痕が確認されたことから米などの穀物栽培が想定される。また、本遺跡の山手側に、肥厚口縁土器やアツソデガイ、ゴホウラなどの未製品が出土する熱田第 2 貝塚があり、両遺跡の状況から山手側から次第に海側に生活の場が移っていったことが窺える。

以上の状況から本遺跡は貝塚時代後期から住み始め、11～12 世紀ごろのグスク時代移行

期に隆盛期を迎え、その後 17 世紀以降の遺物が散見されることから、生活場の一部だったことが窺える。

本遺跡の C14 は次のような年代である。

（註）嵩元政秀 1978　「グスクについて」『南島史論』（二）

表28　C14測定結果

コード	遺跡	地区	グリッド	層	レベル	C14年代（1950年よりさかのぼる）	
N-3400	熱田貝塚	ハ地区	F-33	第Ⅴ層		1540+-65YBP	1490+-65YBP
N-3407	熱田貝塚	ハ地区	H-42	第Ⅲ層		1160+-70YBP	1130+-65YBP
N-3398	熱田貝塚	ハ地区	I-13	第Ⅲ層		1160+-65YBP	1130+-60YBP
N-3399	熱田貝塚	ハ地区	I-36	第Ⅲ層		1160+-80YBP.	1130+-80YBP
N-3406	熱田貝塚	ヘ地区	B-36	第Ⅲ層	20/30下	1360+-80YBP	1320+-75YBP
N-3397	熱田貝塚	ヘ地区	C-33	第Ⅲ層		1260+-70YBP	1220+-65YBP
N-3396	熱田貝塚	ホ地区		第Ⅲ層		1040+-65YBP	1010+-60YBP
N-3405	熱田貝塚	ホ地区	T-15	第Ⅲ層	20/30	1180+-70YBP	1140+-65YBP

依頼先　東京都文京区駒込二丁目28番45号　日本アイソトープ協会　C14の測定結果

表29　主要遺物の地区・層別出土　　凡例:●主体、○多、▲僅少

地区	層	後期										グスク						17C～				
	主な遺物	くびれ平底	二枚貝有孔製品	ヤコウガイ貝匙	ヤコウガイ有孔	クロチョウガイ	オオベッコウ	ゴホウラ	石器	貝類	開元通寶	勾玉	グスク土器	類須恵器	白磁	滑石	羽口	刀子	青磁	乾隆通宝	寛永通宝	寶	煙管
ハ地区	Ⅱ層							△						△	△	△			△		△	△	△
	Ⅲ層上	○											○	○	○	○	△	△					
	Ⅲ層下	●	●	○	△		○	○		●	△	△	△	△		△							
	Ⅳ・Ⅴ層	●	●	△	○	○	△	△	△	●													
ホ地区	Ⅱ層																						
	Ⅲ層上	●						△			△		△	△				△					
	Ⅲ層下	●	○						○	○	○												
	Ⅳ層		△							○													
ヘ地区	Ⅱ層													△						△			
	Ⅲ層	●	△						△	○			△	△					△				
	Ⅳ層																						
ニ地区	Ⅱ層	△	△					△						△					△				

沖縄タイムス 53.3/27 第3種郵便物認可

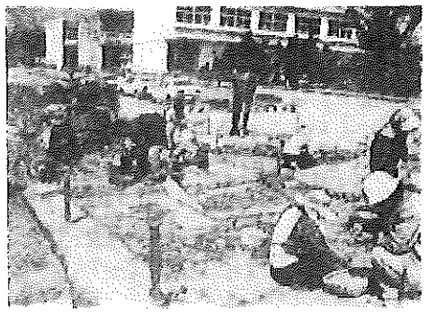
グスク移行期の遺跡と判明

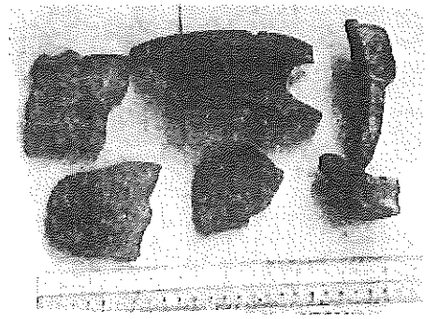
砂丘上は初めて

九州渡来の"石なべ"発掘

塚田員熱

教育





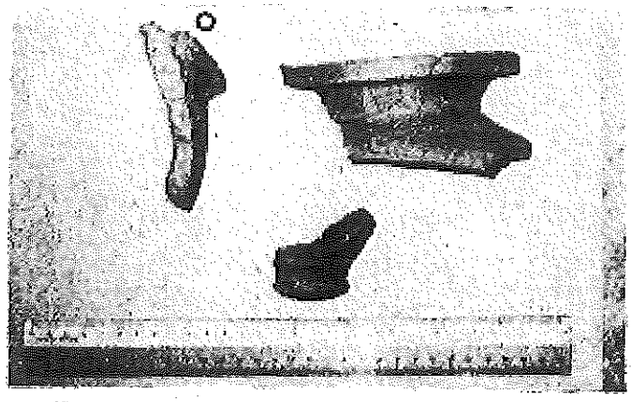
[illegible]

「移行期」の滑石なべが出土

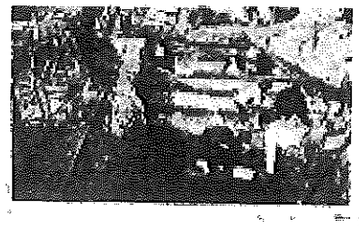
思納村の熱田員塚

新聞 沖縄 1978.3/26

8、9世紀もの



長崎あたりから持ち込む？



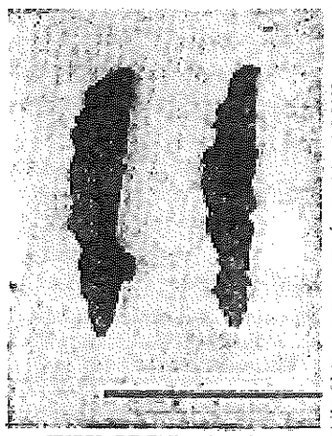
[illegible]

刀子みつかる

西宮市安宮植・恭田貝塚

貝塚時代ーグスク時代移行期　時代解明に期待

遺跡発見した7～8世紀前の住居跡の柱穴、中央の三角テントが炉の跡



国宝級時代の刀や鉄刀剣の石なべ、鉄器などから、国道路沿は紀元十二世紀からの十三世紀のものとわかった。また鉄の刀子（ことがた）も見つかり、それに大きな鉄が使われていたことも推測された。さらに刀があるとは推測されていた。

貝塚時代グスク時代移行期の「謎の人」の遺跡

「人の遺跡」として注目される

貝塚時代ーグスク時代移行期　時代解明に期待

西宮市内の安宮植・恭田貝塚の「謎の人」の遺跡は、貝塚時代からグスク時代移行期の遺跡として注目される。遺跡は、現在の中央、中央の三角テントが炉の跡。

遺跡は、国道2号線の拡幅工事に伴う緊急調査。調査は、現在、国道小中学校校門をはさんだ国道沿いの約二千平方メートル。調査は、国道の拡幅工事に伴う緊急調査。調査は、現在、国道小中学校校門をはさんだ国道沿いの約二千平方メートル。調査は、約三カ月。調査は、約三カ月。

調査は、国道沿いの約二千平方メートル。調査は、約三カ月。調査は、国道沿いの約二千平方メートル

沖縄県文化財調査報告書　第23集
恩納村熱田貝塚発掘調査報告書
印 刷 ： 1979 年 3 月 30 日
発 行 ： 1979 年 3 月 31 日
編 集 ： 沖縄県教育委員会
TEL098-866-2731
印　刷　文進印刷株式会社